

# 国史跡 山王囲遺跡

発掘調査報告書Ⅱ

1997

一迫町教育委員会

# 国史跡 山王囲遺跡

発掘調査報告書Ⅱ



1 第2、3号竪穴住居跡（北から）

Pit dwelling 2 and 3



2 第3号竪穴住居跡

Pit dwelling 3

図版 2



1 第8号竪穴住居跡（北から）

Pit dwelling 8



2 第7号溝跡（II区）

Ditch 7



1 K区全景（東から）  
View of excavated trench



2 第7号溝跡断面（K区）  
Soil profile of ditch7

図版 4



1 第8号土器埋設土壤  
Pit8 with buried pottery



2 第8号土器埋設土壤半截状况  
Bisected pit8 with buried pottery



3 第8号土器埋設土壤  
Pit8 with buried pottery

## 序

山王畠遺跡は昭和46年に国の史跡に指定されました。町ではこれまで、その保護と重要性の理解に努めてまいりました。

史跡整備の一環として始まった発掘調査は本年度で第2次を迎えるました。今年の調査では第1次調査に引き続き、縄文時代、弥生時代の遺構群の検出を目的とした調査が行われ、弥生時代前期の堅穴住居跡、溝跡、土器棺を埋めたお墓など数多くの重要な遺構がみつかっています。中でも溝は東北地方では初めて発見された規模のものであり、当時の人々の高度な文化、技術を解明していく上で貴重なデータとなるものです。

本書は平成8年度に国庫補助を得て実施した山王畠遺跡の第2次発掘調査の成果の報告書であります。これらの成果が研究者、市民の皆様に広く活用され、地域の歴史の解明と文化財の保護の一助となれば幸いです。

最後にこの調査に参加された皆様方、本書を作成するにあたってご助言、ご協力下さいました諸先生方、ならびに関係機関の方々に厚く御礼申し上げます。

平成9年3月

宮城県一迫町教育委員会

教育長 遠藤昭吉

## 例 言

- 1 本書は宮城県栗原郡一迫町字山王に所在する国史跡山王廻遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は国庫補助事業として一迫町教育委員会が調査主体となり、史跡整備の目的で平成8年8月1日から10月4日にかけて面積約1,280㎡にわたって行った。
- 3 以下に調査組織を掲げる。

調査担当 一迫町教育委員会

調査指導 須藤 隆（東北大学文学部教授）

加藤道男（宮城県教育庁文化財保護課調査第一係係長）

調査協力機関 東北大学文学部考古学研究室

宮城県教育庁文化財保護課

東北歴史資料館

調査員 阿子島香（東北大学文学部助教授）

古川一明（宮城県教育庁文化財保護課技術主任）

佐藤憲幸、三好秀樹、藤村博之（宮城県教育庁文化財保護課技師）

富岡直人（東北大学文学部助手）

大場亜弥（一迫町教育委員会総務課技師）

調査補助員 水見淳哉（東北大学大学院博士課程）、伊藤典子（東北大学大学院研究生）、石田 真、藤原弘明、高橋 哲、玉橋さやか、小山有希、高木暢亮（東北大学大学院修士課程）、坂田由紀子、西井 亨、北村浩貴、鹿又真隆、五十嵐満、川原 啓、熊谷宏靖、澤田純明、杉山陽亮、池谷考史、千葉直樹、三上紅美子、丹羽美智子、栗野昌之、京野恵子、廣田英一郎、藤田直行、川口貴史、真田朱美、竹ヶ原亜希、鈴木寿幸、小原恒夫、神田和彦、飯塚洋介、鎌田英司、羽石智治、早瀬亮介、馬場龍一郎（東北大学文学部学生）

調査作業員 佐藤幸一、津田小砂、曾根茂子、曾根義秋、笠川義春、久我とも子、門伝保輝、大豆田むつき、佐藤運之丞、菅原みさ子、松田節子、金田せつ子、佐藤たけ子、阿部辰江、三浦精喜、菅原清喜、佐藤ひさよ（一迫町）

4 編集は須藤 隆のもとに、大場亜弥、富岡直人、水見淳哉がこれを進め、一迫町教育委員会、東北大学文学部考古学研究室の構成員が整理・分析を行った。以下に資料整理・分析作業の体制を掲げる。

整理参加者 伊藤典子、高橋 哲、玉橋さやか、小山有希、坂田由紀子、西井 亨、鈴木 純、北村浩貴、

鹿又喜隆、川原 啓、熊谷宏靖、池谷考史、千葉直樹、川口貴史、丹羽美智子、京野恵子、  
真田朱美、竹ヶ原亜希、鈴木寿幸、小原恒夫、神田和彦、飯塚洋介、鎌田英司、羽石智治、  
早瀬亮介、馬場龍一郎（東北大学文学部）、斎藤幸子、佐藤勝子、菅原みさ子、佐藤たけ子、  
阿部長江、大橋道子、井上文子、黒沢まゆみ、佐藤幸一、佐藤運之丞（一迫町）

5 調査にあたって、次の方々のご協力とご助言をいただいた。

藤沼邦彦氏（東北歴史資料館）、荒井 格氏（仙台市教育委員会文化課）

6 調査報告書をまとめるにあたり、以下の方々に分析を依頼した。

阿子島功氏（地形）、鈴木三男氏（植物遺存体）、吉川純子氏（大型種子）、奈良貴史氏（人骨）、  
鈴木敏彦氏（人齒）、蟹澤聰史氏（石材）、安達三郎氏、宇野亨氏、何一偉氏（レーダ探査）

7 自然科学分析はパリノ・サーヴェイに依頼し、詳細な報告を受け取った。本報告書に要約した内容を掲載した。

8 遺物の撮影はいろは写房（種野彰子）が行った。

9 七色については『新版上色帖』（小山正忠・竹原秀雄：1994）を参照した。

10 遺物図面、写真図版中の（ ）内の番号は属性表中の登録番号に対応する。

11 本報告書の執筆分担は、文章末（ ）内に付記した。

# 目 次

第1章 調査の目的 .....	1
第2章 調査の概要 .....	3
第1節 調査の方法 .....	3
第2節 調査の経過 .....	3
第3章 調査の成果 .....	4
第1節 層序 .....	4
第2節 遺構 .....	5
第3節 遺物 .....	14
第4章 結語 .....	36
付章1 山王廻遺跡におけるレーダー探査の成果 .....	38
はじめに .....	38
第1節 探査結果 .....	38
付章2 山王廻遺跡の地形的環境 .....	42
第1節 山王廻遺跡の立地環境の地形学的な問題点 .....	42
第2節 山王廻遺跡の立地する微地形と土層区分 .....	43
第3節 微地形形成史の作業仮説 .....	46
付章3 繩文時代晚期・弥生時代の古環境変遷 .....	48
はじめに .....	48
第1節 試料 .....	48
第2節 分析方法 .....	48
第3節 化石の産状 .....	48
第4節 堆積環境の変遷 .....	51
第5節 繩文時代以降の周辺植生 .....	52
第6節 炉の燃材料 .....	52
付章4 繩文時代包含層出土大型植物化石の分析 .....	54
第1節 試料について .....	54
第2節 各層の堆積物と出土した分類群 .....	54
第3節 層相と大型植物化石より見た堆積環境 .....	55
第4節 特筆すべき分類群 .....	55
付章5 山王廻遺跡合せ口土器棺出土の人歯および人骨 .....	59
はじめに .....	59
第1節 所見 .....	59
第2節 まとめ .....	61

## 図 版 目 次

- 第1図版 山王廻遺跡発掘区配図図  
 第2図版 山王廻遺跡遺構配置図  
 第3図版 山王廻遺跡遺構配置図  
 第4図版 山王廻遺跡出土土器大形図  
 第5図版 山王廻遺跡出土土器実測図  
 第6図版 山王廻遺跡出土土器実測図

- 第7図版 山王廻遺跡出土土器  
 第8図版 山王廻遺跡出土土器  
 第9図版 山王廻遺跡出土土器  
 第10図版 山王廻遺跡出土土器  
 第11図版 山王廻遺跡出土土器  
 第12図版 山王廻遺跡出土土器

## 写 真 図 版

- P.L. 1 G、H、I、I北、I南、M区全景およびN  
区全景  
 P.L. 2 E区全景および第2号配石遺構  
 P.L. 3 第6号土器埋設土塙および第3号堅穴住居跡  
 P.L. 4 ピット305およびピット337  
 P.L. 5 山王廻遺跡出土土器  
 P.L. 6 山王廻遺跡出土土器  
 P.L. 7 山王廻遺跡出土土器  
 P.L. 8 山王廻遺跡出土土器  
 P.L. 9 山王廻遺跡出土土器  
 P.L. 10 山王廻遺跡出土土器  
 P.L. 11 山王廻遺跡出土土器  
 P.L. 12 山王廻遺跡出土土器  
 P.L. 13 山王廻遺跡出土土器

- P.L. 14 山王廻遺跡出土土器  
 P.L. 15 山王廻遺跡出土土器  
 P.L. 16 山王廻遺跡出土土器  
 P.L. 17 山王廻遺跡出土土器  
 P.L. 18 山王廻遺跡出土土器  
 P.L. 19 山王廻遺跡出土土器  
 P.L. 20 山王廻遺跡出土土器  
 P.L. 21 山王廻遺跡出土土器  
 P.L. 22 山王廻遺跡出土土器  
 P.L. 23 山王廻遺跡出土土器  
 P.L. 24 山王廻遺跡出土土器  
 P.L. 25 山王廻遺跡出土土器  
 P.L. 26 山王廻遺跡出土土器  
 P.L. 27 山王廻遺跡出土土器、土製品、石製品  
 P.L. 28 山王廻遺跡出土土器、土製品、石製品、動物遺存体

## 挿 図 目 次

- 第1図 山王廻遺跡位置図 ..... 2  
 第2図 第2、3号堅穴住居跡(F・M区) ..... 6  
 第3図 第8号堅穴住居跡(M区) ..... 8  
 第4図 第2号配石遺構(E区) ..... 10  
 第5図 第7号溝跡 ..... 10  
 第6図 第6、7、8、9号土器埋設土塙 ..... 11  
 第7図 ピット305、306、337、338、339 ..... 13  
 第8図 山王廻遺跡出土土器拓影 ..... 16  
 第9図 山王廻遺跡出土土器拓影 ..... 17  
 第10図 山王廻遺跡出土土器拓影 ..... 18  
 第11図 山王廻遺跡出土土器拓影 ..... 19  
 第12図 山王廻遺跡出土土器拓影 ..... 20  
 第13図 山王廻遺跡出土土器拓影 ..... 21  
 第14図 山王廻遺跡出土土器拓影 ..... 22  
 第15図 山王廻遺跡出土土器拓影 ..... 23  
 第16図 山王廻遺跡出土土器拓影 ..... 24  
 第17図 山王廻遺跡出土土器拓影 ..... 25  
 第18図 山王廻遺跡出土土器拓影 ..... 26  
 第19図 山王廻遺跡出土土器拓影 ..... 27  
 第20図 山王廻遺跡出土土器拓影 ..... 28  
 第21図 山王廻遺跡出土土器拓影 ..... 29  
 第22図 山王廻遺跡出土土器製品 ..... 31  
 第23図 山王廻遺跡出土石製品 ..... 33  
 第24図 山王廻遺跡出土木製品 ..... 35

- 第2図 バイオメトリックパルスレーダーシステム ..... 38  
 第3図 アンテナ#3の受信電圧(a) 測線3(b)  
測線8(b) ..... 39  
 第4図 アンテナ3で受信されたF区の水平断面 ..... 39  
 第5図 アンテナ#3で受信されたF区の水平断面図 ..... 40  
 第6図 アンテナ3で受信されたG区の水平断面図 ..... 41  
 第7図 アンテナ3で受信されたG区の水平断面図 ..... 41  
 付章2  
 第1図 大正5年測1:50,000地形図×2倍 山王廻遺跡は長崎川の川の字のところ ..... 44  
 第2図 震起伏の詳しい測量図(明治大学 1962測量 等高線間隔0.5m 高尺1/400原図より) ..... 44  
 第3図 自然堤防の原形をなす、浜水ローブ層の地山層  
("きれいな砂礫層")の上限高さ分布 ..... 45

- 付章3  
 第1図 模式史状図および分析層位 ..... 49  
 第2図 主要珪藻化石群集の変遷 ..... 49  
 第3図 花粉化石群集の変遷 ..... 50  
 付章4  
 第1図 山王廻遺跡出土大型植物化石 ..... 57  
 第2図 山王廻遺跡出土大型植物化石 ..... 58  
 付章5  
 第1図 山王廻遺跡出土ヒト乳歯 ..... 59

## 付 章

- 第1図 探査レンチと測線 ..... 38

## 第1章 調査の目的

国史跡山王畠遺跡の発掘調査は、1994年度に策定された史跡整備計画にもとづき、1995年から1999年までの5ヵ年の予定で進められることとなった。第1次調査は、1995年7月から9月にかけて実施され、多くの重要な成果がえられた。

山王畠遺跡は、第1次調査の結果、縄文時代晩期から弥生時代中期末、さらに古墳時代、古代にかけての大規模な複合遺跡であることが明らかになった。ことに微高地南半部において、縄文時代晩期の堅穴住居跡の柱穴が多数検出され、2棟の住居跡の柱配置が確認された。また、その東に縄文時代の堅穴住居跡と推定される深く掘り込まれた遺構の一部が発見された。これらの堅穴住居跡をはじめとする多くの遺構が検出されたことから、晚期の居住域がさらに北側にひろがる可能性が考えられた。

微高地の北西部では、弥生時代前期後半の山王Ⅲ層式期の堅穴住居跡が2棟検出され、精査の結果、その住居構造や、2回程の建て替えがあることなどが明らかになった。さらに、配石造構、埋設土器群など弥生時代前期に属するとみられる遺構が多数発見された。また、微高地北辺においても1965(昭和40)年の調査で弥生時代前期の包含層、遺構が確認されている。このように弥生時代の遺構、包含層が遺跡北半のひろい範囲に分布することから、山王畠遺跡が規模の大きい弥生集落であることが明らかにされた。

自然堤防西側にひろがる後背湿地では、畔状の高まりが北に向かって2条のびていることが確認され、弥生時代前期後半の水路、水田跡が存在する可能性が予想された。

微高地北辺では1965年の調査で縄文時代晩期の土器、石器、有機質遺物を包含した泥炭層が検出されている。その後のボーリング調査によって自然堤防の西側にも泥炭層の分布が確認されており、微高地縁辺に泥炭質の遺物包含層が堆積していると推定された。

このような調査成果にもとづき、第2次調査では以下の①から⑤の課題を掲げた。

①晚期集落の解明 第1次調査にひきつづき、微高地南半部の晩期集落の構造とひろがりを明らかにすることを第1の課題とした。

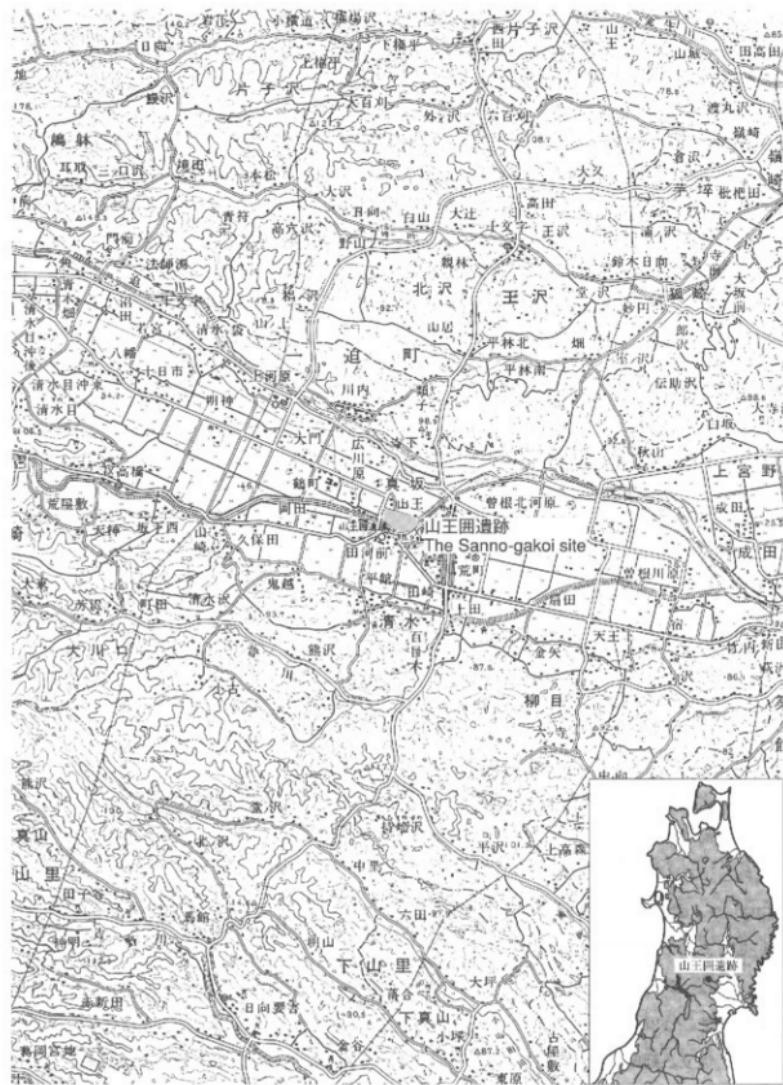
②弥生集落の解明 微高地北半で検出された弥生時代前期の堅穴住居跡とその周辺の遺構を調査し、弥生集落の構造の究明を目指した。

③弥生水路、水田跡の追究 微高地縁辺で検出された畔状遺構の周辺を精査し、弥生時代の水路跡、水田跡の検出を目指した。

④泥炭層の検討 1997年度には、泥炭層について、保存、整備のために精査することを予定しており、その調査体制、方法を検討するため、今回の調査で試掘を計画した。1995年度の調査で畔状遺構が検出されたI区で、泥炭層が確認され、縄文時代終末と弥生時代の遺物が出土している。今回の調査ではこのI区で泥炭層を一部掘り下げ、その状況を検討することとした。

⑤遺跡北東部における遺構群の確認 自然堤防の北西部側から北中央部にかけても、1965年の調査区と1995年度の第1次調査区との間で、縄文時代晩期から弥生時代の遺構の検出に努めた。

(京藤)



第1図 山王周遺跡位置図 [Scale 1 : 50000]

Location of the Sanno-gakoi site

国土地理院発行「岩ヶ崎」

## 第2章 調査の概要

### 第1節 調査の方法

調査にあたって第1次調査と同様に一辺3mのグリッドを基準とした。第1次調査で縄文時代の遺構群が多数検出されたK区をさらに東側と北側に拡張し、遺構の検出を進め、遺構群の時期、位置関係、および性格の把握に努めた。また、F区とG区の間にM区を設け、微高地の北西部で検出された第2、3号竪穴住居跡や第1号配石遺構など、弥生時代の遺構群のあり方を検討した。さらに、微高地縁辺で検出された畠畔状遺構の性格を明らかにするため、I区の北側と西側を拡張した。また、弥生時代の溝（第7号溝跡）の性格を明らかにするためにI南、N、O1～9区を設定した（第1図版）。

H、K区に試掘トレーンチを設け層の堆積状況を観察し、遺跡の立地する自然堤防の形成過程について考察を行った。また、東北大考古学研究室所有ソキア製トータル・ステーションによって、遺構出土の遺物を中心として可能な限り遺物出土位置の記録を行った。遺構の埋土についてはフルイにかけ微細遺物の検出を実施した。

### 第2節 調査の経過

第2次調査は8月1日より開始された。8月1日にF・M・G・I・K区、2日にE区、21日にI西区、28日にI南・N区を設定した。表土除去を2HにF区、5日にG・H・I・M区、6日にG・H・I・K区、7日にE・K区、8・9日にK区、22日にI西・E区北側・G区南側、28日にI南・N区を行った。

8月5日から9月20日にかけて各遺構の精査を行った。第2、3号竪穴住居跡の精査を、F区では8月6日、M区では8月19日より開始した。8月6日にM区で第6号土器埋設土壇を検出した。22日にK区で第7号溝跡を検出した。27日にE区で環状石斧が出土した。9月3日にI区の北壁にそって層序観察のための試掘トレーンチを設定し、掘り下げを行った。4日にE区で第9号土器埋設土壤を検出した。6日にE区でビット338を検出した。9日にK区で第8号土器埋設土壤を検出した。12日にM区で第8号竪穴住居跡を検出した。

9月14日午後2時から現地説明会を行った。

9月17日にH区で層序観察のため試掘トレーンチを設定し、掘り進めた。K区でビット337より石製小玉4点が出土し、27日にはさらに2点が出土した。20日にK区で層序観察のための深掘区を設定し、精査した。同日、第8号土器埋設上塙出土の合せ口甕棺のとり上げを行った。第7号溝跡の範囲確認のため、24日から26日にかけてO1～9区を設定し、O1～7区で第7号溝跡を検出した。12日に東北大鉢木三男氏が来跡し、植物遺存体の出土状況の、25日には山形大学阿子島功が来跡し、地形の観察を行った。26日にパリノ・サーヴェイが自然環境分析的目的として土壤サンプルの採取を行った。

遺構および遺物の出土状況の諸記録は隨時行い、10月4日に作業を終了した。

10月24日には東北歴史資料館の協力で、K区第7号溝跡の土層断面の剥ぎとりを行った。

(大場)

## 第3章 調査の成果

### 第1節 層序

基本層序は第1次調査の報告に従い、第2次調査であらたに確認された層序について以下に記す。

#### H区試掘トレンチ（第2回版）

南壁際を長さ6mにわたり10層上面から深さ約1mまで試掘した結果、10a層から10m層の13枚の層が認められた。10a層は粘土質シルトであり、10b層以下はシルト、または砂である。層は全体的に東に向かって傾斜し、ラミナ状に堆積しており、水成堆積と考えられる。最下部で、自然堤防を形成する砂礫堆であると考えられる11層が確認された。10a層から10m層、11層では遺物は出土しなかった。

#### I区試掘トレンチ（第2回版）

I区の北壁にそって試掘トレンチを設定し、深さ約1.4mまで9層以下の堆積状況を観察した。その結果601～612層の12枚の遺物包含層を確認した。

601層は褐色灰色砂質シルトで鉄分と炭化物を多く含む。

602層は黒褐色のシルト質で粗砂、鉄分を少量含む。晩期V期～弥生IIb期の土器が出土している。

603層は黒色のシルトで炭化物を多量に含み、604層由来の粘土粒を少量含む。晩期IV期～弥生IIb期の土器が出土している。

604層は灰色の粘土層である。晩期V期～弥生IIb期の土器が出土している。

605層は礫を含んだ砂層または礫層であり、土色、粒度、礫の大きさによりa～dに細分される。605a層は黒褐色の砂質シルトで、晩期IV期～弥生IIb期の土器が出土している。605b、c層は褐色の中砂である。605d層は灰黄褐色砂質シルトで晩期V期、弥生IIb期の上器が出土している。

606層は黒色の粘土質シルトで晩期VI期～弥生IIb期の土器が出土している。

607層は黒褐色の粘土質シルトである。

608層は黒色の粘土で609層は褐色のシルトである。

610層は含まれる礫の人さから610a、bの2枚に細分される。晩期IV期～VI期の土器、動植物遺存体の出土が確認されている。610a層からは円盤形石器、磨製石斧が、610b層からは土版が出土している。610a、610b層ともに褐色の粗砂である。

611層は褐色の粗砂で晩期V期の土器、木製品が出土している。

612層は黒褐色の粘土である。

#### I西区（第2回版）

I区の西側に拡張したI西区では5層と9層との間に合計30枚の層が確認された。層厚は10～20cm程度であり、せまい範囲に分布する。これらは砂質シルトまたは砂の層であり、水成堆積と推定される。遺物の出土はみられない。

**K区（第3回版）**

第2次調査では調査区を北へ拡張した結果、第1次調査の層序に、新たに確認された層が加わり、層名の変更を余儀なくされた。

5、6層はK区北寄りに分布する遺物包含層でそれぞれG～J区の5、6層に対応すると考えられる。6層において第8号上器埋設土壤が検出されていることから、6層は弥生時代前期の生活面であった可能性が高い。

また、8a層、8b層はそれぞれ第1次調査の8、9層と考えられる。遺物は晩期IV期から弥生IV期までの土器が混在することからこれらの層中の遺物は2次堆積と推定される。

9、10層はそれぞれG～J区の9、10層に対応する。

**K区試掘トレンチ（第3回版）**

発掘区北壁際東寄りに試掘トレンチを設定し、10層上面から1.5mまで掘り下げた結果、801～810までの10枚の層が確認された。801、802層はシルト、803層は砂、804、805層はシルト質粘土、806および810層は疊層である。807～809層は砂層である。これらはラミナ状の堆積が観察されるなど、水成堆積と推定される。遺物は出土していない。

（大場）

## 第2節 遺構

### 1) 竪穴住居跡

第1次調査から継続し、F区とF区の西側に拡張したM区において、第3号竪穴住居跡と第2号竪穴住居跡を精査した。またM区中央北寄りで第8号竪穴住居跡を検出し、精査を行った。

#### 第2号竪穴住居跡（第2回）

第2号竪穴住居跡はF区北寄りで検出された。平面形は直径5.6mの不整円形を呈する。壁上部は第3号竪穴住居の拡張で失われており、残存する竪穴の深さは5～15cmである。壁溝の痕跡が竪穴の壁際に断続的に認められた。

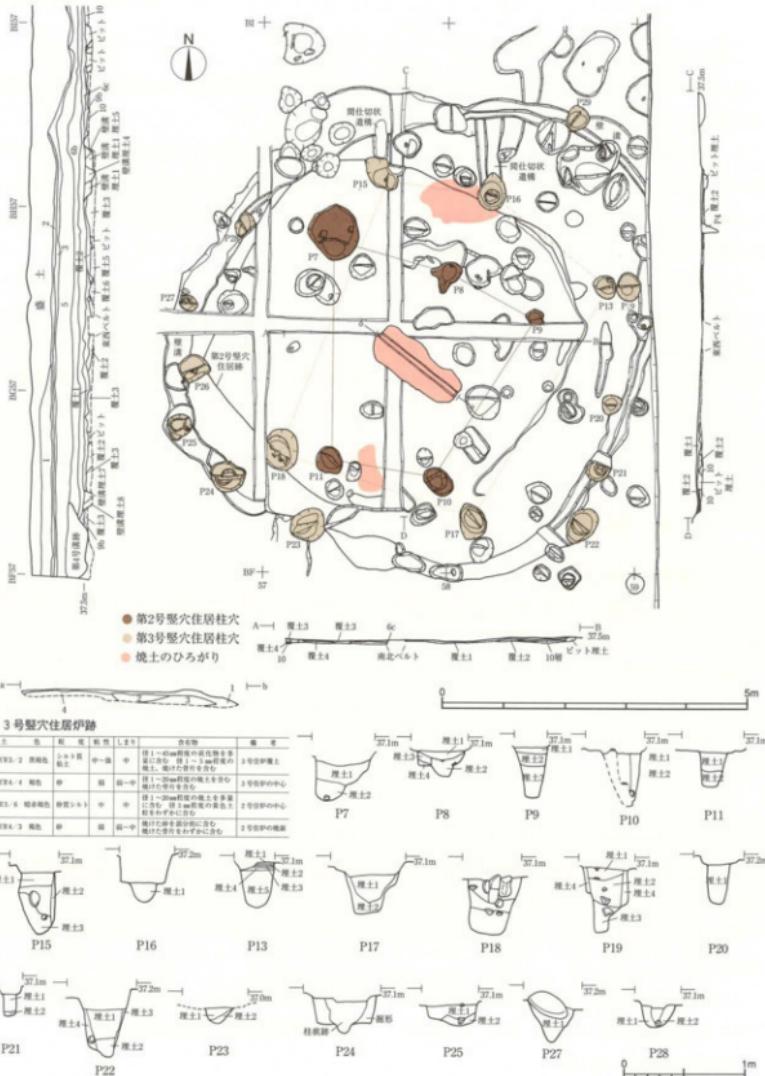
主柱穴と推定される柱穴はP7～11の5基が検出されている。それぞれの主柱穴の間隔はP7とP8の間が2m、P8とP9が1.6m、P9とP10が3.1m、P10とP11は1.8m、P11とP7は3.5mである。主柱穴は深さ30～50cm程度である。竪穴の中央やや南東寄りに重複する炉が2基（F1、F2）検出されている。炉の重複関係と位置からF1が第2号竪穴住居跡に伴うと推定される。

第2号竪穴住居跡は床面および覆土から弥生IIb期の山王Ⅲ層式土器が出土しており、この時期に帰属すると考えられる。

この竪穴住居は平面形、規模の点で岩手県滝沢村湯舟沢遺跡（根生他 1986）、軽米町馬場野Ⅱ遺跡（工藤他 1986）、宮古市上村貝塚（小田野他 1991）で検出されている弥生時代前期の竪穴住居跡と類似する。

#### 第3号竪穴住居跡（第2回）

第3号竪穴住居跡は、第2号竪穴住居跡と重複し、直径約8mの不整円形を呈する。第3号竪穴住居跡は第2号竪穴住居跡を拡張して建て替えられている。壁上部は大きく削平されている。また、周囲にひろがる10層と類似した黄色粘土による貼り床が床面をひらく覆っている。



第2図 第2、3号竪穴住居跡(F・M区)

Plan and sections of pit dwelling 2 and 3

柱穴P15、P16、P13、P17、P18の5基が主柱穴と推定される。主柱穴の間隔はP15とP16で1.6m、P16とP13で2.4m、P13とP17で4.3m、P17とP18で3.4m、P18とP15で4.8mであり、柱配置は比較的整った長方形を呈する。それぞれの柱穴の深さは40~60cm程度である。

伊賀F2とF1は重複し、F2がF1の上層にある。したがってF2は拡張住居第3号竪穴住居跡に伴うと判断された。この伊賀跡は不整形を呈し、中に拳大の焼けた礫点が認められた。

周囲には壁溝があげられ、幅は約20~80cm、深さ5~15cm程度である。また東側の壁溝では壁の痕跡が認められた。壁溝に沿って壁柱穴と推定されるP19、P20、P21、P22、P23、P24、P27、P28、P29、P30が検出されている。壁柱穴の間隔は1~1.5mで、それぞれの深さは20~40cm程度である。

また、北側の壁溝近くに間仕切り状遺構が2条検出されている。竪穴住居跡北寄りの主柱穴P15、P16と壁溝の間にみられる長方形を呈するプランで、P15に伴う間仕切り状遺構は幅25cm、長さ65cmで、P16に伴う間仕切

## 第2.3号竪穴住居跡

番号	主柱穴	副柱穴	柱	柱幅	柱高	柱性	しまり	主柱穴	副柱穴	柱	柱幅	柱高	柱性	しまり
P1	10YR4.4 黒褐色	シルト	中	中	中	中	無	10YR4.4 黒褐色	シルト	中	中	中	中	無
P2	10YR4.4 黒褐色	シルト	中	中	中	中	無	10YR4.4 黒褐色	シルト	中	中	中	中	無
P3	75YR3.3 黒褐色	シルト	中	中	中	中	無	75YR3.3 黒褐色	シルト	中	中	中	中	無
P4	75YR3.2 黒褐色	シルト	中	中	中	中	無	75YR3.2 黒褐色	シルト	中	中	中	中	無
埋蔵物付	10YR3.3 黒褐色	シルト	中	中	中	中	無	10YR3.3 黒褐色	シルト	中	中	中	中	無

## 第2号竪穴住居跡柱穴

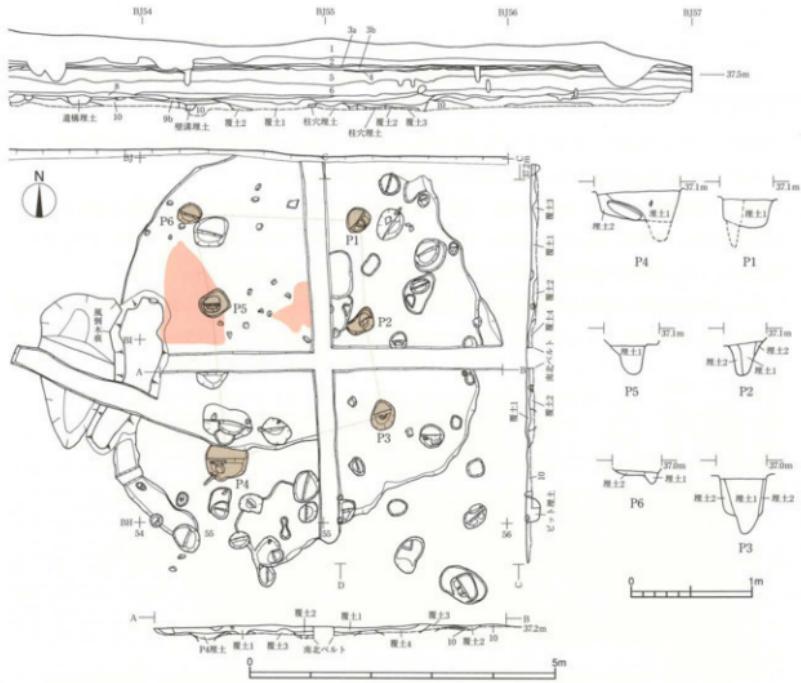
ピット番号	主柱穴	副柱穴	柱	柱幅	柱高	柱性	しまり	主柱穴	副柱穴	柱	柱幅	柱高	柱性	しまり
P7	埋上1 10YR2.2 黒褐色	シルト	中	中	中	中	無	埋上1 10YR2.2 黒褐色	シルト	中	中	中	中	無
P8	埋上1 10YR2.2 黒褐色	シルト	中	中	中	中	無	埋上1 10YR2.2 黒褐色	シルト	中	中	中	中	無
P9	埋上1 10YR2.3 黒褐色	シルト	中	中	中	中	無	埋上1 10YR2.3 黒褐色	シルト	中	中	中	中	無
P10	埋上1 10YR2.3 黒褐色	シルト	中	中	中	中	無	埋上1 10YR2.3 黒褐色	シルト	中	中	中	中	無
P11	埋上1 10YR2.4 黒褐色	シルト	中	中	中	中	無	埋上1 10YR2.4 黒褐色	シルト	中	中	中	中	無
埋蔵物付	10YR3.6 黒褐色	シルト	中	中	中	中	無	10YR3.6 黒褐色	シルト	中	中	中	中	無

## 第3号竪穴住居跡柱穴

ピット番号	主柱穴	副柱穴	柱	柱幅	柱高	柱性	しまり	主柱穴	副柱穴	柱	柱幅	柱高	柱性	しまり
P15	10YR3.2 黒褐色	シルト	中	中	中	中	無	10YR3.2 黒褐色	シルト	中	中	中	中	無
P16	10YR2.2 黒褐色	シルト	中	中	中	中	無	10YR2.2 黒褐色	シルト	中	中	中	中	無
P17	10YR2.2 黒褐色	シルト	中	中	中	中	無	10YR2.2 黒褐色	シルト	中	中	中	中	無
P18	10YR2.3 黒褐色	シルト	中	中	中	中	無	10YR2.3 黒褐色	シルト	中	中	中	中	無
P19	10YR2.3 黒褐色	シルト	中	中	中	中	無	10YR2.3 黒褐色	シルト	中	中	中	中	無
P20	10YR2.3 黒褐色	シルト	中	中	中	中	無	10YR2.3 黒褐色	シルト	中	中	中	中	無
P21	10YR2.3 黒褐色	シルト	中	中	中	中	無	10YR2.3 黒褐色	シルト	中	中	中	中	無
P22	10YR2.2 黒褐色	シルト	中	中	中	中	無	10YR2.2 黒褐色	シルト	中	中	中	中	無
P23	10YR2.2 黒褐色	シルト	中	中	中	中	無	10YR2.2 黒褐色	シルト	中	中	中	中	無
P24	10YR2.2 黒褐色	シルト	中	中	中	中	無	10YR2.2 黒褐色	シルト	中	中	中	中	無
P25	10YR2.3 黑褐色	シルト	中	中	中	中	無	10YR2.3 黑褐色	シルト	中	中	中	中	無
P26	10YR2.3 黑褐色	シルト	中	中	中	中	無	10YR2.3 黑褐色	シルト	中	中	中	中	無
P27	10YR2.3 黑褐色	シルト	中	中	中	中	無	10YR2.3 黑褐色	シルト	中	中	中	中	無
P28	10YR2.3 黑褐色	シルト	中	中	中	中	無	10YR2.3 黑褐色	シルト	中	中	中	中	無

## 第3号竪穴住居跡柱穴

ピット番号	主柱穴	副柱穴	柱	柱幅	柱高	柱性	しまり	主柱穴	副柱穴	柱	柱幅	柱高	柱性	しまり
埋上1	10YR2.2 黒褐色	シルト	中	中	中	中	無	埋上1 10YR2.2 黒褐色	シルト	中	中	中	中	無
埋上2	10YR2.2 黒褐色	シルト	中	中	中	中	無	埋上2 10YR2.2 黒褐色	シルト	中	中	中	中	無
埋上3	10YR2.2 黒褐色	シルト	中	中	中	中	無	埋上3 10YR2.2 黒褐色	シルト	中	中	中	中	無
埋上4	10YR2.2 黒褐色	シルト	中	中	中	中	無	埋上4 10YR2.2 黒褐色	シルト	中	中	中	中	無
埋上5	10YR2.2 黒褐色	シルト	中	中	中	中	無	埋上5 10YR2.2 黒褐色	シルト	中	中	中	中	無
埋上6	10YR2.2 黒褐色	シルト	中	中	中	中	無	埋上6 10YR2.2 黒褐色	シルト	中	中	中	中	無
埋上7	10YR2.2 黒褐色	シルト	中	中	中	中	無	埋上7 10YR2.2 黒褐色	シルト	中	中	中	中	無
埋上8	10YR2.2 黒褐色	シルト	中	中	中	中	無	埋上8 10YR2.2 黒褐色	シルト	中	中	中	中	無
埋上9	10YR2.2 黒褐色	シルト	中	中	中	中	無	埋上9 10YR2.2 黒褐色	シルト	中	中	中	中	無
埋上10	10YR2.2 黒褐色	シルト	中	中	中	中	無	埋上10 10YR2.2 黒褐色	シルト	中	中	中	中	無
埋上11	10YR2.2 黒褐色	シルト	中	中	中	中	無	埋上11 10YR2.2 黒褐色	シルト	中	中	中	中	無
埋上12	10YR2.2 黒褐色	シルト	中	中	中	中	無	埋上12 10YR2.2 黒褐色	シルト	中	中	中	中	無
埋上13	10YR2.2 黒褐色	シルト	中	中	中	中	無	埋上13 10YR2.2 黒褐色	シルト	中	中	中	中	無
埋上14	10YR2.2 黒褐色	シルト	中	中	中	中	無	埋上14 10YR2.2 黒褐色	シルト	中	中	中	中	無
埋上15	10YR2.2 黒褐色	シルト	中	中	中	中	無	埋上15 10YR2.2 黒褐色	シルト	中	中	中	中	無
埋上16	10YR2.2 黒褐色	シルト	中	中	中	中	無	埋上16 10YR2.2 黒褐色	シルト	中	中	中	中	無
埋上17	10YR2.2 黒褐色	シルト	中	中	中	中	無	埋上17 10YR2.2 黒褐色	シルト	中	中	中	中	無
埋上18	10YR2.2 黒褐色	シルト	中	中	中	中	無	埋上18 10YR2.2 黒褐色	シルト	中	中	中	中	無
埋上19	10YR2.2 黒褐色	シルト	中	中	中	中	無	埋上19 10YR2.2 黒褐色	シルト	中	中	中	中	無
埋上20	10YR2.2 黒褐色	シルト	中	中	中	中	無	埋上20 10YR2.2 黒褐色	シルト	中	中	中	中	無
埋上21	10YR2.2 黒褐色	シルト	中	中	中	中	無	埋上21 10YR2.2 黒褐色	シルト	中	中	中	中	無
埋上22	10YR2.2 黒褐色	シルト	中	中	中	中	無	埋上22 10YR2.2 黒褐色	シルト	中	中	中	中	無
埋上23	10YR2.2 黒褐色	シルト	中	中	中	中	無	埋上23 10YR2.2 黒褐色	シルト	中	中	中	中	無
埋上24	10YR2.2 黒褐色	シルト	中	中	中	中	無	埋上24 10YR2.2 黒褐色	シルト	中	中	中	中	無
埋上25	10YR2.2 黒褐色	シルト	中	中	中	中	無	埋上25 10YR2.2 黒褐色	シルト	中	中	中	中	無
埋上26	10YR2.2 黒褐色	シルト	中	中	中	中	無	埋上26 10YR2.2 黒褐色	シルト	中	中	中	中	無
埋上27	10YR2.2 黒褐色	シルト	中	中	中	中	無	埋上27 10YR2.2 黒褐色	シルト	中	中	中	中	無
埋上28	10YR2.2 黒褐色	シルト	中	中	中	中	無	埋上28 10YR2.2 黒褐色	シルト	中	中	中	中	無



M区第8号竪穴住居跡

編名	土色	粒度	粘性	しまり	含 有 物	備 考
埋土1	75YR3-/2 黒褐色	シルト	中	中	径10mm前後の赤色の鉄分を多く含む。マンガンを比較的多く含む。	
埋土2	75YR3-/1 黒褐色	砂質シルト	中	弱	径10mm前後の赤色の鉄分を比較的多く含む。マンガンを比較的多く含む。1~5mmのブロック状の炭化物を若干含む。	埋土2は床面を形成すると考えられる。
埋土3	10YR7-/3 にぼい黄褐色	砂	弱	中	径10mm前後の赤色鉄分をわずかに含む。	
埋土4	10YR3-/3 喧褐色	砂	弱	中	径5~10mmの黄褐色土粒を若干含む。径5mm以下の赤色土粒をわずかに含む。	

M区第8号竪穴住居柱穴

ピット番号	編名	土色	粒度	粘性	しまり	含 有 物
P 2	埋土1	10YR5-/1 黒褐色	砂質シルト	中	中	径1~5mmの炭化物。径1~3mmの鐵を少量含む。
	埋土2	5YR3-/1 黒褐色	小砂	弱	中	径1~5mmの鐵。径1~3mmの炭化物を少量含む。
P 3	埋土1		シルト	中	中	5~20mmのブロック状の大きな炭化物を多量に含む。径5mm以上の黄褐色土粒を若干含む。
	埋土2		砂質シルト	弱	中	径5mmの黄褐色土粒を比較的多く含む。炭化物を若干含む。
P 4	埋土1	10YR3-/2 喧褐色	シルト	中	中	埋土2の鉄をブロック状に含む。10mm画面のための炭化物をブロック状に多量に含む。鉄分を多く含む。
	埋土2	10YR4-/3 浅黄褐色	砂	中	中	ブロック状の炭化物を若干含む。10mm以下的小砂をわずかに含む。
P 5	埋土1	5YR4-/2 黄褐色	小砂	弱	中	径1~5mmの黄褐色土粒。径1~3mmの炭化物。鐵を少量含む。
	埋土2	5YR3-/3 喧褐色	中砂	中	中	径1~5mmの粗砂を若干含む。径1~10mmの黄褐色土粒を少量含む。径5mm以下の炭化物を少量含む。
P 6	埋土1	5YR4-/3 にぼい赤褐色	中砂	中	中	径1~5mmの粗砂を若干含む。径1~10mmの黄褐色土粒を少量含む。径5mm以下の炭化物を少量含む。
	埋土2	5YR4-/3 にぼい赤褐色	中砂	中	中	径1~5mmの粗砂を若干含む。径1~10mmの黄褐色土粒を少量含む。径5mm以下の炭化物を少量含む。

第3図 第8号竪穴住居跡 (M区)

Plan and sections of pit dwelling 8

り状遺構は幅36cm、長さ1.1mである。

北寄りの貼り床上に焼け面がひろがり、主柱穴のP13の埋土に焼土が認められること、壁溝から焼けた土器片が出土していることなどから第3号竪穴住居跡は焼失住居と推定される。

第3号竪穴住居跡の床面や覆土、柱穴の埋土からは弥生II b期の山王III層式土器（第8図1、7）や石器（第7図版21、第8図版37、第11図版67）が出土しており、この時期に属する住居跡と考えられる。

#### 第8号竪穴住居跡（第3図）

第8号竪穴住居跡はM区北寄りで検出された。直径6.4m程の不整形円形を呈し、残存する竪穴の深さは10~15cm程である。竪穴住居跡の中央やや北寄りに不整形の明褐色上のひろがりが検出され、多量の炭化物と焼土を含んでいることから、炉跡と判断した。

主柱穴と推定される柱穴としてはP1、P2、P3、P4、P5、P6の6基が検出された。東西1.5m、南北3.5m程の長方形の柱配置をとると推定される。柱穴の深さは20~40cm程度である。

また、壁溝が南西側の壁際で幅30cm、長さ2m程にわたって検出されている。

第8号竪穴住居跡は、覆土および柱穴の埋土から弥生II b期の山王III層式土器（第8図14~16）や、スタンプ状土製品（第22図2）、土偶の頭部破片（第22図3）が出土しており、この時期に属すると考えられる。

第8号竪穴住居跡は極めて浅かったため、精査の当初は、壁のたち上がりが採えにくかった。しかし、床面が検出されるとともに深い柱穴、炉跡が確認され、住居の構造が明らかにされた。第2、3、8号竪穴住居跡はいずれも大規模に削平され、厚い洪积層である6層に覆われている。

（水見）

### 2) 配石遺構

#### 第2号配石遺構

E区BG65・66区で検出された。南北1.4m、東西1.7mが検出されている。配石の下部には深さ約30cmのピットが確認された。配石上部から晩期NからV期（第13図16）、弥生II a期の鉢（第13図15）、凹石が出土している。

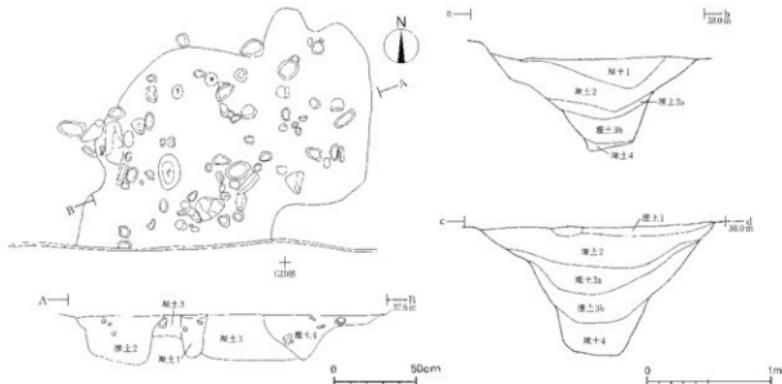
### 3) 溝 跡

#### 第7号溝跡（第5図、第2、3図版）

I区、I南区、N、K区、O1~4区で検出された。K区北寄りとN区では106層上面、K区東寄りでは7層上面で検出され、10層まで掘り込んでいる。また、I区、I南区では8層上面で検出された。長さ約140mにわたって北西から南東にかけてゆるやかに蛇行してのびる。

N、K、O1~4区においては、幅約1.5~2m、検出面からの深さは約1mあり、底面のレベルは標高約37mでほとんど差がみられない。埋土は大きく4つに区分された。埋土1~3は砂質シルト、埋土4は粘土質シルトである。底面は比較的平坦で壁は急傾斜で立ち上がり、埋土3の下部を境に溝の壁上部はゆるやかにひろがるように立ち上がる。溝の上部と下部で壁の傾斜、埋土の堆積状況が大きく異なり、溝の改修が行われた可能性が高い。埋土からは縄文時代晩期IV期~弥生IV期の土器、石錐、土製紡錘車が出土している。

溝はI区、I南区で南北約15m分が検出されている。溝の幅は2~2.8mとひろくなり、壁はゆるやかに立ち上がる。埋土1~3を確認している。埋土1~3はシルトであり、8層と類似している。埋土1~3からは弥生



第4図 第2号配石遺構（E区）  
Plan and sections of stone arrangement 2



第5図 第7号溝跡  
Section of ditch 7

II a、II b期の土器が多量に出土している。

第7号溝跡は、出土遺物の内容と106層上面で検出されたことなどから弥生時代前期に造営され、機能しており、弥生時代N期には埋没したと考えられる。

#### 4) 土器埋設土壤

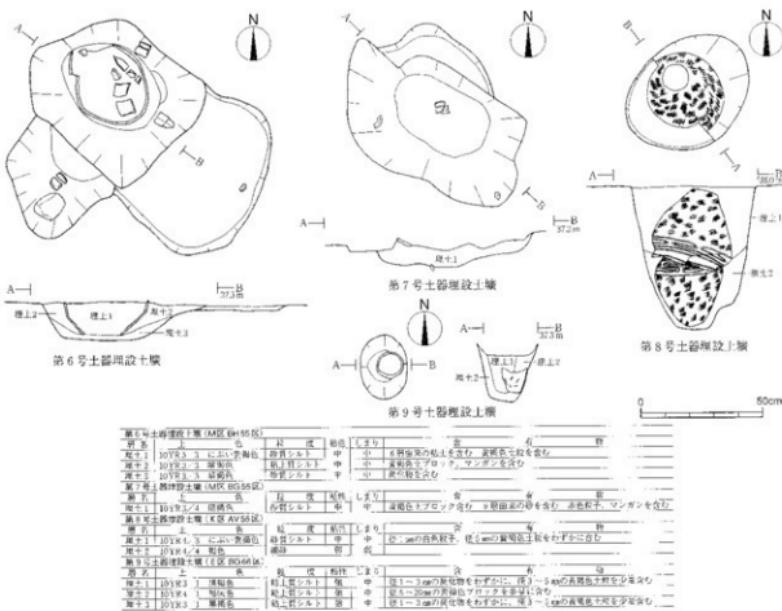
##### 第6号土器埋設土壤（第6図）

M区B H55区の6層上面で検出された。土壤は長径65cm、短径55cmの楕円形を呈し、残存する深さは約15cmである。弥生時代Ⅲ期の壺（第4図版12）が倒立した状態で埋設されていた。

出土した壺は全体に朱が塗布され、口縁部から頸部はミガキ、体部にはL R編文が施されている。最大径は推定で30cmである。土器内部の土壤はにぶい黄褐色の砂質シルトで土器の埋土に比べやや明るい色調をもつ。この土壤に遺物は認められなかった。土器の風化がはげしく、取り上げ後パラロイドB-72で保存処理を行った。この土器は口頭部の膨らむ形態などから弥生時代Ⅱ～Ⅲ期に属すると考えられる。

土壤は埋設された土器よりもひとまわり大きく掘られており、その底面は9層に達する。埋土は2層が確認された。埋土1は暗褐色の粘土質シルトで黄褐色上ブロック、マンガンを含んでいる。埋土2は暗褐色砂質シルトで炭化物を含んでいる。土壤上部は削平を受け、土器の底部は失われ、体部下半の破損も顕著である。

第6号土器埋設土壤の下層で弥生Ⅱ b期に属する第8号堅穴住居跡が検出されている。さらにその東には第8号堅穴住居跡と同時期の第3号堅穴住居跡が確認されていることから弥生Ⅱ b期の居住城が埋没した後、この上器埋設土壤が掘り込まれたと考えられる。



第6図 第6、7、8、9号土器埋設土壌

Plans and sections of pit 6, 7, 8 and 9 with buried pottery

## 第7号土器埋設土壌 (第6図)

M区BG55区の6層上面で検出された。長径70cm、短径60cmの楕円形を呈し、深さ約10cm、埋土は暗褐色砂質シルトである。弥生前期の高杯の脚部、あるいは茎形土器のつまみ(第6図版1)が上層上面から出土している。

## 第8号土器埋設土壌 (第6図)

K区AV55区の6層上面で検出された。弥生IIb期の山王III層式壺が合せ口の状態で埋設されていた。

土壌は長径55cm、短径45cmの楕円形に掘り込まれ、深さ60cm程度である。上端底面は10層に達している。埋土1はにぶい黄褐色の砂質シルトで白色粒子、黄褐色土粒を含む。埋土2は褐色の砂層で10層に類似している。土器の大きさとほぼ同じ大きさで掘り下げられている。土器をえた後、すぐに埋め戻されたと考えられる。

この合せ口土器壺は、下窓(第1号土器 第5図版2)、上窓(第2号七器 第5図版1)ともにはば完全な形で出土した。第1号土器は体部上位に太い沈線で変形工字文C2型が4単位描かれている。口径26.4cm、器高33.5cm、最大径30.9cmである。底部には木葉痕がみられる。沈線内には朱が残存しており、彩色されていたと推定される。外側には体部上半から底部にかけて炭化物が多量に付着している。焼成は良好だが外側とも風化している。第2号土器は体部上位に変形工字文C2型が施文されている。口径31.6cm、器高33cm、最大径36cmである。沈線内および土器内面に朱が残存している。特に内面については体部上半から下半にかけて土器のおよそ半分をしめる

部分に朱が付着している。さらに土器外面には炭化物の付着がみられる。体部にはいずれもLR繩文が施されている。土壇には第1号土器が直立して置かれ、その上に第2号土器が第1号土器の口部を覆うようにかぶせられていた。

第1号土器の内部の土壤を0.5mm目のフルイを用いて水洗したところ、幼児の頭蓋骨破片と乳歯の破片が検出された。骨片は土器の下半部の土壤中から検出されている。これにより第1、2号合せ口土器が小児墓であることが明らかとなった。

第1次調査では弥生時代の墓域が第8号土器埋設土壤の北側で検出されている。第8号土器埋設土壤の検出によって弥生時代の墓域がV字溝を南へ越え、微高地中心部までひろがることが確認された。

#### 第9号土器埋設土壤（第6図）

E区BG66区で検出された。長径約30cm、短径20cm程度の梢円形を呈する。深さ約20cmである。埋土1は黒褐色の粘土質シルトでわずかに炭化物を含む。埋土2は褐色の粘土質シルトである。埋土1、2ともに10層と共通した黄褐色土粒を含む。繩文を施された深鉢（第6図版2）の体部下半から底部までが正立して出土した。

### 5) ピット

#### ピット305（第7図）

K区AU62区の7層上面で検出された。10層を掘り込んでいる。径約1.1mの円形で、深さ35cmである。埋土1～7が確認され、埋土1、2は砂質シルト、3は粘土質シルトである。埋土4は薄い炭化物層であり、埋土5～7は粘土質シルトとシルトが交互に堆積する。炭化物の出土状況から貯蔵穴の可能性がある。弥生II期の壺（第14図4）、壺（第14図3）、晩期Ⅵ期の高杯（第14図5）、鉢（第14図6、11）が出土しており、ピット305は弥生II期に属すると推定される。

#### ピット306（第7図）

K区AS62区の7層上面で検出された。10層を掘り込んでいる。径約1mの円形を呈し、残存する深さは約40cmである。埋土は1～8が確認され、埋土1、2はシルト、3、4は粘土質シルトである。埋土5は薄い炭化物の層である。埋土6～8は粘土質シルトである。炭化物の出土状況から貯蔵穴の可能性がある。晩期Ⅶ期の鉢（第14図版10）、晩期Ⅶ期の深鉢（第14図13）が出土している。また、弥生時代のものと考えられる鉢の破片（第14図版12）が出土しており、ピット306は繩文時代晩期から弥生時代初頭に属すると推定される。

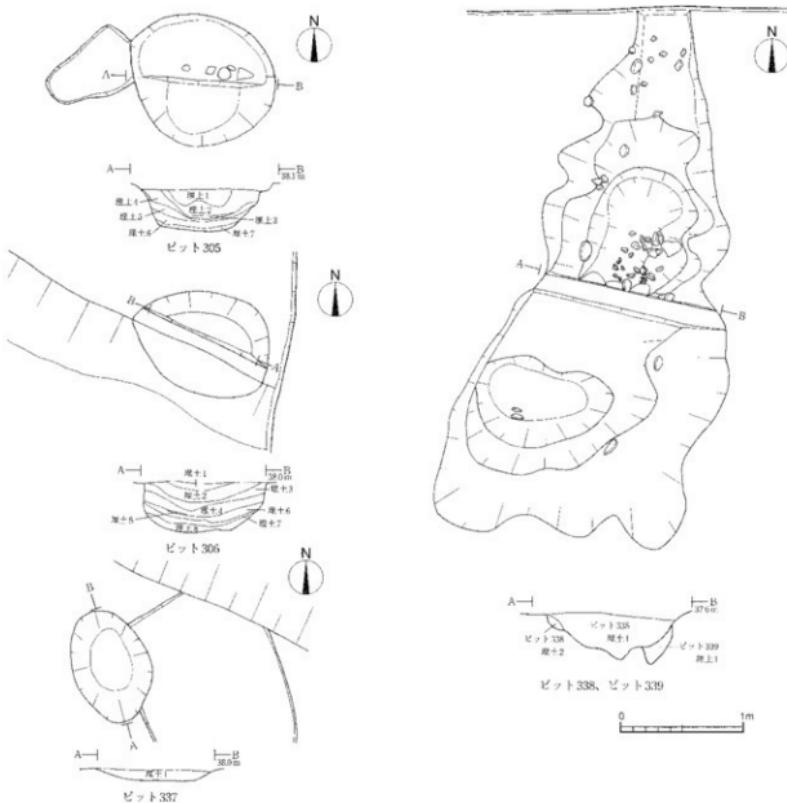
#### ピット337（第7図）

K区AS・AR60・61区の8層上面で検出された。長軸50cm、短軸35cm程度の梢円形を呈し、残存する深さは9cmである。埋土は褐色のシルトに10層由来の黄褐色土ブロックを含み、人為的に埋め戻されていると判断される。石製小玉6点（第23図1～6）が土壤底部付近から出土している。これらの点より土壤墓であると推定される。8層上面で検出されていることから弥生時代以降に属すると考えられる。

#### ピット338（第7図）

E区BF・BG60・61で検出された。10層を掘り込んでいる。平面形は不整形を呈し、規模は南北約4.2m、東西は最大で約2mである。深さは最も深いところで60cm程度である。

埋土1からは古墳時代前期の塗釜式に属する土器の壺（第6図版16）の破片が出土している。



ピット番号	区	名	色	種	度	動性	しまり	食	用	物	備考
ピット305	K-AUH2	土	白	砂	中	低	高	高	高	水素化多量に含む	
		土	白	砂	中	低	中	中	中	中	
		土	白	砂	中	低	中	中	中	中	
		土	白	砂	中	低	中	中	中	中	
		土	白	砂	中	低	中	中	中	中	
		土	白	砂	中	低	中	中	中	中	
ピット306	K-ASG2	土	白	砂	中	中	中	中	中	中	
		土	白	砂	中	中	中	中	中	中	
		土	白	砂	中	中	中	中	中	中	
		土	白	砂	中	中	中	中	中	中	
		土	白	砂	中	中	中	中	中	中	
		土	白	砂	中	中	中	中	中	中	
ピット307	K-AS-AH05-61	土	白	砂	中	中	中	中	中	中	
		土	白	砂	中	中	中	中	中	中	
		土	白	砂	中	中	中	中	中	中	
ピット308	K-BF-19G-61	土	白	砂	中	中	中	中	中	中	
		土	白	砂	中	中	中	中	中	中	
ピット309	E-BF-DG6-61	土	白	砂	中	中	中	中	中	中	
		土	白	砂	中	中	中	中	中	中	

第7図 ビット305、306、337、338、339

### Plans and sections of pit 305, 306, 337, 338 and 339

### ピット339（第7図）

E区ピット338によって上部を廃されている。残存する深さは約35cmである。土製小玉（第22図4）が1点出土している。

（大場）

## 第3節 遺 物

### 1) 土 器

I区の8、9層、I南Kの6～10層の遺物包含層、I区試掘トレンチの601層～611層および遺構から出土した完形土器と個体認定可能な口縁部や、有文土器片・底部・台部・脚部を抽出し、土器の検討を行った。器形と装飾の明らかな個体は280点に達している。

#### a 繩文土器・弥生土器

属性表に記した「時期」と、土器型式との対応関係は以下のとおりである。繩文時代晩期Ⅲ期は大洞C式、Ⅳ期は大洞C2式、V期は大洞A式、VI期は大洞A'式の時期に相当する。V期はさらに1965年の調査成果（伊東他 1985）にもとづいてVa、Vb、Vcの3期に区分した。また、弥生時代I期は砂沢式の時期に相当する。IIa期は青木畠式、IIb期は山王Ⅲ層式である。III期は寺下西式、IV期は樹形圓壺式の時期に相当する。

「器種」は壺、深鉢、鉢、浅鉢、台付浅鉢、高杯、壺、注口器、蓋に大別した。

「口縁部の特徴」は平坦口縁、平坦口縁に刻みまたは押圧、小波状口縁、山形波状口縁、平坦口縁に突起、山形突起に大別した。

文様帶の名称は、口縁部装飾帯をI装飾帯、頸部をII文様帯、体部上半をIII文様帯、体部下半をIV文様帯、底部あるいは台部、脚部をV文様帯とした。変形工字文については、A、B、C、Pの4類型に大別し、さらに、須藤の分類に従い、A型を4類型に、C型を6類型にそれぞれ細別した。ただし、変形工字文C3型は工字文として分類した（須藤 1976、90）。

抽出された繩文土器には晩期Ⅲ期から晩期Ⅳ期までの資料が含まれている。

晩期Ⅲ期の資料は、K区第7号溝跡から1点出土している（第10図26）。小波状口縁の鉢で、体部に雲形文が施されている。

晩期Ⅳ期の資料はF・M区第2、3号堅穴住居跡、E区ピット258、I区試掘トレンチから、深鉢・鉢・浅鉢が出土している。浅鉢は、平坦口縁に低い突起が付され、体部に雲形文が展開する（第13図19）。

晩期V期の資料は、F・M区第2、3号堅穴住居跡、M区第8号堅穴住居跡、K区第7号溝跡、E区ピット306、I区遺物包含層9層、I区試掘トレンチにおいて深鉢、鉢、台付鉢、台付浅鉢、高杯、壺が出土している。深鉢は口縁部が軽く外反し、平坦口縁に押圧、刻みが施されたものが主体である。第20図8は、平坦口縁に押圧が施され、体部に四字文が展開する深鉢である。鉢には、工字文（第10図23、24）、四字文（第19図12、第20図10）が施文されている。台付浅鉢には、体部と台部に四字文が施されている。第8図2は、体部に押圧隆帯が施されている。第6図版14は、体部に四字文が施され、底面に4つの脚が付された鉢あるいは浅鉢である。第6図版9は、工字文が展開する台部である。内面には漆と植物質の付着物が残存しており、漆を入れる容器として使用されたと推定される。第19図14は、体部に変形T字文A2型が施された高杯である。壺の体部上半に工字文（第21

図1、2)、変形工字文P型(第20図版13)、西字文(第16図8、第19図20)や、沈線内に刺突(第18図2)を施した資料が出土している。

晩期Ⅵ期の資料は、F、M区第2、3号堅穴住居跡、M区第8号堅穴住居跡、K区第7号溝跡、E区ピット254、K区ピット305、306、I区遺物包含層9層、I南区遺物包含層9層、I区試掘トレンチから、甕、深鉢、鉢、浅鉢、高杯、壺が出土している。鉢には、変形工字文A型(第14図5)が施されている。第9図4は、体部に変形工字文A1型が施された浅鉢である。高杯は山形突起を有し、体部に西字文(第2図18)や変形工字文A型(第9図19)が施されている。また西字文(第16図6)の施された脚部が出土している。第10図13は、平行沈線文が施された壺の口頭部資料で、口縁部に低い突起が付されている。

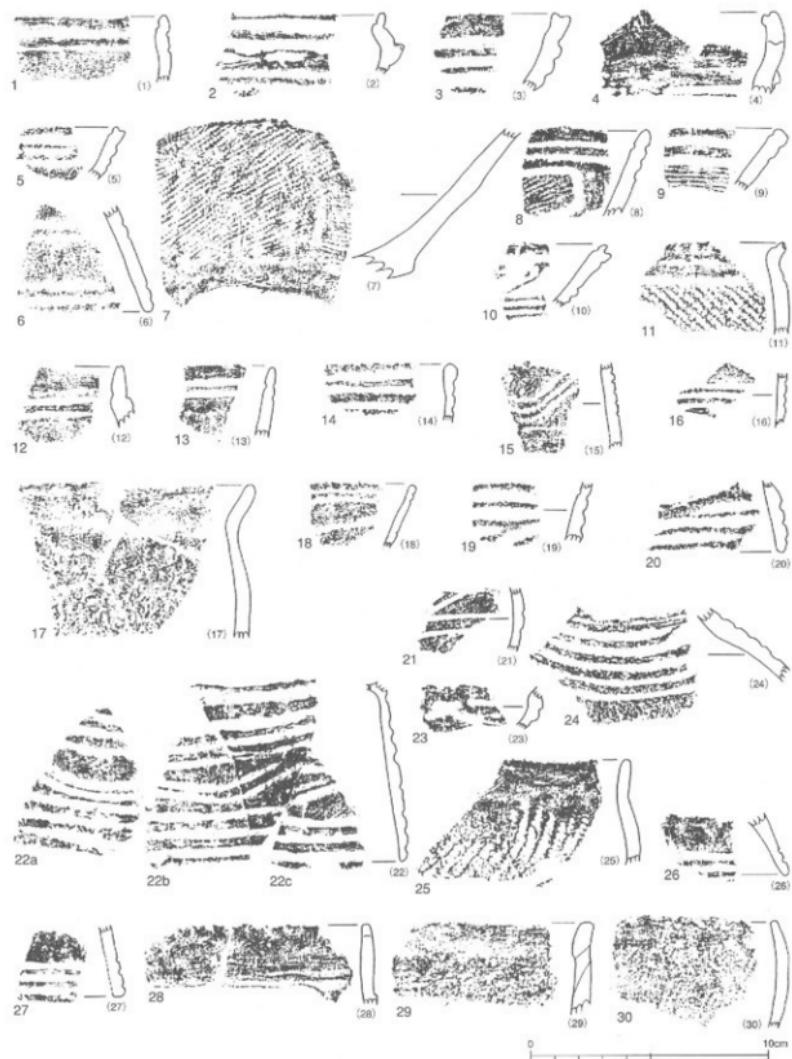
弥生時代の資料は、I期～IV期のものが出土した。弥生I期の資料は、F、M区第2、3号堅穴住居跡、K区第7号溝跡、I区遺物包含層8層から甕、深鉢、鉢、高杯が出土した。鉢には変形工字文C1型(第15図13)が施されている。第6図版5は、平底口縁に二個一対の山形突起を付した鉢で、変形工字文A2型が4単位展開する。第19図2は、高杯の脚部で、変形工字文C1型が施されている。

弥生時代II-a期の資料は、F、M区第2、3号堅穴住居跡、M区第8号堅穴住居跡、K区第7号溝跡、E区第2号配石遺構、I南区遺物包含層9層、I区試掘トレンチから甕、深鉢、鉢、高杯、壺が出土している。第15図5は、外湾する口頭部に鋸歯文が展開する深鉢である。この深鉢は青木畠式に属する。鉢(第10図8)には変形工字文C1型が施されている。高杯には、体部に変形工字文C1型が施される資料(第10図10)や、脚部に波状文(第8図15、22)が施される資料がある。第4図版11は、体部に重層する変形工字文C1型が施された壺である。

弥生時代II-b期の資料は、F、M区第2、3号堅穴住居跡、M区第8号堅穴住居跡、I区第8号溝跡、K区第7号溝跡、K区ピット305、I区遺物包含層9層、I南区遺物包含層9層、I区試掘トレンチから、甕、深鉢、鉢、高杯、壺、蓋が出土している。第5図版1・2は、K区第8号土器埋設土壙出土の合せ口上器棺である。第1号土器(第5図版2)は、口頭部に三角連繋文が、体部上半に変形工字文C2型が、体部下半には横走罫文が施されている。第2号土器(第5図版1)は体部上半に変形工字文C2型、下半にLR罫文が施される。第1号土器、第2号土器ともに、器面には朱が塗布され、炭化物が付着している。鉢には変形工字文C2型(第6図版3)を施した資料や、口頭部がかるく外反し、内弯する体部をもつ資料(第4図版11)がある。第6図版3の鉢は、器面に朱が塗布されている。高杯は、体部に変形工字文C2型(第15図4)、垂下文(第12図2～5)、土字文(第12図6)、波状文(第10図2)、沈線にそった刺突文(第9図1)が施されている。脚部には波状文(第8図15)、垂下文(第6図版4)が展開する。蓋は体部が直線的にひらがり、LR罫文を施した資料(第10図3、4、第4図版7、8)が出土している。

弥生時代III期以後の資料は、K区第7号溝跡、I南区遺物包含層6、9層から、深鉢、鉢、高杯、壺が出土している。第4図版12(第6号土器埋設土壙出土)は、弥生Ⅲ期の壺で、頭部がかるくふくらみ、体部にはLR罫文が施されている。頭部全体がみがかれているが、口縁部と頭部の境付近および、頭部と体部の境は入念なミガキが施されており、特徴的である。類例は、宮城県青木遺跡出土土器(伊藤 1960)にみられる。弥生Ⅳ期の樹形凹式鉢、高杯には連弧文が施されている(第10図32)。第9図26は弥生Ⅳ期の底部資料で、同心円文が施され、器面には朱が塗布されている。

(須藤、坂田、京野)



第8図 山王廻遺跡出土土器拓影  
Jomon and Yayoi pottery from the Sanno-gakoi site

1~11 F・M区第3号竪穴住居跡  
12~30 M区第8号竪穴住居跡



第9図 山王周遺跡出土土器拓影

Jomon and Yayoi pottery from the Sanno-gakoi site

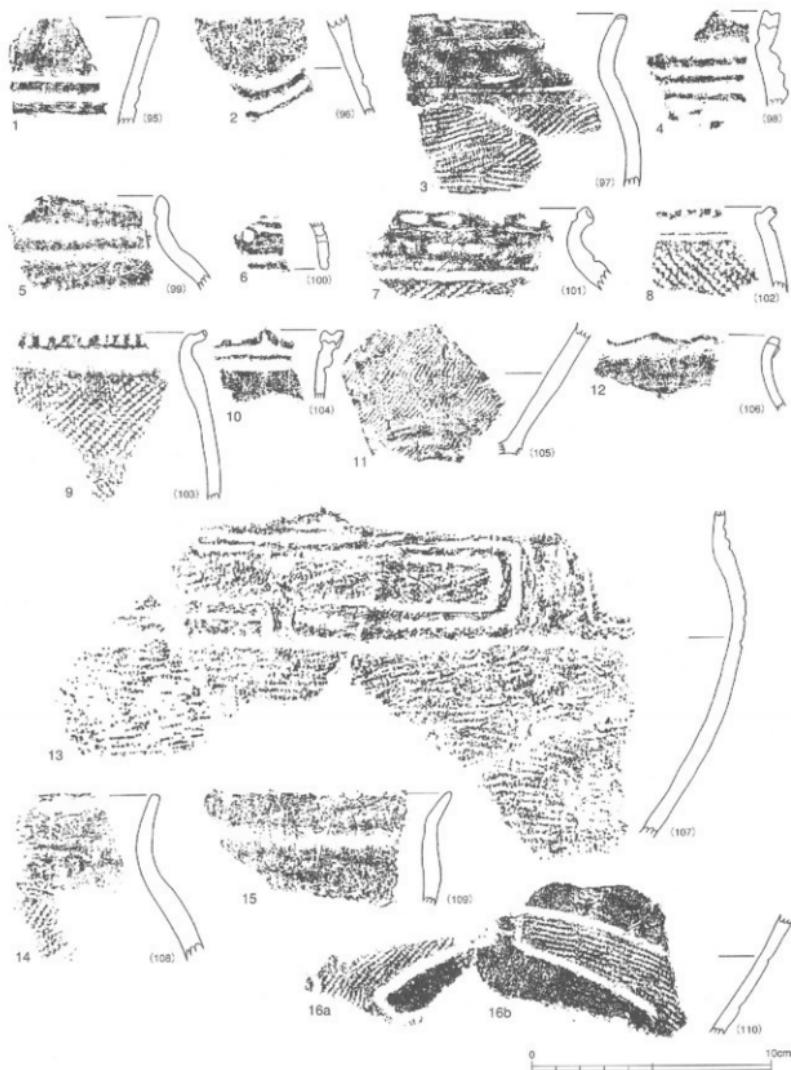
1~10 M区第8号堅穴住居跡  
11~29 K区第7号清跡



第10図 山王町遺跡出土土器拓影

Jomon and Yayoi pottery from the Sanno-gakoi site

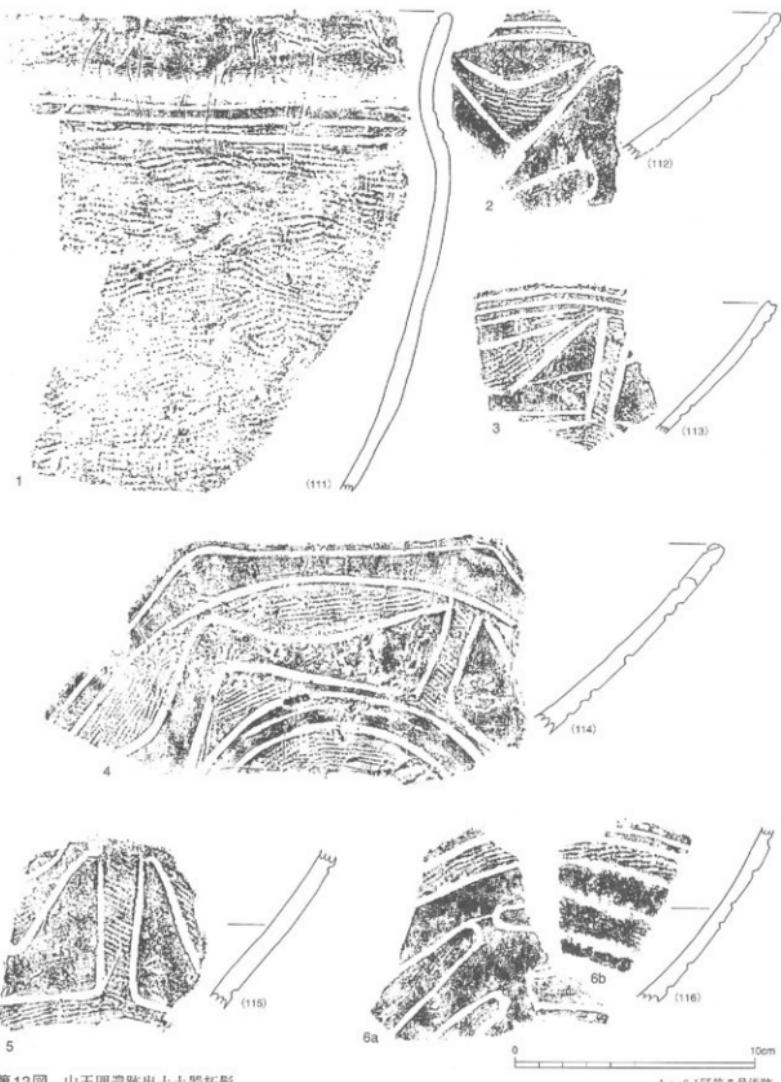
1~35 K区第7号溝跡



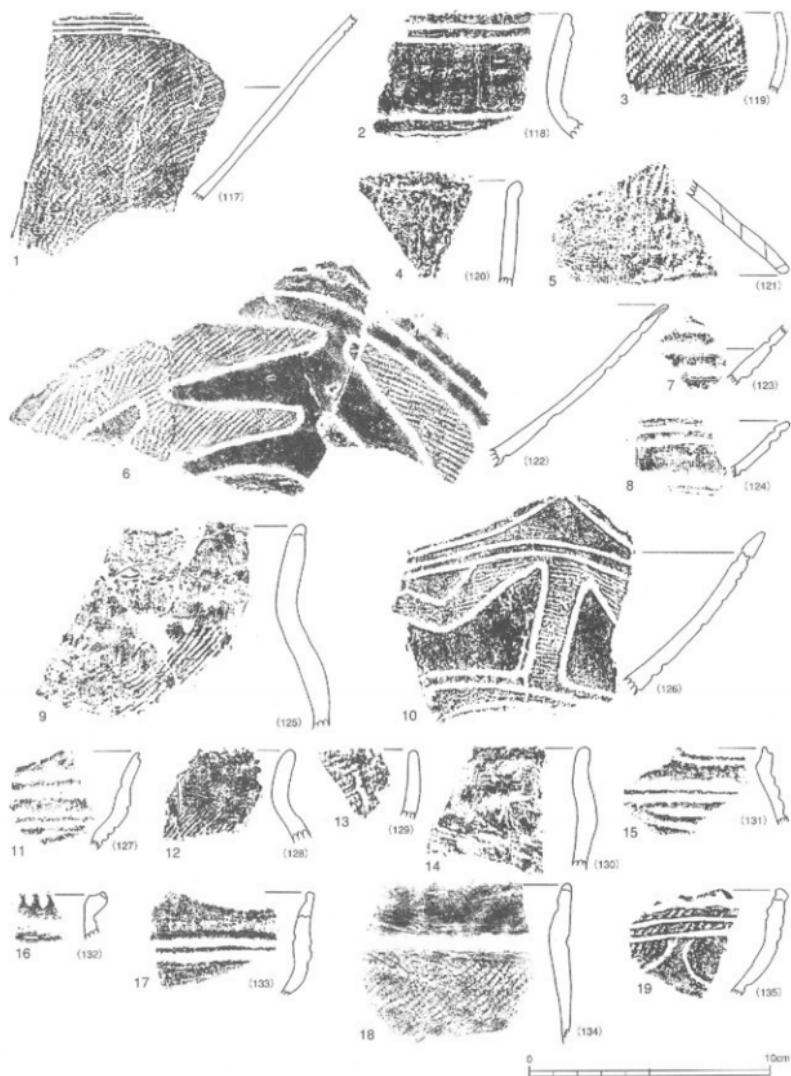
第11図 山王廻遺跡出土土器拓影

Jomon and Yayoi pottery from the Sanno-gakoi site

1~12 K区第7号 sondage  
13~16 I区第7号 sondage



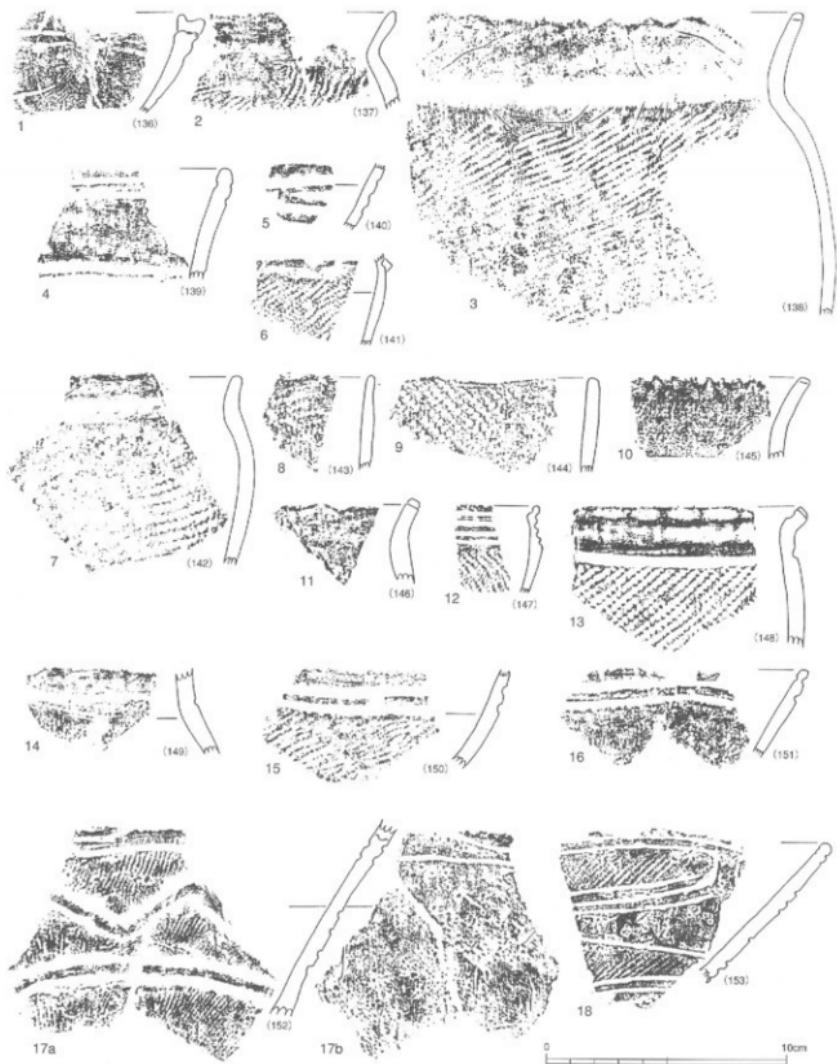
第12図 山王園遺跡出土土器拓影  
Jomon and Yayoi pottery from the Sanno-gakoi site



第13図 山王圓遺跡出土土器招影

Jomon and Yayoi pottery from the Sanno-gakoi site

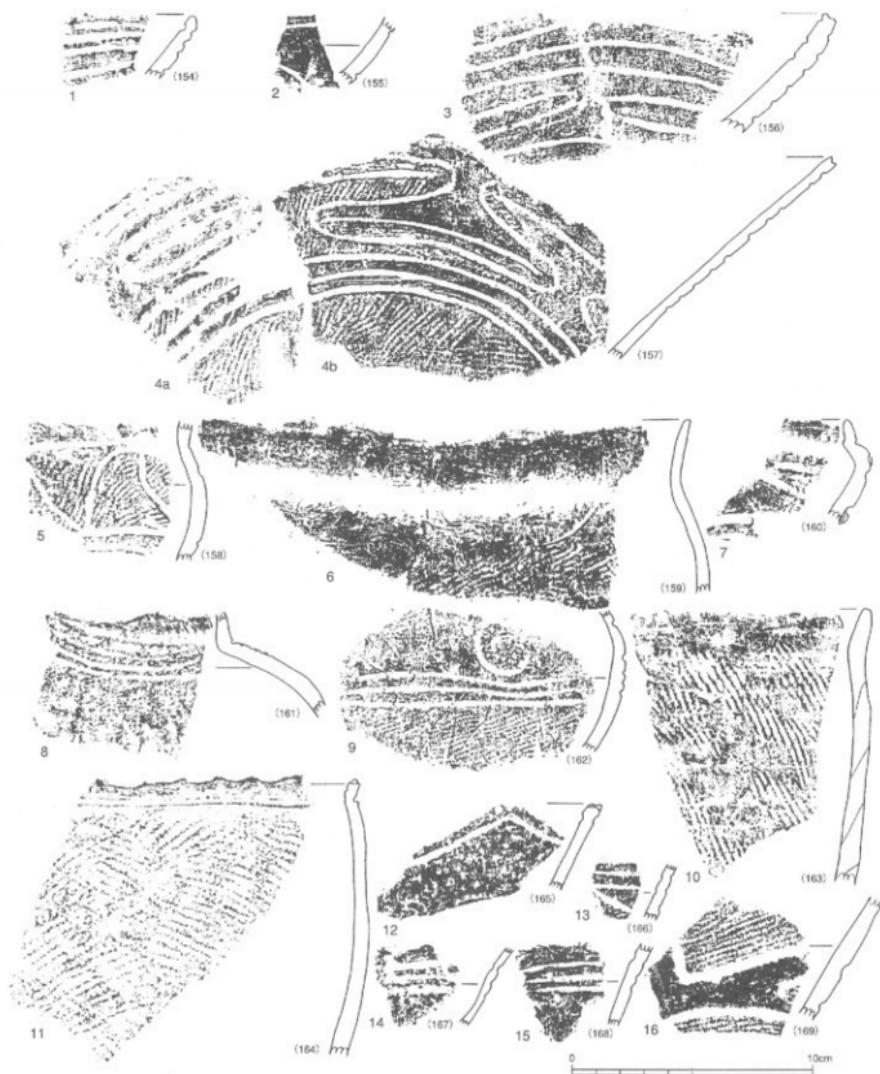
1~14 T区第7号溝跡  
15~16 E区第2号配石道跡  
17~18 E区ピット254~19 E区ピット258



第14図 山王隈遺跡出土土器拓影

Jomon and Yayoi pottery from the Sanno-gakoi site

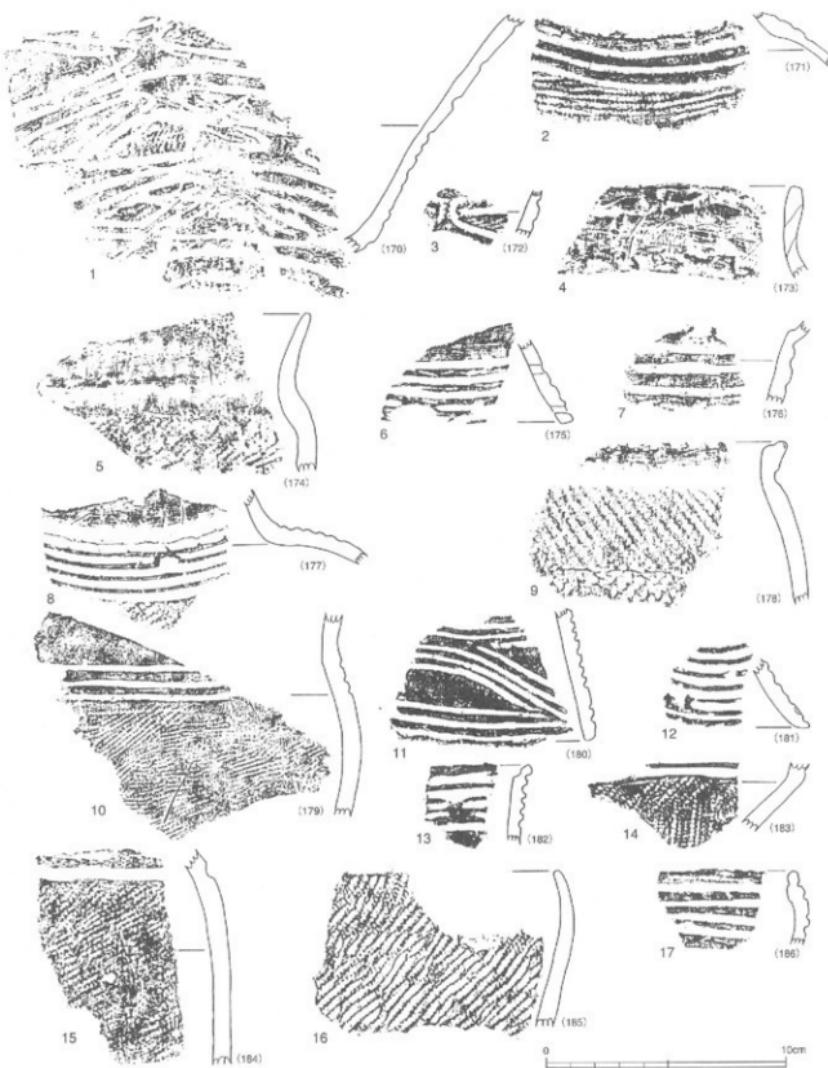
1 E区ピット292 2~13 K区ピット306  
10~13 K区ピット306  
14~16 I南区6層 17・18 I南区9層



第15図 山王廻遺跡出土土器拓影

Jomon and Yayoi pottery from the Sanno-gakoi site

1~11 1区 9層  
12~14 1区 8層  
15~16 1区 9層



第16図 山王廻遺跡出土土器拓影

Jomon and Yayoi pottery from the Sanno-gakoi site

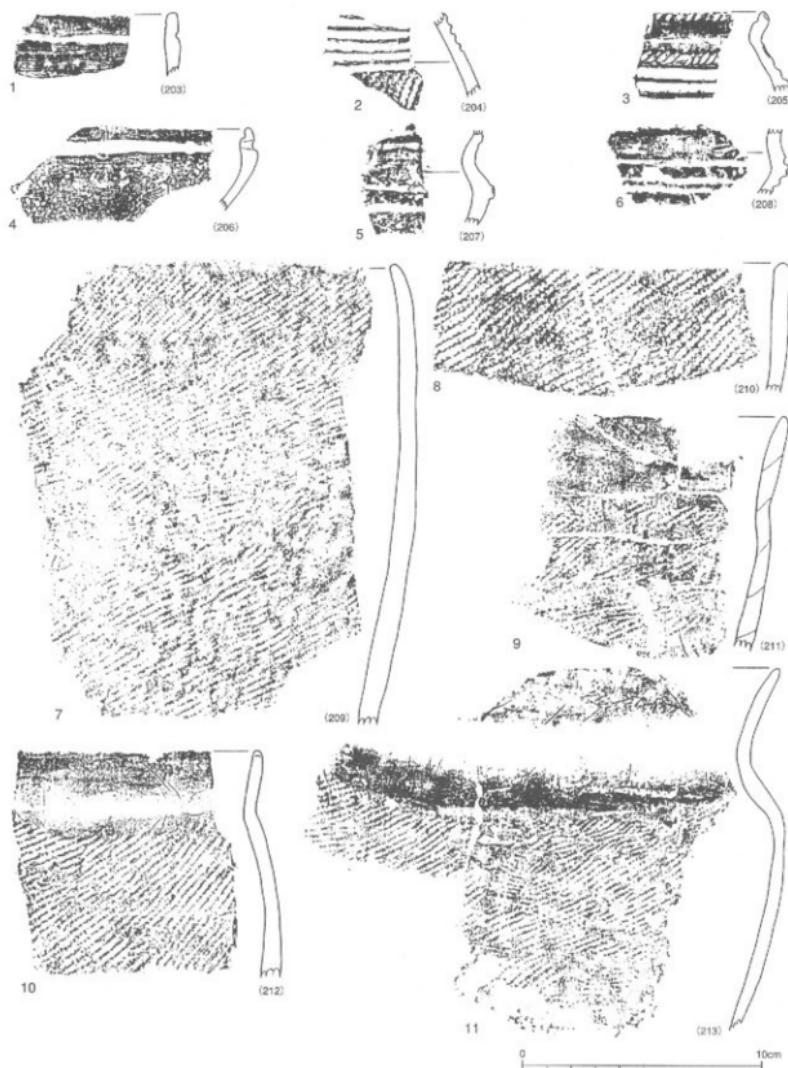
1~9 I区 9層 10 I区試掘トレンチ601層  
11~16 602層 17 603層



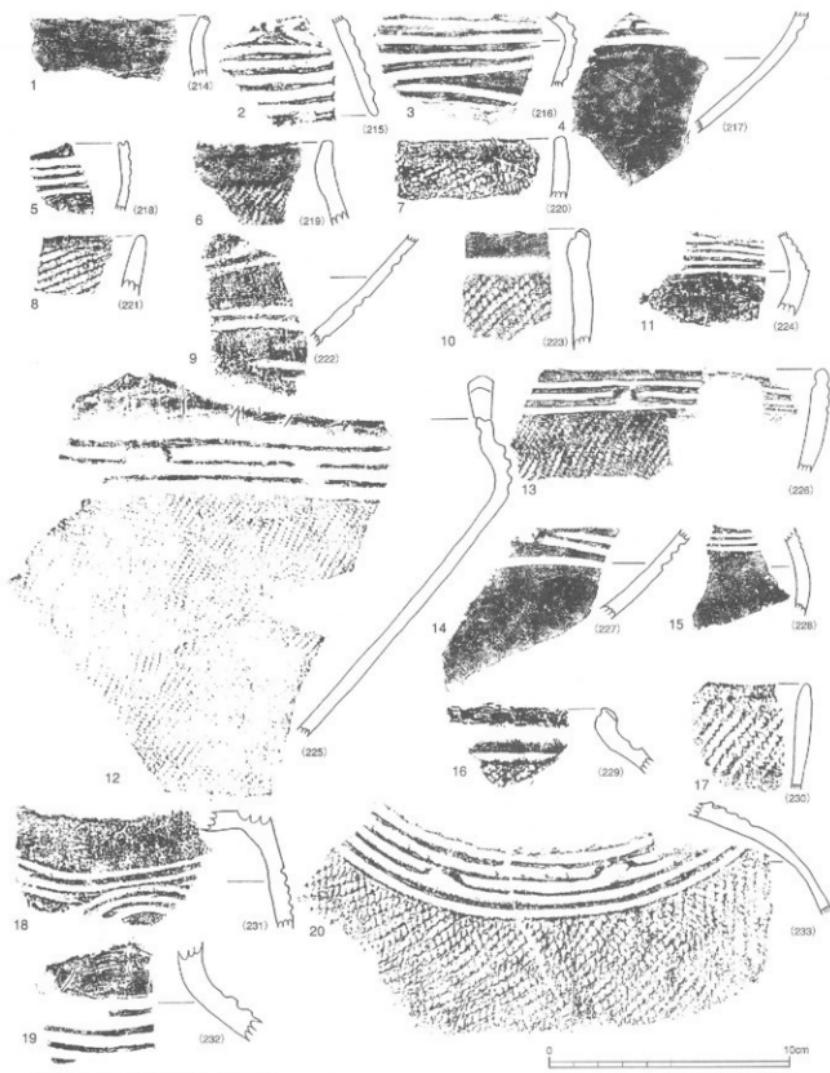
第17図 山王園遺跡出土土器拓影

Jomon and Yayoi pottery from the Sanno-gakoi site

1 ~ 16 I区試掘トレンチ603層



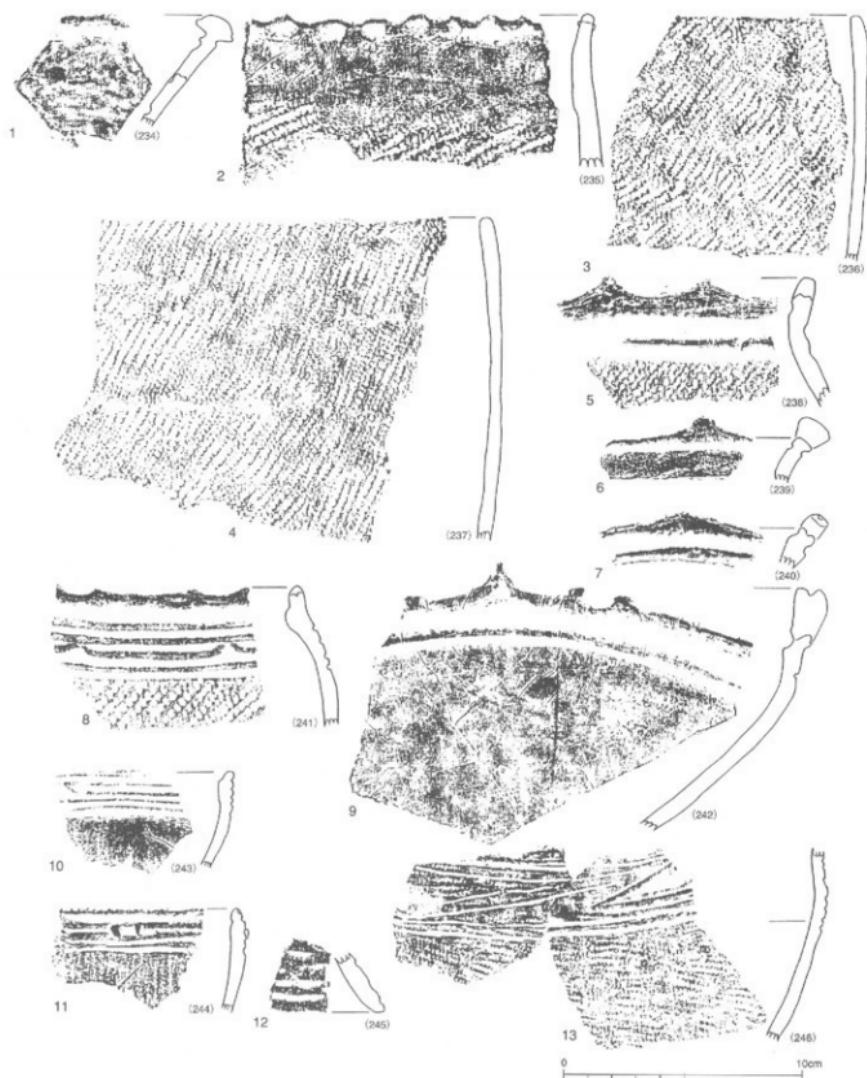
第18図 山王周遺跡出土土器拓影  
Jomon and Yayoi pottery from the Sanno-gakoi site



第19図 山王園遺跡出土土器拓影

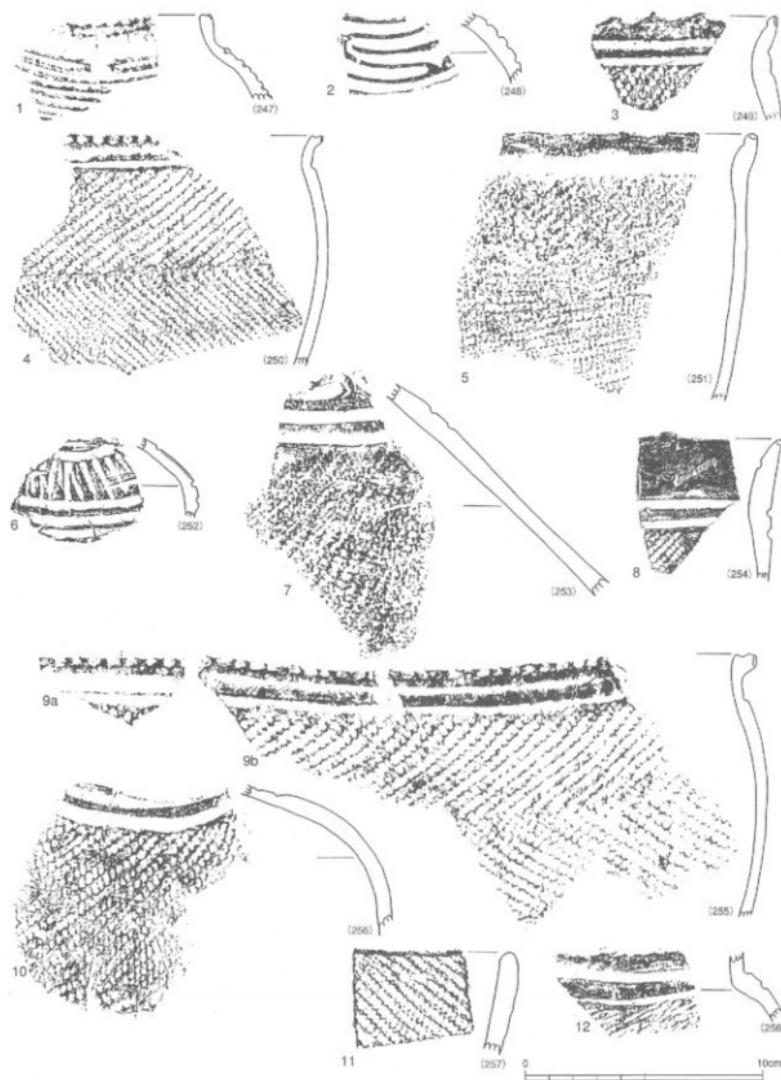
Jomon and Yayoi pottery from the Sanno-gakoi site

1~8 11区試掘トレンチ601層  
9~17 605a層 18~20 605d層



第20図 山王園遺跡出土土器拓影  
Jomon and Yayoi pottery from the Sanno-gakoi site

1～3 1区試掘トレンチ606層  
4 607層 5～13 610層



第21図 山王園遺跡出土土器拓影

Jomon and Yayoi pottery from the Sanno-gakoi site

1~6 1区試掘トレンチ610層  
7~11 610m層 12 611層

## b 土 師 器

E区B F・B G 60・61区ピット338より壺釜式の壺の頸部から体部下半にかけての破片が出土した（第6図版16）。器厚は薄く、外面にミガヤが施されているが、内外面とも風化がはげしい。体部は球形で頸部は短く直立する。口縁部は破損しているが、複合口縁と推定される。

## 2) 土 製 品

### a 土 偶（第22図3）

M区第8号竪穴住居跡の柱穴5から出土した。中実土偶の頸部と考えられる。胴部との接合部分に凹みが、また頸部との接合部には接合痕が観察される。

### b 土 版（第22図5）

I区試掘トレンチ610 b層から出土した。両面に弧状の沈線文が施され、全体はナデにより仕上げられている。

### c スタンプ状土製品（第22図1、2）

M区第8号竪穴住居跡から1点、K区8層から1点の計2点が出土している。第22図版2は把手部を欠損している。全体をナデで調整し、円盤部は比較的厚く、下面はかるくふくらんでいる。第22図版1は全体がナデで仕上げられており、下面は平坦である。

### d 土製紡錘車（第22図6）

K区第7号溝跡埋土2から出土した。中心に径4mmの焼成前穿孔がみられる。両面ともに中心から放射状に5本の沈線が施され、その間に短い沈線がほぼ等間隔に連続して向面および側面に加えられている。

### e 土 製 小 玉（第22図4）

E区ピット339で出土した。長さ65mm、長径108mm、短径95mmの円柱で、側面に幅1mmの浅い縦筋が9条施されている。中央に径2mm程の貫通孔を有する。全体はナデで仕上げられている。  
(鈴木、大場)

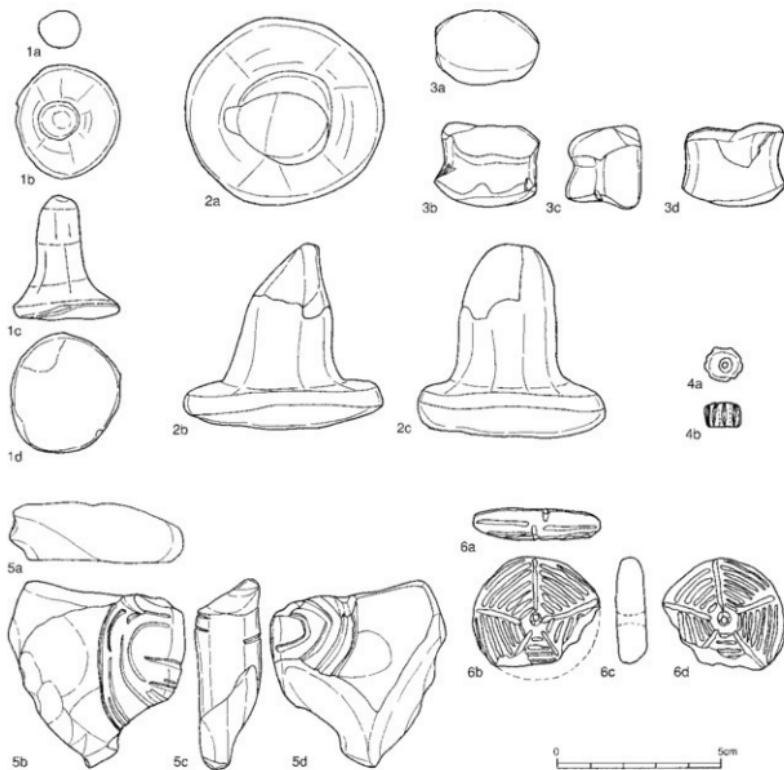
## 3) 石 器

E、I、I北、I南、K、N区の遺物包含層、I区試掘トレンチおよび遺構から出土した石器のうち定型的な石器、加工の明瞭な石器を対象とし、それらについて属性を抽出、検討した。対象とした石器は計81点である。

石器の器種認定基準は基本的に1995年度の報告に従い、新たに認められた器種については認定基準を設け、分類、記述した。

### 石 鑿（第7図版1～36）

36点を抽出した。有茎鎌（第7図版1～33）が53点（91.7%）、無茎鎌（第7図版34～36）が3点（8.3%）みられる。長さ12～42mm、重量0.3～2.8gと形態、大きさは多様である。両面全体に二次加工が施されたものは26点（72.2%）、片面の全体ともう一面の縁辺に二次加工が施されたものは7点（19.4%）、両面の縁辺のみに二次加工が施されたものは3点（8.3%）である。石材は鉄石美が最も多く24点（66.7%）、以下頁岩7点（19.4%）、碧玉3点（8.3%）、珪質凝灰岩2点（5.6%）である。第7図版18、19、20、28の茎部には微量のビッチが付着しており、着柄の痕跡と考えられる。使用の際に生じたと考えられる基部・先端部の折れや衝撃剥離は基部7点、先端部4点、先端部・基部8点の計19点（50.3%）に認められる。



No.	出土点	遺 備	層 位	時 期	種 別	計画値 (cm)	重さ (g)	付着物	備 考	写真No.
1	K		包含層		スタンプ状土製品	長さ 3.82 幅 3.95 厚さ 3.15	16.4	無	スタンプ状の土製品で表面はみられない。全体はナデで仕上げられている。	27-10
2	M	第8号多穴性鉢跡	発生		スタンプ状土製品	長さ 5.83 幅 5.97 厚さ 3.76	82.5	無	スタンプ状土製品と考えられる。上部は削り出している。下部の内壁状になっている部分は丸みを帯びている。全体はナデで仕上げられている。	27-9
3	M	第8号多穴性鉢跡 柱穴5	発生・十側		長さ 2.53 幅 2.21 厚さ 2.18	16.6	無	中実形状の菅笠と考えられる。表面はみられずナデ仕上げである。縁との接合部に凹みが観察され、縁部との接合部にも擦痕がみられる。	27-6	
4	E	ビット339	標上1		土製小玉	直径 1.08 厚さ 0.55 直径 0.65 厚さ 0.65	0.7	無	円錐形を呈し、中央に径 2 mm程の貫通孔があけられている。縁部には崩れが施されている。全体はナデで仕上げられている。	27-11
5	I	試掘トレンチ	619b	発現	土版	長さ 5.61 幅 5.37 厚さ 1.76	48.2	無	小判形と推定される土版。両面に4本の寸跳びや円孔が開かれている。全体はナデで仕上げられている。	27-8
6	K	第7号溝跡	埋土2	発生	透鏡形	直径 2.37 厚さ 0.96	11.6	無	円錐形を呈し、中央に径 4 mm程の複数の穿孔があがみられる。両面および縁部に透鏡による袋詰が施されている。	27-7

第22図 山王園遺跡出土土製品

Clay object from the Sanno-gakoi site

#### 石 錐（第8図版37～41）

5点が出土しており、全て明確なつまみを有する。第8図版38～41には最終剥離面が残存し、また38には自然面が残されている。石材は鉄石英が3点で、碧玉と頁岩がそれぞれ1点ずつである。錐部先端の破損は4点に認められ、使用時の破損と考えられる。

#### 不定形石器（第8図版42、43）

第8図版42は横長剥片の末端に二次加工が施されており、背面の一端には連続した微小剥離痕がみられる。スクレイパーの一種と考えられる。石材は鉄石英である。第8図版43は縦長の剥片を素材とし、主に腹面からの急角度の二次加工により整形されている。腹面側にも先端部を中心として二次加工が認められる。石材は鉄石英である。

#### 異形石器（第8図版44）

第8図版44はノッチ状の凹部を有するが、凹部以外の周辺部分の両面に二次加工が施されている。入念に調整されていることや、他の剥片石器にはみられない黄色のディサイト質凝灰岩が用いられていることなどから異形石器に分類した。

#### ショッピングトゥール（第8図版45）

穂を素材とし、両面からの連続した剥離により刃部を作り出した石器をショッピングトゥールと分類した。第8図版45は安山岩製であり、扁平な穂の縁辺に両面から連続した剥離が施され半円状を呈する。

#### 円盤形石器（第8図版46、47、第9図版48～50）

5点が出土している。いずれも周縁に両面からの剥離による整形がなされ、直径は55～77mmの円盤形を呈する。石材は第9図版50が安山岩（20.0%）で、他の4点（80.0%）はディサイトである。第8図版46、47、第9図版50は剥離面や自然面に不明瞭な敲打痕が観察される。これらの石器は形態、大きさ、石材の点で類似している。

#### 石 核（第9図版51、52）

2点を抽出した。第9図版51、52は頁岩である。51は打面を固定せず頻繁に打面転移を繰り返して自然面を除去している。52は平坦な自然面であるe面を打面とし、a面から数回の剥離が行われている。

#### 環状石斧（第10図版53）

中央部に貫通孔を有し、周縁に刃部が作り出された円盤状の磨製石器を環状石斧に分類した。第10図版53は玢岩製である。半分が欠損しているが、直径は約110mmである。全体は丁寧に磨かれているが、一部に整形の際の敲打痕が残されている。中央の貫通孔は直徑約31mmであり、両面から穿孔されている。刃部には使用の際に生じた微小剥離痕が認められる一方、剥離によってノッチ状に作り出された部分が観察される。

#### 磨製石斧（第10図版54～57）

4点が出土している。第10図版54、56、57の3点は刃部が欠損しているが、いずれも扇形を呈すると考えられる。第10図版55は使用の際に刃部側からの衝撃剥離によって破損したと推定される。平面形および断面形から判断すると刃部は始刃で、全体は短冊形を呈すると考えられる。第10図版56は折れ面を打面として数回の剥離が加えられており、表面が大きく失われている。石材は第10図版55が凝灰質頁岩（25.0%）であり、他3点（75.0%）は玢岩である。

## 石 鋸 (第10回版58)

K区第7号溝跡から出土している。第10回版58は全体が敲打によって整形され、中央部には一定方向の擦痕が認められる。刃部および側縁からの剥離、基部の折れにより形が大きく損なわれているが、約子状を呈すると考えられる。この石器は敲打によって整形されている点で一般の打製の石鋸ととなるが、その形態から石鋸として分類した。石材は安山岩質凝灰岩である。

## 四 石 (第11回版59~72、第12回版73~79)

21点を抽出した。石材は安山岩10点(47.6%)、デイサイト10点(47.6%)、デイサイト質溶結凝灰岩1点(4.8%)である。大半の凹石にはa、c両面に敲打痕の集中が認められる。(第11回版59~72、第12回版73、75~79)また敲打痕の集中をa、c両面に加え、他の面にも有するもの(第11回版61、66、70、第12回版78)や、a面のみにもつもの(第12回版74)が認められる。重量は280~1790gで500~700gにピークがみられる。4点に縁辺に破損が観察される。第11回版61、63、68、第12回版73の4点はE区第2号配石遺構から出土している。

## 石 盤 (第12回版80、81)

2点を抽出した。第12回版80は軽石質デイサイト質溶結凝灰岩製であり、大型で三角形の自然縫を素材としている。a、c両面の中央部に浅く凹んだ磨面をもつ。第12回版81は多孔質のデイサイト質凝灰岩製である。a面に、ほぼ平坦な磨面をもち、c面にはわずかに敲打で整形した痕跡が認められる。全体のおよそ3分の1が欠損している。

## 4) 石 製 品

## 石製小玉 (第23図1~6)

石製小玉がK区ピット337から6点出土している。これらは大きさ、石材の点で1~4と5、6の2つに分けることができる。1~4は蛇紋岩または軟玉製で、直径7.2~7.3mm、厚さ4.0~4.5mm、重量0.31~0.37gである。5、6は角閃石の一種であるスカルン製で、直径5.2~5.8mm、厚さ2.7~3.3mm、重量0.07~0.11gである。4は約2/3が欠損している。いずれも研磨により整形されており、特に1~4には明瞭な擦痕がみられる。孔はいずれも片側から穿孔されている。

山王廻遺跡出土石器の石材を検討すると、器種ごとに石材が選択されていたことがうかがわれる。石鋸、石錐などの剥片石器は鉄石英や頁岩が用いられているのに対して、円盤形石器、礫石器は安山岩やデイサイトを素材としている。これらの石材は遺跡周辺入手することが可能である。環状石斧、磨製石斧には主に玢岩が石材と



第23図 山王廻遺跡出土石製品

Stone implement from the Sanno-gakoi site

して使用されている。玢岩は奥羽山系ではみられず、北上山系、阿武隈山系で産出することから、北上川左岸の地域からもたらされたと考えられる。

(鶴谷、施又、西井、丹羽)

## 5) 木 製 品

### a 竪 杵 (第24図1)

I 区試掘トレンチ611層から出土した。握部は径3.5cm、掻き部は長さ24cm、径5.4cmである。クヌギの丸木を削り込んで握部を作りだしている。掻き部には樹皮が残存している。掻き部先端は摩滅しており、使用的痕跡と考えられる。

### b 加 工 材 (第24図2)

I 区試掘トレンチ611層から出土した。長さ30cm、幅20cm、厚さ3.5~6cmの板状を呈する。表面を粗く削り、一面は中火部が盛り上がり、他面を平坦に作りだしている。皿形容器などの未成品と考えられる。 (大場)

## 6) 動物遺存体 (PL. 28-3~12)

山王町遺跡出土動物遺存体種名表

哺乳綱 MAMMALIA

ウシ目 (偶蹄目) Artiodactyla

シカ科 Cervidae

ニホンジカ *Cervus Nippon* Temminck

山王町遺跡第2次調査において、I区北壁に設けた試掘トレンチの610、611層（縄文時代晚期V期）、I南区第7号溝跡埋土3（弥生II期）および第3号竪穴住居跡に伴うと推定される2号炉跡（弥生II期）内埋土から動物遺存体が出土した。資料の同定・登録は3cm以上の資料について行った。

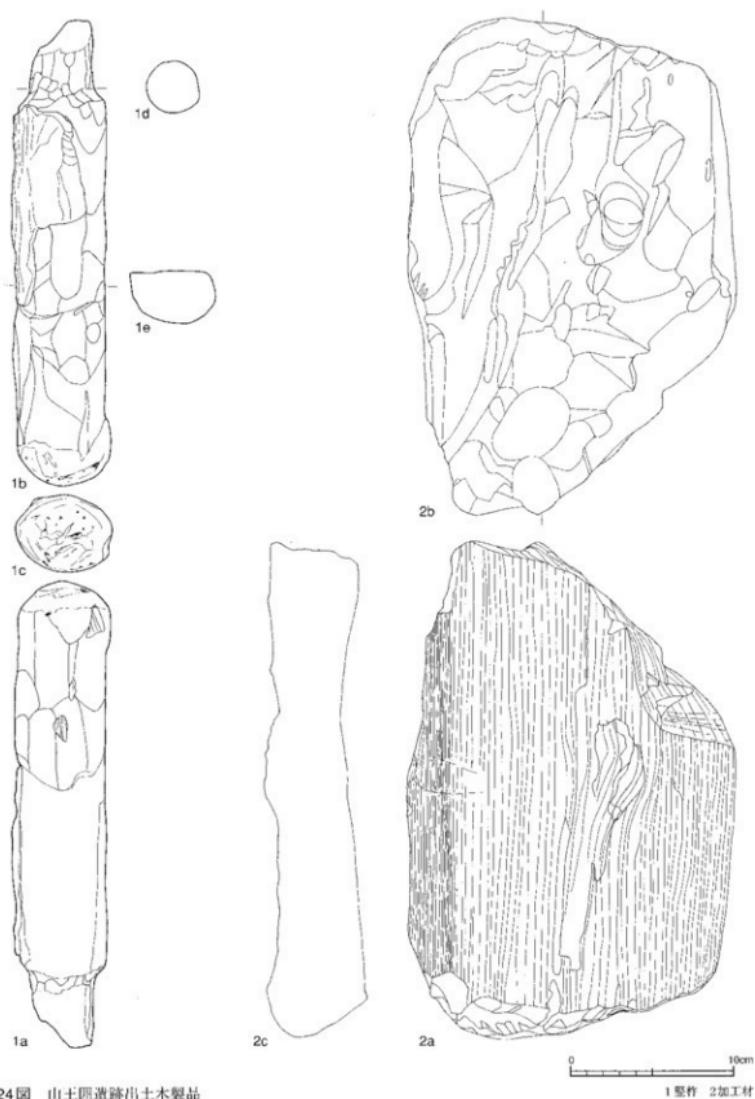
2号炉跡内埋土及びI区北壁際の試掘トレンチから上塗の一部を採取し、水洗フライを行った結果、動物遺存体の微細な破片が採集された。これらの破片は熱を受けて白色に変化し、細片化しており、同定は困難であった。緻密質の部分と海綿状の部分がみられ、大半は哺乳類であると考えられる。

I南区第7号溝跡埋土3（弥生II期）から哺乳類の大脛骨近位端の大脛骨頭の一部と考えられる破片が出土した。熱を受け、白色に変化している。一部しか残存していないため、種の同定はできなかった。

I区北壁際に設定した試掘トレンチの610層（縄文時代晚期V期）から出土した動物遺存体は水濁けの状態で埋存していたため、脱灰がすすみ、脆弱で保存状態は不良であった。表面の一部に青く変色している部分が認められたが、これは地下水によって供給された鉄分と骨中の矽分が反応して、藍鉄鉱（Vivianite  $\text{Fe}_3\text{P}_2\text{O}_{10} \cdot 8\text{H}_2\text{O}$ ）が生成されたためと考えられる（松井 1984）。ニホンジカ *Cervus Nippon* Temminckの左下頸骨、左上腕骨骨幹部、左脛骨骨幹部、左下頸の第1・第2大臼歯、第3大臼歯のエナメル質部の破片、ニホンジカあるいはイノシシに相当する哺乳類の四肢骨骨幹部の破片が同定された。

今回の調査で出土した動物遺存体資料にはニホンジカなどの遺存体が含まれており、周囲の丘陵地などで狩猟活動が行われていたことがうかがわれる。

(水見)



第24図 山土隈遺跡出土木製品

Wooden manufacture from the Sanno-gakoi site

## 第4章 結 語

第2次調査では極めて重要な成果が多数えられた。縄文時代晚期の集落構造については、第1次調査の成果から、自然堤防のはば中央部、最も標高の高いK区での遺構のひろがりを追求した。その結果、第1次調査区の東側と北側において、晚期後半の柱穴群、土壙群のひろがりが確認された。これらの遺構群の分布状況から、縄文時代晚期後半の集落は、なお調査区の南と西北にひろがることが明らかになった。また、自然堤防の西北側の低湿地にかかる弥生時代の溝を断ち割って試掘調査を行った結果、低湿地に堆積した包含層から晚期Ⅳ期からⅥ期にかけての土器、木製品、植物の種子などが層位的に出土した。そして、このI区付近が、晚期後半における集落の北西の限界であることが明らかになった。

また、時期は確定しなかったが、自然堤防中央北よりのE区北東部では多数のビットが検出され、晚期後半の土器が出土している。この地域から昭和40年に調査された自然堤防北端の泥炭層にかけて、晚期中葉から後半の遺構群がひろがっていることが予想される。そしてこの自然堤防上に、時期を若干異にして複数の居住域が営まれたことが推定される。全体としては極めて規模の大きな晚期縄文集落である。

今回の調査ではI区の溝の一部を掘り下げた結果、低湿地堆積層から晚期Ⅴ、Ⅵ期の土器とともに多量の植物化石と若干の木製品がえられている。ことに晩期末の包含層611層から堅杵が1点出土した。全長が推定60cmと小型であるが堅いクヌギを用い、握り部を削り込んで整形している。先端は激しい使用によって丸く摩滅している。縄文時代晚期後半の包含層からの出土であり、極めて重要な資料といえる。

さらに、晚期終末の610b層から大洞A、A'式土器とともに5粒のヒエ、アサの大型植物化石が出土しており、ヒエ、アサの栽培がこの晚期終末までさかのほる可能性を指摘できる。

さらに今回の調査でえられた最も重要な成果として、弥生時代前期集落を区画する大規模な人工溝の発見があげられる。この溝はI区からN、K区にかけて北西から東南にのび、その東南端は、長崎川に近い山王神社の東側まで確認されている。溝幅は1.5~2m、深さは検出面から約1mあり、長さ112mにわたってゆるやかに蛇行して掘削されている。

溝の底面は、ほとんど深さに差がみられない。両壁は急斜面に掘り込まれ、「V字溝」である。埋土は、大きく4層に区分された。また、溝の上部で壁のたちあがりがゆるやかにひろがっており、溝の改修が認められる。この溝は、出土土器の内容から、弥生時代前期Ⅰ期とⅡa期に機能し、Ⅱb期の新しい段階には施設したと推定される。

溝の北側のE、M区では第1次調査で検出した第2、3号堅穴住居跡の調査が、引き続き行われ、その住居構造の変遷がほぼ確認された。第2号堅穴住居は、径5.6mの不整円形で5本柱である。中央に径約1mの地床炉をもつ。壁溝が確認されている。第2号堅穴住居が拡張、改修され、第3号堅穴住居が造られている。この3号堅穴住居は径約8mの不整円形を呈し、やはり5本柱である。炉跡1基をもつ。壁溝がめぐる。この第2、3号堅穴住居跡の西側、約2m離れてやや小型な8号住居跡が発見された。径6.4mの不整円形のプランをもつ。6本柱で、壁溝が確認されている。

これらの3棟の堅穴住居跡の床面、柱穴、覆土から弥生時代前期後半の山王Ⅲ層式土器が出土しており、いず

れの住居も前期後半に営まれたと推定される。

M区では、第2、3号堅穴住居跡の西側約1m離れて朱塗りの大型壺1点が土壤に埋設された状態で出土した。土器は口頭部にかかる膨らみをもち、全体に緻密な繩文が施され、朱の彩色が施されている。弥生時代中期前葉、Ⅲ期の埋設土器と推定される。

K区弥生時代溝の西側、推定居住域の外側で弥生時代前期後半の山王Ⅲ層式期の合せ口埋設土器1基が検出された。径45~55cm、深さ60cmの土壤に高さ33.5cm、最大径30.9cmの壺と高さ33cm、最大径36cmの甕が合せ口で埋設されていた。下甕の中の土壤をすべて水洗いした結果、2、3歳の小児の下顎骨、頭蓋骨の破片、歯が検出された。この資料から、このような合せ口土器棺が小児墓館であることが確認された。弥生時代の埋設土器がこの他に1点検出された。

古墳時代前期の複合口縁の壺釜式大型壺がE区のピット338から1点検出され、山王圓遺跡の所在する自然堤防が古墳時代前期にも生活の場として利用されていたことが確認された。

このように、今回の調査で弥生時代前期の集落と繩文時代晚期後半の集落の実態が極めて鮮明に把握できるようになった。またI区第8号溝跡上層からは山王Ⅲ層式の新段階の土器群が一括で抽出し、その型式変遷が確認された。さらに下層の泥炭層からは多量の植物遺存体と堅竹とみられる木製品1点、加工材1点が出土しており、その供伴土器から繩文時代晚期の極めて重要な資料となった。

(須藤・大場)

## 引用文献

- 伊藤玄二 1960 宮城県青木の弥生式遺跡と出土々器 東北考古学第1輯 pp.9~23 (東北考古学会)  
 伊東信雄、須藤 隆 1982 潟野遺跡 (東北考古学会)  
 伊東信雄、須藤 隆 1985 山王圓造跡調査図録 (一迫町教育委員会)  
 小田野哲憲、高橋義介 1991 上村貝塚発掘調査報告書 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書 第158集  
 桐生正一他 1986 湯舟沢遺跡 滝沢村文化財調査報告書 第2集  
 工藤利幸他 1986 馬場野Ⅱ遺跡発掘調査報告書 岩手県文化事業団埋蔵文化財調査報告書 第99集  
 菅原俊行、安田忠市 1986 地蔵田B遺跡 秋田市新都市開発整備事業関係埋蔵文化財発掘調査報告書  
 須藤 隆 1976 亀ヶ岡文化の終末と東北地方における初期弥生土器の成立 考古学研究 23・2 pp.25~50  
 須藤 隆 1990 東北地方における弥生文化 考古学・古代史論叢 pp.243~322 (伊東信雄先生追悼論文集刊行会)  
 須藤 隆他 1996 国史跡山王圓遺跡発掘調査報告書 I (一迫町教育委員会)

## 付章1 山王廻遺跡におけるレーダ探査の成果

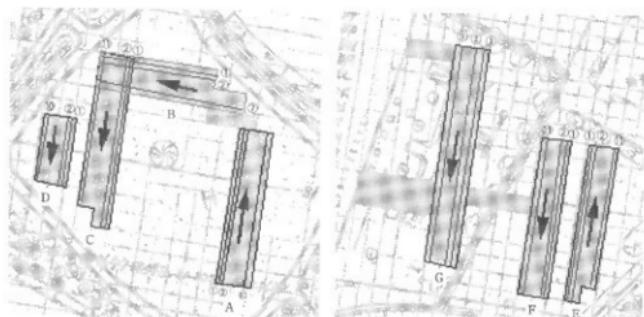
安達 三郎（東北工業大学）、宇野 亨（東京農工大学）、何 一偉（大阪電気通信大学）

### はじめに

一迫町教育委員会と東北大学文学部考古学教室による発掘調査に先立ち、平成7年8月20日から5日間レーダによる探査を行った。ここではその結果の一部と、その後検討した成果について報告する。

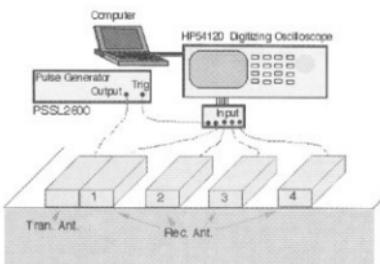
### 第1節 探査結果

探査実験は第1図に示すように、各調査区に50cm間隔の測線をとり、第2図に示す5つのアンテナを持つバイ statical pulse radar を用いて測定を行った。

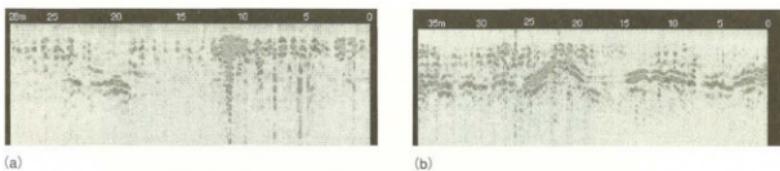


第1図 採査トレンチと測線  
Trenches and measuring lines

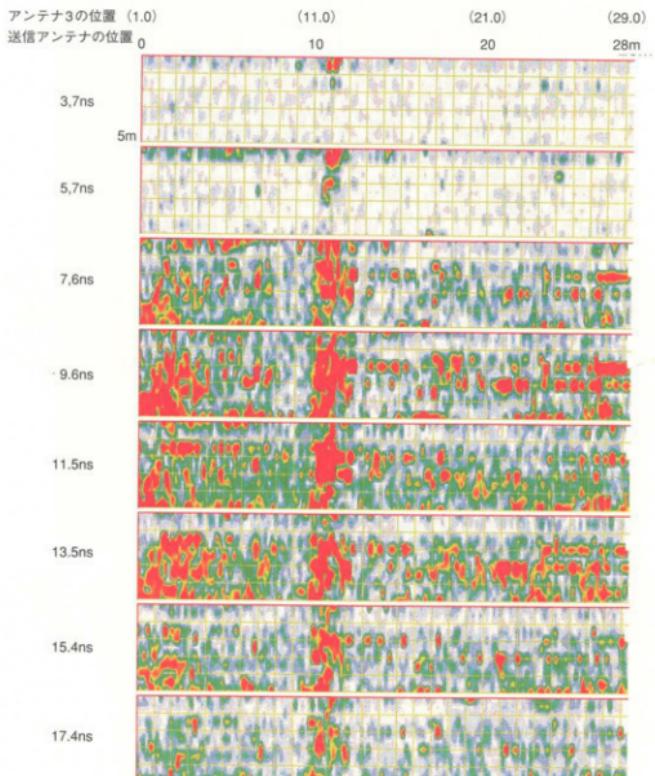
測定結果の一部を第3図に示す。第3図a、bはそれぞれ調査区F、G内の測線3および測線8における垂直断面の一例である。ただし右端が開始位置である。F区には、比較的深い位置に孤立した遺物の反応が、G区には連続的な反応が見られる。第4、5図は、F、Gの水平断面であり、各時刻でのイメージである。この結果からもF区には、比較的深い位置に孤立した遺物が、G区には比較的浅い位置に、広範囲な構造があるものと考えられる。ただし、第4、5図では左端が測定開始位置、上端が測線1と



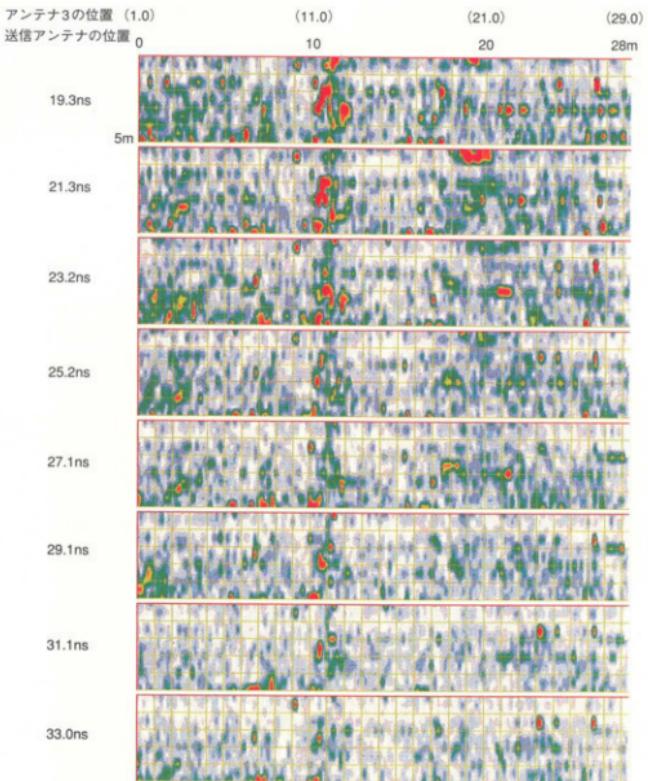
第2図 バイ statical pulse radar system



第3図 アンテナ #3の受信電圧 (a) 潜線3(b) 潜線8 (b)  
Received voltages of antenna #3 (a) Trench F, Line3 (b) Trench G, Line8



F区、アンテナ3、3.7nsec～17.4nsec  
第4図 アンテナ3で受信されたF区の水平断面図  
Time-slice signal images of trench F received by antenna 3

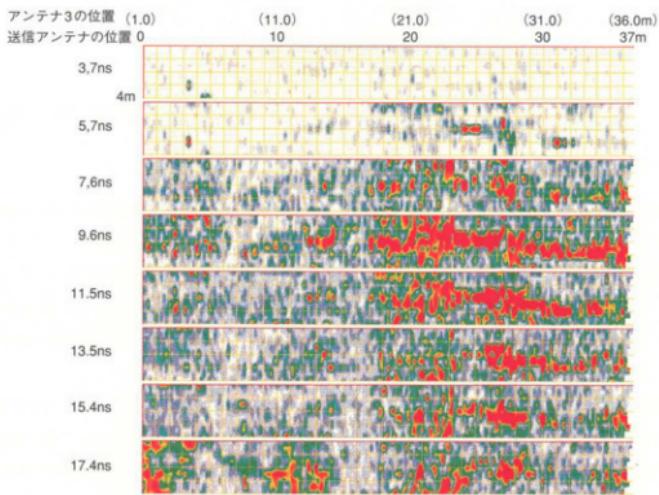


F区,アンテナ3, 19.3nsec~33.0nsec

第5図 アンテナ#3で受信されたF区の水平断面図  
 Time-slice signal images of trench F received by antenna3.

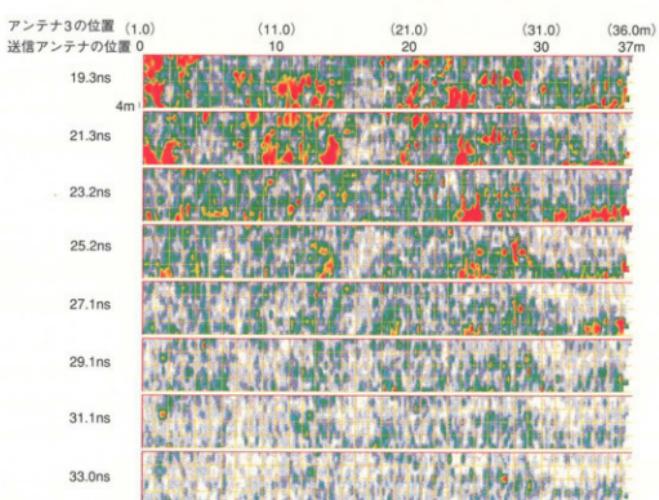
なっている。

その他の発掘区では際立って強いイメージは得られなかった。



第6図 アンテナ3で受信されたG区の水平断面図

Time-slice signal images of trench G received by antenna3



第7図 アンテナ3で受信されたG区の水平断面図

Time-slice signal images of trench G received by antenna3

## 付章2 山王廻遺跡の地形的環境

阿子島 功（山形大学）

### 第1節 山王廻遺跡の立地環境の地形学的な問題点

山王廻遺跡の特徴のひとつは1964～65年の発掘調査（旧小学校体育館の部分の深掘り）の際に、深さ1.5mを越す泥炭層から保存状態のよい縄文晚期の木製品、漆加工品、織維、骨角器などが多数発見されたことである。このことが1971年に国史跡の指定をうけたことになった根拠の重要な部分である。

1948年～1996年の間の継続的な調査によって、山王廻遺跡は微高地～低湿地にかけて広がる、縄文時代晚期、弥生時代、奈良時代などの複合遺跡であることが明らかにされつつある。実は、前述の深い泥炭層（縄文晚期の遺物包含層）は、みかけ上、微高地側にあったことが、地形学的には重要な問題であった。

山王廻遺跡は、北上川支流一迫川にそって旧北上川河口から約65km上流に位置している。ここで沖積低地の幅は約6km、沖積層の厚さは最大約15m<sup>註1</sup>である。北上川本川にそっては、河口から約50kmの、一関～花泉間ににおいて地表下19.5m（海水面～3m、JR仙沼線鉄橋の橋脚下）から縄文早期末の埋没遺物が発見されており（小野寺1970）、ここでの沖積層の堆積には縄文前期頃のいわゆる縄文海進の海水準面上昇の影響が及んだと考えられた。したがって、一迫町真坂付近にも同様に海水準変動の影響が予想された。上流域でも、縄文時代前期の高海水準期には堆積が、縄文後晚期～弥生時代の低海水準期には離水が、さらにその後は谷埋めがおこりやすいと考えられる（阿子島 1968 p.210の注8）。

1994年度山王廻遺跡保存活用基本計画策定案にもとづいて、今回調査の目的は①縄文時代集落の構造を明らかにする、②遺物を含む泥炭層の分布と保存状態を明らかにする、③泥炭層の植物遺存体の分析によって縄文時代晚期の自然景観を明らかにする、などである。このうち、①②は、同時に山王廻遺跡の立地する微高地～低湿地の微地形と遺物包含層の形成過程、縄文時代～弥生時代の海水準変動の影響の有無を検討することにもなる。

- さらに具体的にいえば、縄文時代晚期～弥生時代前期の山王廻集落の景観復原の問題にかかわって、
- 住居の広がりは、微高地の頂上から下限がどこまでか。
  - 厚い泥炭層は微高地のなかにわざかにいりこんだ微凹地にあると推定されるが、当時の定期的な低湿地の上限範囲はどこまでか。遺物包含層である泥炭層は、水深のある捨て場か、陸上の生活面で捨てられたものが後に湿地になったのか。
  - 縄文時代晚期～弥生時代にかけての微凹地の埋没過程。縄文時代晚期～弥生時代にかけて集落は洪水を被ったか。それは自然堤防の形成過程を復原することでもある。自然堤防は、從来、洪水のたびに成長すると説明されてきたが、いつどれくらいの速さで成長しているのかは実はよくわかっていない。沖積世の海水準変動に関連して形成された歴史的所産である可能性もある（阿子島 1980他）。

註1 一迫町簡易水道水源のボーリング（昭和40年）では地表下9.3mまで粘土質砂礫で以下角礫巖、慶泉堂医院（昭和36年）では14.8mまで砂利、以下十丹（以上は昭和40年第一迫町役場羽野次義氏のご教示による）。旧一迫小学校北西ブール地点における調査ボーリングNo.1（1997）では地表下13.25m以下15.28mまで泥炭質粗粒砂岩である。

## 第2節 山王町遺跡の立地する微地形と土層区分

遺跡は、一迫川と長崎川の間にある微高地（自然堤防）を中心にひろがっている。この微高地は山王神社～給食センターを尾根として、南側の長崎川河床より最大約3m高い。

この微高地は表面を洪水ローム（flood loam）におおわれている砂礫堆である。<sup>註2</sup>洪水ロームのなかに包含層が挟まれている。トレントごとの上層区分と記載は別項にゆずる。現在は確認調査の途中段階でもあり、ここでは遺跡の全体像復原にかかる微地形と土層区分の考え方について、作業仮説を含めたシナリオとして述べたい。

### 1) 微高地の平面形

北縁（小学校跡地の北側の住宅と畠地の北縁の田道～あやめ園）は、一迫川の側刻崖と考えられる、北に凹の、2つの弧形の段差である。その比高は1m程度である。このうち東側の弧形の段崖は後述の明治大学実測図（図2）では現在の山王池のところでは堀川であるが、その東半部はやや不明瞭で池をつくるときにすこし強調されているようである。その原形は1985年発刊山王町遺跡調査図録の図版1-3に写っており、ごく緩い段々の水田である（畦の平面形は北に凹の弧形である）。

西縁（山王橋の北側～歴史民俗資料館～プール）は、長崎川の河道跡と考えられる段差である。比高数10cm程度である。南東縁は、長崎川の滑走斜面状のごく緩い斜面であり、河床から頂部までの比高は約3mである。

この微高地の広がりは東西約350m、南北約150mであり、北側をかつての一迫川河道に、南側を現在の長崎川の河道に、西側をかつての長崎川の河道に縁どられている。微高地の東縁のぎおん橋付近で、かつては一迫川と長崎川とが合流していたことがあったと考えられる。

### 2) 微高地のなかの微起伏

微起伏の詳しい測量図として、等高線間隔0.5m、縮尺1/400の測量図が明治大学による1962年の調査の際に作成されている（第2図）。この実測図によれば、山王神社～給食センターを尾根とし、その東西両側がわずかに低い。測量図では頂部は畑、尾根の西側（小学校校庭～体育館=後の東北大學発掘区）は、水田であった。さらに現給食センターの位置に尾根を横切るように小さな水田が食い込んでいる。また山王神社南側の長崎川滑走斜面に現河道方向に平行な細長い凹地が描かれている。

大正5年調1:50,000地形図（第1図）では高度40m等高線が微高地を表している。長崎川の川の字が重なっているが、まとまった畠記号はない。長崎川ぞいの針葉樹記号と小学校北側の畠記号が微高地を表している。

### 3) 土層区分のあらまし

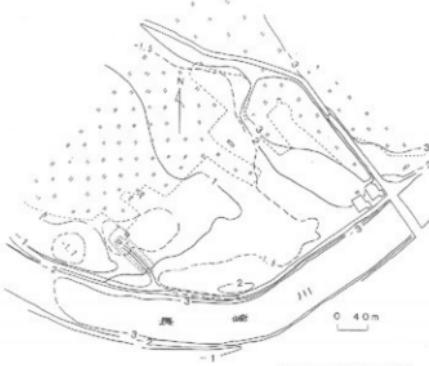
土層の層序の大区分として、上よりドヘ3層ある；新しい盛り土（小学校校庭や遺跡整備のための盛り土でごく新鮮な山土）／洪水ローム層（繩文時代、弥生時代、平安時代の包含層を含む。シルト層を主とし、一部に砂礫のレンズ層を

---

註2 洪水でもたらされたローム。ロームは（砂・シルト・粘土）の配分比によって特徴づけられる土壤の粒度分類のひとつである。関東ローム層は同時に火山灰起源であるため、成因を含む地層呼称となつたが、ロームは本来は粒度組成のみを意味する。



第1図 大正5年測1：50,000地形図×2倍  
山王閣遺跡は長崎川の川の字のところ  
Topographic map to show  
the micro-relief from landuse in 1916.



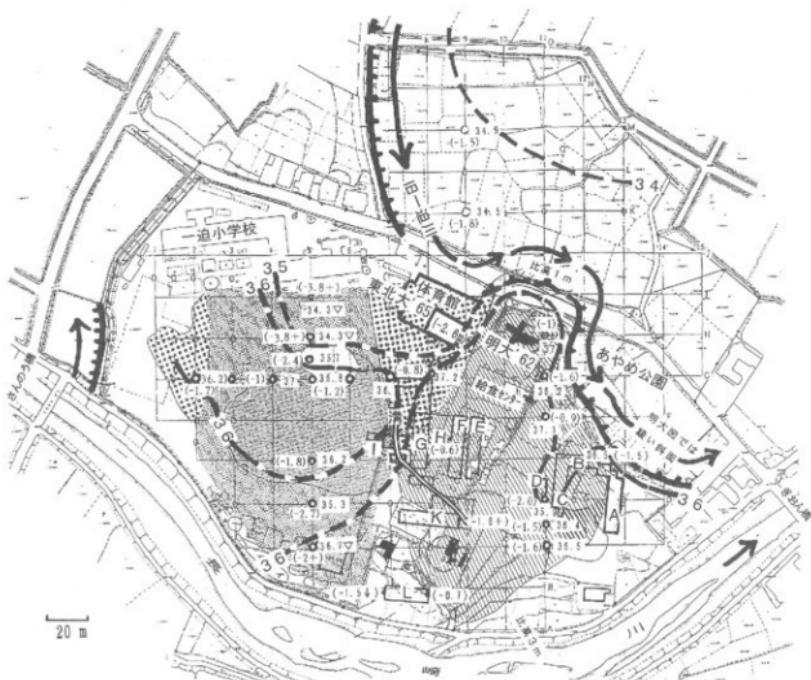
第2図 微起伏の詳しい測量図（明治大学 1962測量 等高線間隔0.5m 緯尺1/400原図より）基準点印よりの比高。  
Detailed topography of Sanno-gakoi site surveyed by  
Meiji Univ. Archeologic Research Team (1964)

挿んでいる。その上面の旧表土は、畑あるいは水田の耕作土である。) / 自然堤防の原形となつた砂礫堆をつくる砂礫層。

洪水ローム層の層厚は、B区では1.5m、H区では最大1+m程度、G区では最も薄く0.5m程度、I区の谷中心（試掘トレンチ）で2.5m、K区で1.6mと変化している。洪水ローム層基底の絶対高度はB区で36.5m、H区で36.2m～37.0m、G区が37.1mと高く、K区で36.5m、I区の谷中心で35.0mと波状に変化している。洪水ローム層は、一部にレンズ状の砂礫層をはさんでいるが、シルトを主体としているので以下“シルト層”と呼ぶことがある。

洪水ローム層中の砂礫のレンズは、洪水ローム層の地山層である砂礫層を母材とし、わずかな起伏に応じて浅い谷にわかって2次的に移動・再堆積したものである。両者を比較すると、地山層は、明褐色で相対的に明るく、しまっているが、2次移動したものは（とくに埋没谷の部分では）、泥質のマトリックスを含んで暗く、しまりが悪い。したがって、前者を“きれいな砂礫層”、後者を“よごれた砂礫層”と呼ぶ。頂部であるF区・E区の堅穴住居床面や確認面にはシルト層が、H区ではシルト層とレンズ状の“よごれた砂礫層”（第4号堅穴住居跡）、G区では“きれいな砂礫層”（第4号土器埋設土痕付近）が露われている。その基底はH区の東西5mの間で36.0m～36.8mと波うっている。I区の谷中心ではよごれた砂礫層の厚いレンズが2層以上ある。K区ではシルト層が厚く砂礫のレンズはない。

旧体育馆の下にある豊富な木質遺物包含層である泥炭層は、微高地を刻む深い谷にそって分布している可能性



第3図 自然堤防の原形をなす、洪水ローム層の地山層（“きれいな砂礫層”）の上限高度分布

Contour map showing the form of the gravel mound lying under the flood loam bed of the natural levee.

基図は震災保存管理計画書（1976）のハンドボーリング調査結果および今回発掘区のデータによる。

絶対高度に若干のずれが含まれるかもしれない。

- |  |                         |
|--|-------------------------|
| → 洪水ローム層の下底の高度<br>(砂礫層上面高度)<br>（　）は旧地表からの深さ<br>△はそれより下 | ○ '75 ガ-シング 地点          |
|  | ■ 遺物包含層の分布              |
|  | ◆ "北の谷の深い肥沃層"           |
|  | ■ 泥炭層                   |
|  | ■ 厚さ0.3m以下の比較的乾燥した泥炭層   |
| ← 微地形の境界   |                         |
| ■ 明野文明氏調査トレンチ  |                         |
| ■ 明治大学'62調査トレンチ  |                         |
| [ -2.6e ] 東北大学'65調査トレンチ                                | [ A, , I ] '95-96調査トレンチ |

があり、これを（仮に）“北の谷の泥炭層”と呼ぶ。

“北の谷の泥炭層”は山王町遺跡調査図録（1985年刊）でみると粘土やシルトを主とし、砂層をはさんでいるが、まとまった礫層は含まれていない。東北大1965年発掘区（体育館南東隅）北壁断面図（調査図録 図3-3 L-H-D区）の東側部分では、地表下1m～2.6mにななめに（地層境界が東へ上がる）砂礫層が描かれている。この砂礫層は今回の“よごれた礫層”あるいは“きれいな礫層”的いづれかに相当し、“北の谷の泥炭層（遺物包含層）”は“きれいな礫層”を地山層とする谷地形を埋めるように堆積しているように解釈できる。今回のG区中央の底（B51区、旧地表下約0.6m）、さらに体育館南東部に近いJ区（旧地表下約0.7m）に露われている“きれいな砂礫層”はこの砂礫層に連続するのではないか。北の谷の部分は、平面的に、一迫川の旧河道が南へ弧形に入りこんでいる部分（体育館の北側道路付近）へつながり、その東側の給食センター北側（明治大学の北発掘区）は、微高地が張り出している部分である。

1996年発掘のI区、N区、K区にかけてNW-SE方向にのびる溝跡（第7号溝跡、弥生時代）が検出されたが、これはI区試掘トレンチで確認された縄文時代晚期遺物を含む埋没谷に沿っている。I、N、K区の1996年調査の確認面は弥生時代の生活面であるが、このときまでに谷はおおよそ埋もれきってごく浅い状態になっていた。その中心部を人為的に溝として利用している。

埋没谷の西岸はI区試掘トレーニングでは確認されていない。しかし、I西区北壁では、灰白色火山灰層（平安時代の十和田-aか）がわずかではあるが、西へむかって傾き上っている断面がみえるので、縄文時代埋没谷もグランド側でたちあがる可能性がある。

### 第3節 微地形形成史の作業仮説

近い将来の発掘調査を含めれば、つぎの4時期にわけて微地形図が復原できるであろう。

#### a. 縄文時代晚期以前 — 自然堤防の原形が成立した時の地形

砂礫堆の原起伏は“きれいな礫層”上面の等高線図として表現される。史跡山王町遺跡保存管理計画書（1976、図4-1～7）に小学区校庭を含む広い範囲の20地点のハンドボーリング調査結果の記載があり、これと1995・96年発掘区の観察によって、礫層上面の等高線図を作成すると、図3になる。K区を除けばこのときの起伏が現在まで継承されることとなる。のちに厚い泥炭層が堆積することになる谷の原形は長崎川旧河道か。

#### b. 縄文時代晚期 — 縄文時代晚期山王町集落が存続した時の地形

aとすこし違う点は、G区に対してK区のほうが“きれいな砂礫層”の上面は低いが洪水ローム層が厚く堆積したため、K区が自然堤防の最高点となった点である。おおよそ現在の起伏に近い状態で、山王町集落が営まれ

註3 青森市三内丸山遺跡のいわゆる泥炭層は、低い丘陵状の地形の谷斜面上部に堆積していて、沖積面との比高は大きいが、地下水位が高い条件によって保存がよかつた。山王町遺跡の泥炭層は微高地側に入り込んだ深い谷から外側の低湿地にかけて分布しており、もともと地下水位が高い条件がそなわっているようである。

註4 ボーリング柱状図から“よごれた礫層”か“きれいな礫層”的いづれかの区別はできない。また、絶対高度の復原に若干の誤差が含まれる。今後精密化することとして、今回は作業仮説としておおよその旧地形復原を試みた。

註5 北側は当時の谷が2.5m以上埋没しているから、かつては現在より起伏があったといえる。しかし南側では長崎川河床と自然堤防頂部の比高が現在でも3mある。

た。K区ではシルト層を地山層として、G区では砂礫層やシルト層を地山層として堅土住居がつくられた。

I区の谷は半湿地状態であり、洪水時には側方から砂礫（2層車以上）や土器片が流れ込んだ。谷埋め層の中上部の黒泥炭層は半湿地状態で腐植が分解されたことを示している（水深のある湿地であるならば分解がすすまない）。北の泥炭層も同様に捨て場として遺物が流れ込んだ。

I区の谷と北の泥炭層の谷は連続すると考えられるが、北の泥炭層の部分には砂礫層があまり届いていないようである。その水深の有無については今後の再検討課題とする。下部層については腐植の分解程度や珪藻分析が、上部のN層（1965年）付近に多く検出された石組や炉の遺構などが、地面の乾燥の指標となろう。北の泥炭層の谷の西岸の立ち上がりもわかっていない。<sup>註6</sup>

自然堤防の頂部では堆積があまりおこらないので、集落存続期間中に遺構が切り合いになるが、谷部では堆積し易いので遺物包含層は間層にはさまれて分層しやすい。

#### c. 弥生時代 — 弥生時代前期山王団集落の時の地形

I区と北の泥炭層の谷がおよそそ埋もれきって、ごく浅い谷となっていた。谷の上部の覆土は明るい色のシルト層であり、洪水で堆積したものと考えられる。前後してE・F・G・I・N・K区にかけて深い谷の中心に沿って溝が作られた。溝埋め層は基底の0.1mだけが黒褐色で泥質である。

#### d. 平安時代 — 灰白色火山灰（十和田To-a火山灰）が降灰・堆積した時の地形

I・M・J区、北の泥炭層区には旧小学校建設時まで水田があったが、低いI・J区やさらに北側では覆土の灰白色火山灰の層準に平安時代水田の検出の可能性がある。この後も深い谷に堆積がみられるので、自然堤防頂面は離水していないであろう。

### 引用文献

- 阿子島 功 1966 追川沿岸の地形 東北地理学会 東北地理 v.18 №3 pp.123-132  
 阿子島 功 1968 北上川中下流の河谷底の構造 東北地理学会 東北地理 v.20 №4 pp.206-214  
 阿子島 功 1978 低地の微地形と海水準変動（2）－古野川下流平野および四十万川川口平野 日本地理学会 地理学評論 v.51 №8 pp.643-661  
 阿子島 功・禮原 敏 1991 東北地方 10C頃の降下火山灰について 中川久夫教授退官記念地質学論文集 pp.1-9  
 一迫町・株式会社テクノ長谷 1997 稲文マインド研究所地質調査委託報告書  
 一迫町教育委員会 1976 史跡山王団遺跡保存管理計画書 p.20  
 一迫町教育委員会 1985 山王団遺跡調査図録 p.15 図1～4 国版37 付図2  
 一迫町教育委員会 1991 国史跡山王団遺跡発掘調査報告書 I p.42 国版19  
 小野守信吾 1970 仙台平野北縁部における雁形海道に関する一考察 第四紀総合研究会 第四紀 №15 pp.2-3

Geomorphology and Soil stratigraphy in the Sanno-gakoi Site.

AKOJIMA, I., Environmental Geography, Faculty of Human Culture and Social Sciences, Yamagata Univ.

The Latest Jomon and Early Yayoi Sanno-gakoi archeologic site were on the natural levee. The wooden huts were on the top of the natural levee and the abundant remnants including wooden tools, bones and pieces of clothes were in the peat bed deposited in the shallow valley in the fringe of the mound. The depositional processes of the Sanno-gakoi mound may be synchronized with the Holocene eustatic minor sea level fluctuations.

註6 史跡山王団遺跡保存管理計画書（1976年刊）図8の遺物包含泥炭層分布の平面形はくさび形で谷埋め型を示説するが、西側は無遺物泥炭層で疊層（きれいな疊層上面深底型）の立ち上がりはない。現在の疊地形ともあわないが、西は遺物も届かない深い泥炭地になるのか？山王団西村があるのか、東村（本体）との間に鞍部で境されるのかも検討しなければならない。

## 付章3 縄文時代晚期・弥生時代の古環境変遷

パリノ・サーヴェイ株式会社

### はじめに

平成7年度の分析調査では、弥生時代以降の堆積物を対象として古環境復元に関する分析調査を実施したが、花粉化石がほとんど検出されなかったため、本遺跡周辺の古植生について詳細に検討することができなかった。今回実施された発掘調査では、自然堤防上から後背湿地にかけて縄文時代晚期以降の遺物を包含する土層を確認することができた。このことから、史跡整備事業の一環である縄文時代晚期～弥生時代の古環境変遷について検討することを目的として、土層断面より試料を採取し、珪藻分析・花粉分析・植物珪酸体分析・樹種同定を実施した。また、弥生時代前期後半の住居跡の炉から検出された燃料材と推定されている炭化材について、その種類を明らかにした。

### 第1節 試 料

前回の分析調査では、A～K区で土壤試料を採取し、便宜的に第1～7地点とした。今回はI区北壁自然堆積層から試料を採取し、ここを第9地点とした。本地点の堆積物の時代性については、試料番号1採取層準が弥生時代前期後半、試料番号4・5採取層準が弥生時代前期に相当すると考えられる。また、試料番号7以深は縄文時代晚期の可能性があるとされている。本地点の層序および各分析試料は第1図に示す。樹種同定試料は、第9地点試料番号7・11・12を採取した付近で検出された材3点（試料番号W-1～W-3）である。この他、弥生時代前期後半の住居跡（第3号堅穴住居跡）の炉跡で認められた炭化材が採取された。この炭化材は数個体採取されたが、試料を観察したところ同一個体が割れたものと判断されるため、一括試料として取り扱った。

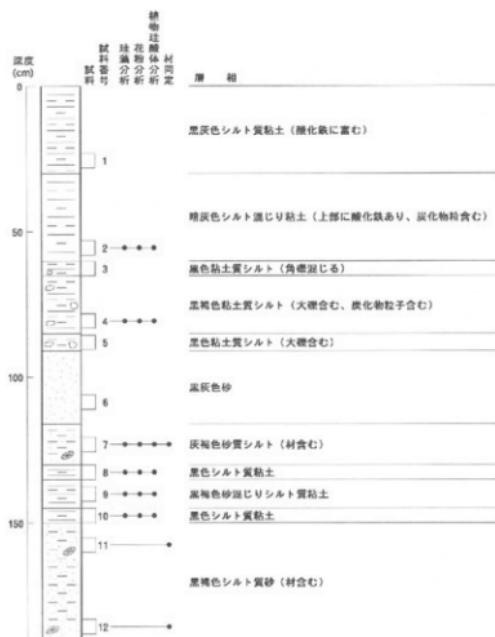
### 第2節 分析方法

各分析方法については、一迫町教育委員会が保管する「平成8年度山王廻遺跡自然科学分析調査報告」を参照されたい。

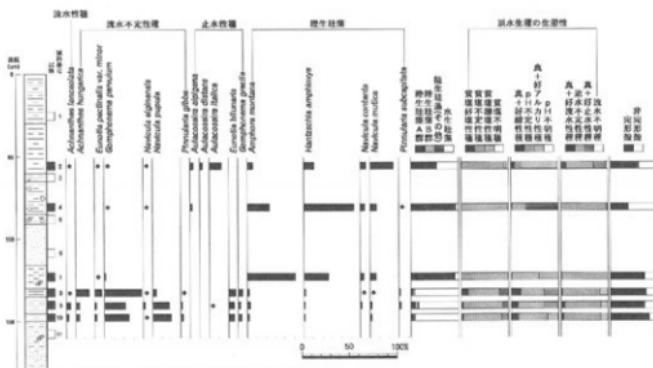
### 第3節 化石の産状

#### 1) 硅藻化石

産出種のほとんどは淡水生種で構成され、産出分類群数は28属121種類である（第2図）。珪藻化石群集は、試料番号10～8、試料番号7・4、試料番号2で異なる。試料番号10～8では淡水不定性で富栄養水域に多く認められる *Gomphonema parvulum*、*Navicula pupula* が約20%と多産する。この内、後種は有機汚濁の進んだ富栄



第1図 模式柱状図および分析層位



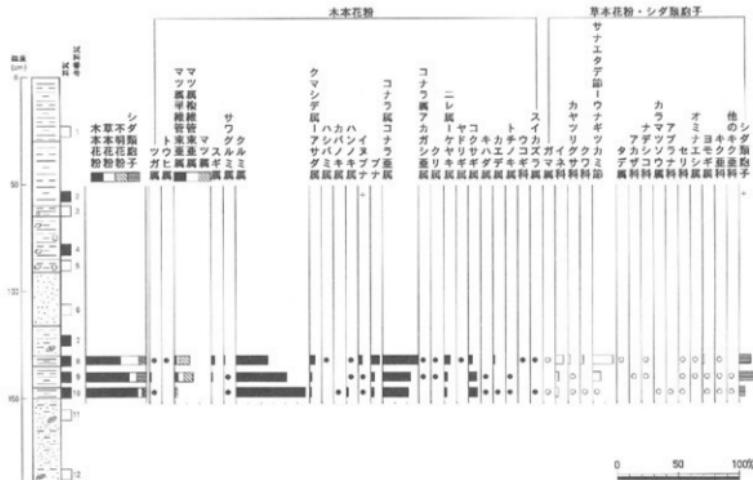
第2図 主要珪藻化石群集の変遷

各種産出率・完形殻数産出率は全個体数、淡水生種の生態性の比率は淡水生種の合計を基数として百分率で算出した。いずれも100個体以上検出された試料について示す。なお、●は1%未満の種類を示す。

養水域を指標する好汚濁性種とされている (Asai K. & Watanabe T. 1995)。これに付随して、好流水性の *Achnanthes lanceolata*、流水不定性の *Achnanthes hungarica*、*Eunotia pectinalis* var. *minor*、*Pinnularia gibba*、好止水性の *Eunotia bilunaris*、*Gomphonema gracile* を伴う。これらの種類の中で、*Eunotia pectinalis* var. *minor*、*Pinnularia gibba*、*Gomphonema gracile* は、沼よりも浅く水深が 1 m 前後で、一面に水生植物が繁茂するような沼沢地やさらに水深の浅い湿地に生育する沼澤湿地付着生種群 (安藤 1990) である。試料番号 8 では *Navicula pupula* が減少し、*Gomphonema parvulum* と *Achnanthes hungarica* が若干増加する。試料番号 7・4 では珪藻化石群集が急激に変化し、陸生珪藻の中でも耐乾性の高い A 群 (伊藤、堀内 1991) の *Amphora montana*、*Hantzschia amphioxys* が 30~50% と優占する。試料番号 2 では陸生珪藻 A 群の *Navicula mutica* が 25% と多產するほか、*Aulacoseira italica* などの止水性種も多く産出する。

## 2) 花粉化石

試料番号 2・4・7 は花粉化石の保存状態が悪い。試料番号 8~10 では比較的良好に花粉化石が検出され、クルミ属・コナラ属・コナラ亜属が多産し、マツ属・クマシデ属・アサダ属・ブナ属・ニレ属・ケヤキ属・コタガギ属などを伴う。草本花粉は検出個体数が少なく、ガマ属・イネ科・カヤツリグサ科・クワ属・サナエタデ節・ウナギツカミ節・ヨモギ属などが検出される。この内、サナエタデ節・ウナギツカミ節は上位に向かい増加する (第 3 図)。



第 3 図 花粉化石群集の変遷

出現率は、木本花粉は木本花粉化石総数、草木花粉・シダ類胞子は胞子数より不明花粉を除く数を基準として百分率で算出した。なお、○●は 1%未満、+は 100 個体未満の試料について検出した種類を示す。

## 3) 植物珪酸体

植物珪酸体は全体的に保存状態が悪く、また検出個体数も少ない。検出される中では、タケ亜科、スキ属・イチゴツナギ亜科が多い傾向にある。また、試料番号8より上位でネガサ節・タケ亜科の珪酸体列が検出され、試料番号7~10で種類不明の珪化した組織片が多産する(第1表)。

## 4) 材化石

W-2は樹皮であったため、樹種の同定には至らなかった。その他の試料は、全て落葉広葉樹のタリに同定された(第2表)。主な解剖学的特徴を以下に記す。

・クリ(*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.)

## ブナ科クリ属

環孔材で孔眼部は1~4列、孔眼外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は單穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、單列、1~15細胞高。柔組織は周辺状および短接線状。

第1表 植物珪酸体分析結果

種類	試料番号	Loc 9				
		2	4	7	8	9
イネ科葉部短細胞珪酸体						
キビ属		4	-	-	-	-
タケ亜科ネガサ節		-	-	1	2	-
タケ亜科	17	25	13	46	7	28
ヨシ属	-	-	-	3	1	-
ウシクサ族スキ属	3	2	3	8	1	6
イチゴツナギ亜科	17	7	18	5	5	5
不明キビ型	7	16	17	31	19	21
不明ヒゲシハ型	5	6	1	12	2	10
不明ダンテル型	11	8	5	1	5	12
イネ科葉身根鈍細胞珪酸体						
タケ亜科ネガサ節		-	-	3	4	-
タケ慶科	11	6	11	17	4	14
ヨシ属	2	-	-	3	-	-
ウシクサ族	1	8	4	12	6	7
不 明	10	6	9	16	8	13
合計		61	64	58	111	40
イネ科葉部短細胞珪酸体	24	20	27	52	18	35
イネ科葉身根鈍細胞珪酸体	83	84	85	163	38	117
粗織片						
ネガサ節切胞胎列	-	-	1	2	-	-
ネガサ節機動網胞胎列	-	-	1	-	-	-
タケ亜科短細胞列	1	1	1	1	-	-
不明網織片	-	-	77	16	4	13

第2表 樹種同定結果

試料採取地點	試料名	時代・時期	用途など	樹種
第9地點	W-1	縄文時代晚期	自然木	クリ
	W-2	縄文時代後期	自然木	樹皮
	W-3	縄文時代後期	自然木	クリ
第3号堅穴住居跡・炉跡	炭化物	弥生時代中期	燃料材	クリ

## 第4節 堆積環境の変遷

珪藻化石群集は試料番号8と試料番号7の間を境として急激に変化することから、堆積環境もこの間を境として変化したと考えられる。試料番号10~8では水生珪藻が多産し、中でも富栄養水域に多く認められる種類、好汚濁性種(Asai K. & Watanabe T. 1995)、沼沢湿地付着性種(安藤 1990)が多く検出される。このような珪藻化石の特徴から、縄文時代晚期頃の調査地点周辺では、流水の影響の少ない富栄養な沼沢地~湿地のような湿潤な水城が存在したと考えられる。また、草木花粉化石の座状から、このような沼沢地~湿地の周辺には、ガマ属・イネ科・カヤツリグサ科・クワ属・サナエタデ節ーウナギツカミ節・ヨモギ属などが生育していたと考えられる。このように比較的安定した環境の中で、黒褐色~黒色を呈するシルト質粘土が堆積したと考えられる。

試料番号7・4では陸生珪藻の中でとくに耐乾性の強いA群が優占する。現在の陸生珪藻の分布調査によれば、陸生珪藻の相対頻度の和が70~80%以上であれば、その試料が堆積した場所は水域以外の常に空気にさらされた

好気的環境であるとされている（伊藤、堀内 1991）。これにしたがえば、試料番号 7・4 とも陸生珪藻 A 群が約 90% 以上検出されていることから、木屑準が堆積した縄文時代晚期～弥生時代前期頃の調査地点周辺は、陸生珪藻の繁茂できるような好気的環境へ変遷したと考えられる。なお、試料番号 2 では陸生珪藻に加えて好湿性種が増加する。これより基本的には好気的な環境であったと思われるが、弥生時代前期の頃になると多少は水の影響を受けた可能性もある。一方、試料番号 7・4・2 ではタケ亜科・スキ属・イチゴツナギ亜科などの植物珪酸体が検出されるが、中でもタケ亜科が多く検出される傾向にある。タケ亜科珪酸体は、他の珪酸体と比較して生産量が多く、しかも風化にも強いとされている（近藤 1982 杉山、藤原 1986）。したがって、周辺は優占的にタケ・ササ類で覆われていたと考えにくい。

以上のように、本遺跡周辺は縄文時代晚期頃に沼沢～湿地のような低湿な環境であったが、縄文時代晚期～弥生時代前期の頃になると好気的環境に変化したと考えられる。このような環境の変化は、一迫川や長崎川などの河川により自然堤防が形成され、それが離水した後に集落が形成されやすい好気的環境が整ったことを示していると考えられる。

## 第 5 節 縄文時代以降の周辺植生

縄文時代晚期頃の植生は、堆積層中から得られた花粉化石や材化石の産状からマツ属複維管束亜属・マツ属單維管束亜属・スギなどの針葉樹、クルミ属・クマシデ属・アサダ属・ブナ属・コナラ亜属・クリ・ニレ属・ケヤキ属・コクサギ属・キハダ属・カニエ属・トチノキ属などの落葉広葉樹で構成されていたと推定される。また、クルミ属・ニレ属・ケヤキ属・トチノキ属などは、河道周辺や谷間など比較的潤滑な場所を好みて生育する。したがって、当時本遺跡周辺の後背丘陵地などにはナラ類を中心とした落葉広葉樹林に覆われており、周辺低地の河道周辺などにクルミ属・ニレ属・ケヤキ属・トチノキ属などの木本類が生育していたと推定される。中でもクルミ属は出現率が著しく高いことから遺跡近辺に生育していたと考えられ、局地的な植生を反映している可能性がある。仙台平野周辺における花粉分析結果（奥津、竹内 1972 鶴原、金井 1994 内山 1987、90 安田 1973、80 宮城他 1979）などによると、冷温帶落葉広葉樹林に類似した景観であったと推定されている。このようなことからみて、本地域周辺もこれらの地域と同様に冷温帶落葉広葉樹林のような植生が存在していたと考えられる。試料番号 7 より上位になると、花粉化石がほとんど検出されないため、弥生時代前期頃の周辺植生を検討することができない。このような傾向は、平成 7 年度調査でも認められた。おそらく前述した環境の変化により、花粉化石が分解・消失した可能性がある。なお、後述するように弥生時代前期後半の堅穴住居跡から検出された燃料材がクリであることから、引き続き周間にクリが生育していたと指摘できる。

## 第 6 節 炉 の 燃 料 材

弥生時代前期後半の炉の燃料材は、縄文時代晚期の自然木と同様にクリであった。クリは、縄文時代から燃料材や住居構築材によく利用されており、東北地方ではとくに類例が多い（パリノ・サーヴェイ株式会社 1993など）。弥生時代については資料が少なく、各地域での用材選択の傾向は不明な点が多い。今回の結果から、本遺跡周辺

では、弥生時代前期後半においても縄文時代晚期と同様にタリが生育しており、その木材を利用していたことが推定される。

### 引用文献

- Asai, K. & Watanabe, T. 1995 Statistic Classification of Epilithic Diatom Species into Three Ecological Groups relating to Organic Water Pollution (2) Saprophilous and saproxenous taxa. *Diatom*, 10, pp. 35–47
- 安藤一男 1990 淡水産業による環境指標種群の設定と古環境復元への応用 東北地理42 pp. 73–88
- 伊藤良永、樋内誠司 1991 陸生珪藻の現在における分布と古環境解釈への応用珪藻学会誌6 pp. 23–45
- 近藤謙二 1982 Plant opal分析による黒色腐植層の成因究明に関する研究 昭和56年度科学研修費(一般研究C)研究成果報告書 p. 32
- 近藤祐三、佐原 隆 1986 植物珪酸体分析 その特性と応用 第四紀研究25 pp. 31–64
- Krammer, K. 1992 PINNULARIA, eine Monographie der europäischen Taxa. *BIBLIOTHECA DIATOMOLOGICA*, BAND 26 pp. 1–353 BERLIN-STUTTGART.
- Krammer, K. and Lange-Bertalot, H. 1986 Bacillariophyceae, Teil 1, Naviculaceae. Band 2/1 von: Die Suesswasserflora von Mitteleuropa, p. 876 Gustav Fischer Verlag.
- Krammer, K. and Lange-Bertalot, H. 1988 Bacillariophyceae, Teil 2, Epithemiaceae, Bacillariaceae, Surirellaceae. Band 2/2 von: Die Suesswasserflora von Mitteleuropa, p. 536, Gustav Fischer Verlag.
- Krammer, K. and Lange-Bertalot, H. 1991a Bacillariophyceae, Teil 3, Centrales, Fragilariaeae, Eunotiaceae. Band 2/3 von: Die Suesswasserflora von Mitteleuropa, p. 230, Gustav Fischer Verlag.
- Krammer, K. and Lange-Bertalot, H. 1991b Bacillariophyceae, Teil 4, Achnaethaceae. Kritische Ergänzungen zu Navicula(Linckia) und Gomphonema. Band 2/4 von: Die Suesswasserflora von Mitteleuropa, p. 248, Gustav Fischer Verlag.
- 奥津存生・竹内貞子 1972 仙台平野の沖積層上部にはさまれる泥炭層の花粉分析 地質学雑誌78 pp. 59–64
- パリノ・サーヴェイ株式会社 1993 花粉分析・炭化材同定・種子同定 「御所野遺跡I 縄文時代中期の大集落跡」pp. 341–355 (一戸町教育委員会)
- 杉山真二、藤原宏志 1986 機動細胞珪酸体の形態によるタケア科植物の同定—古環境推定の基礎資料として— 考古学と自然科学19 pp. 69–84
- 鶴原 明、金井慎司 1994 仙台東道路遺跡調査関係の自然科学分析について 仙台東道路関係遺跡調査報告書 名取市文化財調査報告書第33集 p. 110–128 (名取市教育委員会、日本道路公团仙台建設局)
- 内山 隆 1987 中間温帯林域における花粉分析学的研究 その1 東北地方南東部 日本花粉学会誌33 pp. 111–117
- 内山 隆 1990 中間温帯林域における花粉分析学的研究 その2 東北地方南東部 日本花粉学会誌36 pp. 17–32
- 安田喜徳 1973 宮城県多賀城跡の泥土の花粉学的研究—特に古代人の森林破壊を中心として— 第四紀研究12 pp. 49–59
- 安田喜徳 1980 宮城県多賀城跡の泥土の花粉分析【Ⅱ】 多賀城跡 宮城県多賀城跡調査研究所年報 pp. 89–96
- 宮城徹彦、日々野歓一朗、河村智子 1979 仙台周辺の丘陵斜面の削剥過程と完新世の環境変化 第四紀研究18 pp. 143–

## 付章4 繩文時代包含層出土大型植物化石の分析

吉川 純子

### 第1節 試料について

分析に使用した堆積物は試料番号601層から612層までの全14試料である。試料はそれぞれ100ccずつを0.25ミリ日の籠で水洗し、残査から実体顕微鏡で同定可能な大型植物化石の部位のみを選び出した。大型植物化石は分類群を同定し、部位別に計数した。結果は第1表に示されている。なお、同定可能な大型植物化石を出土しなかった層位については表より省いてある。

### 第2節 各層の堆積物と出土した分類群

601層は木片を多く含む砂礫層で、シルトの塊の中に大型植物化石が多く含まれているものと思われる。炭化材片はやや多く含んでいる。最も多く出土したのはヒシ属、次いでクリ、ニワトコ、トチノキ、クワ属となっている。このうち、ヒシ属、クリ、トチノキのはかオニグルミが破片で出土している。これらの他に木本ではミズキ、クマヤナギ属、マタタビ、キイチゴ属、タラノキを、草本ではカヤツリグサ属、スゲ属、エノコログサ属、カナムグラ、ミゾソバ、ミズヒキ、サクランタデ近似種、ボントクタデ近似種、セリ科、カタバミ属、イヌコウジュ属を出土した。

602層はシルトが少ない砂礫層で炭化材をやや多く含む。ここではわずかにオニグルミの炭化した破片を出土した。

603層は砂礫層で炭化片をやや多く含み、草本起源と思われる細かい植物片が多く含まれている。しかし大型植物化石は少なく、わずかにオニグルミの炭化した破片を出土したのみであった。

604層、605a層は砂礫層で炭化片や植物の破片を少し含むが、同定可能な大型植物化石は出土しなかった。

605b層は砂礫に炭化材を少し含み、わずかにオニグルミの炭化片を出土した。

606層は砂礫層で、大型植物化石は出土しなかった。

607層は砂礫層で、わずかにオニグルミの炭化片を出土した。

608層から601a層はほとんど砂礫層で大型植物化石を出土しなかった。

610b層は砂礫にシルトをやや多く含み、炭化片、植物片をやや多く含んでいる。ここでは多く出土したのはクリの破片で、ほかに木本はオニグルミ、ニワトコ、マタタビ、クワ属、ミズキを出土し、草本では、ヒエ、アサの他、スゲ属、カラムシ属、カナムグラ、ナデシコ科、ミゾソバ、ミクリ属、ミズヒキ、ボントクタデ近似種を出土した。

611層は砂礫層中のシルトに木片、植物片を含む。ここでは、木本のオニグルミ、クリ、トチノキ、ニワトコ、クワ属、マタタビ、草本ではミクリ属、スゲ属、カラムシ属、ミゾソバ、ミズヒキ、ボントクタデ近似種、カタバミ属を出土した。

612層は砂礫層で炭化片が多い。

ここからはニワトコを多く出土し、ほかにはサンショウのみ出土している。

### 第3節 層相と大型植物化石より見た堆積環境

試料を採取した地点では、砂礫が堆積物のほとんどをしめていたと思われ、砂礫層には炭化した破片がともに堆積し、レンズ状あるいは薄層のシルトに植物化石が多く含まれていると思われる。また、水湿地に生育するミクリ属、ミヅソバ、サクラタデ近似種、ヒンジ属を出土するが、少ないことと、ヒシ属は大変小さい破片となっていることから、当時この地点に生育はしておらず、流されてきたものと考えられる。

人間が関与していた種類としては、炭化しているオニグルミはもちろんのこと、トチノキ、クリ、ヒシ属は細かい破片となっているため、可能性は極めて高い。また、ヒエ、アサは人間が利用していたものと考えられる。特にヒエは砂礫層という堆積物の状況から考えると、100cc中5個の出土はかなり多い。これらの他に食用や薬用として人間が利用する可能性があるものとしては、クワ属、キイチゴ属、サンショウ、マタタビ、クマヤナギ、ミズキ、タラノキ、ニワトコ、カラムシ属などが考えられる。

以上のことからこの地点の堆積物は一時的に流速がある、大雨などの際に周辺の人間が廃棄したものなどを巻き込みながら堆積した砂礫層と推定される。

### 第4節 特筆すべき分類群

ヒエ：本遺跡で出土した個体は、いわゆる栽培されるヒエに形態が一致する。同定の比較対象として、問題になるのはイヌヒエ、タイヌヒエなどであるが、これら野生種と異なる形態の特徴は、野生種は、穎果の幅が狭く張りが少ないのでに対し、ヒエは幅が広く背面の張りが大きい。また、野生種は穎の先端がかなり尖った感じに対

第1表 山王遺跡構造層より出土した大型植物化石一覧表  
(処理量は100cc)

分類群名	601	602	603	605b	607	610b	611	612
木 本								
オニグルミ	内果皮破片	3			5	2	2	3
	炭化内果皮破片				7	1		
クリ	果実破片	17					21	12
クワ属	種子	9					1	10
キイチゴ属	核	1						
サンショウ	内果皮破片							
マタタビ	種子	3					2	3
クマヤナギ属	内果皮	1						
トチノキ	種子破片	4						2
	幼果	1						
ミズキ	内果皮	2						1
タラノキ	内果皮	1						
ニワトコ	内果皮	9					5	13
草 本								
ミクリ属	果実						1	1
ヒエ	穎						5	
エノコログサ属	穎	1						
カツラリグサ属	果実	2						
スグ属A	果実	2					4	4
スグ属B	果実						3	5
セリ科	果実	1						
ヒシ属	果実破片	24						
カラムシ属	種子						1	1
ミソツバ	果実	2					1	5
ミズヒキ	果実	1					1	4
サクラタデ近似種	果実	2						
ボントクタデ近似種	果実	4					5	2
ナデシコ科	種子						1	
カタバミ属	種子	1						2
アサ	種子						2	
カナムグラ	種子破片	2					3	
イヌコウジュ属	果実	1						

し、ヒニは剛毛の基部は硬化していない。本遺跡で出土したヒニは未炭化の殻であるが、保存状態が良く、ここまで観察が可能であった。

縄文時代からのヒニの出土例は福岡県板付遺跡、宮崎県陣内遺跡、鳥取県青木遺跡があげられる。

アサ：種子はレンズ状で表面は光沢があり、堅く平滑で不明瞭な大きい脈状網の模様がある。一側には平たく片側に偏った丸い不明瞭な基部がある。種子を食用としたり、繊維を布にしたりするいわゆる栽培種とされている。縄文時代からのアサの出土例は、福井県鳥浜貝塚、千葉県余山遺跡があげられる。

## 参考文献

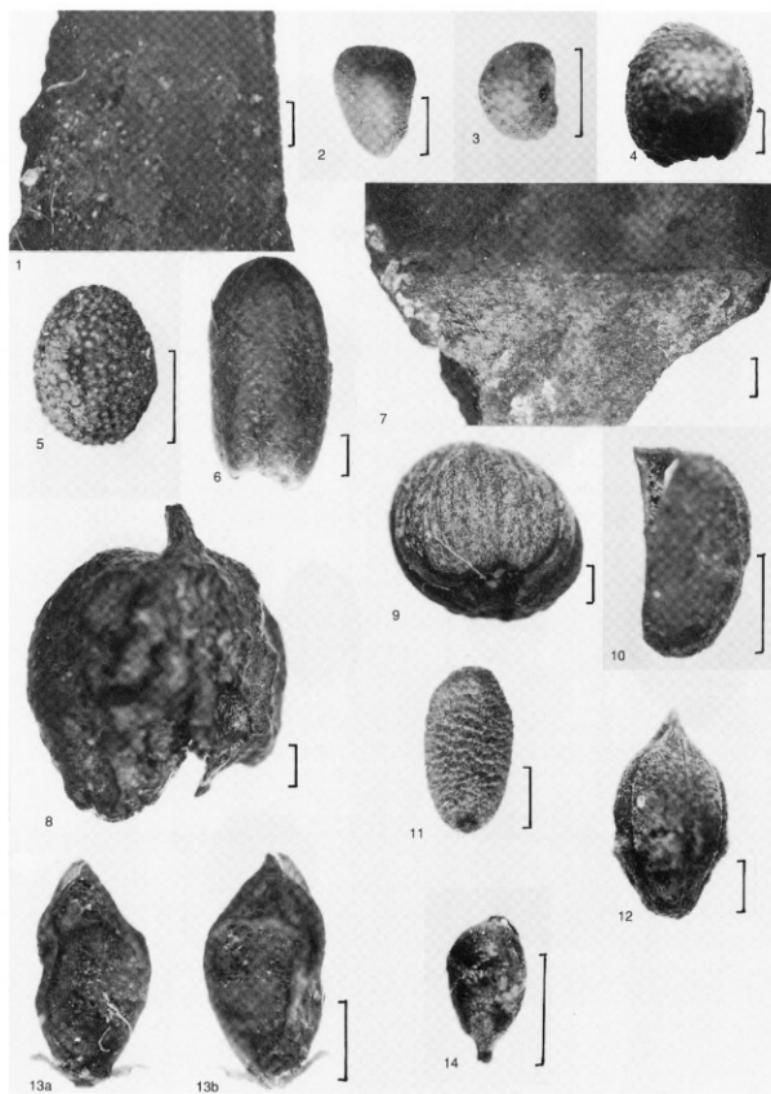
寺沢 薫 1986 弥生時代の食料－畑作物 季刊考古学第14号 特集・弥生人は何を食べたか（雄山閣出版）

第1図 山王廻遺跡出土大型植物化石

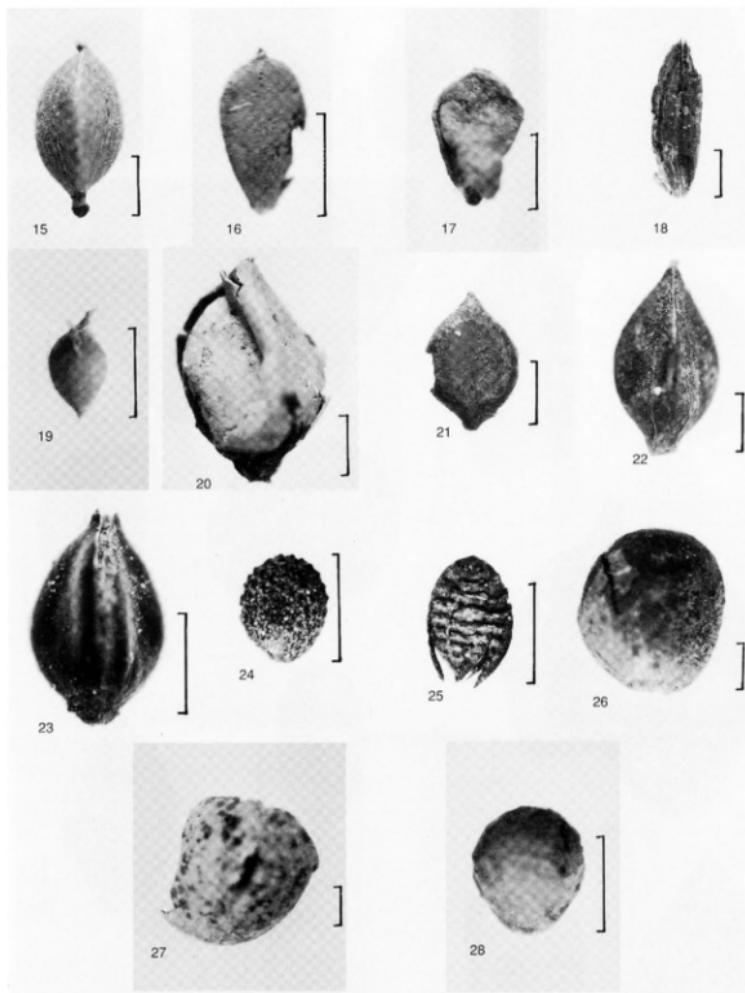
1. クリ *Castanea crenata* Sieb. et Zucc. 果実破片拡大 601層出土
2. クワ属 *Morus* 種子 601層出土
3. キイチゴ属 *Rubus* 核 601層出土
4. サンショウ *Zanthoxylum piperitum* (Linn.) DC. 内果皮 612層出土
5. マタタビ *Actinidia polygama* (Sieb. et Zucc.) Planch. et Maxim. 種子 601層出土
6. クマヤナギ属 *Berchemia* 内果皮 601層
7. トチノキ *Aesculus turbinata* Blume 種子破片拡大 601層出土
8. トチノキ 幼果 601層出土
9. ミズキ *Cornus controversa* Hemsl. 内果皮 601層出土
10. タラノキ *Aralia elata* (Miq.) Seemann 内果皮 601層出土
11. ニワトコ *Sambucus sieboldiana* (Miq.) Blume ex Graebn. 内果皮 601層出土
12. ミクリ属 *Sparagnum* 果実 610b層出土
13. ヒニ *Echinocloa utilis* Ohwi et Yabuno 穀 610b層出土
14. エコログサ属 *Setaria* 穀 601層出土

第2図 山王廻遺跡出土大型植物化石

15. カヤクリグサ属 *Cyperus* 果実 601層出土
16. スゲ属 A *Carex* A 果実 601層出土
17. スゲ属 B *Carex* B 果実 610b層出土
18. セリ科 *Umbelliferae* 果実
19. カラムシ属 *Boehmeria* 種子 610b層出土
20. ミゾソバ *Polygonum thunbergii* Sieb. et Zucc. 果実 601層出土
21. ミズヒキ *P. filiforme* Thunb. 果実 601層出土
22. サクラタデ近似種 *P. cf. conspicuum* (Nakai) Nakai 果実 601層出土
23. ポントクタデ近似種 *P. cf. pubescens* Blume 果実 601層出土
24. ナデシコ科 *Caryophyllaceae* 種子 610b層出土
25. カタバミ属 *Oxalis* 種子 601層出土
26. アサ *Cannabis sativa* Linn. 種子 610b層出土
27. カナムグラ *Humulus scandens* (Lour.) Merrill 種子 601層出土
28. イヌコウジ属 *Mosla* 果実 601層出土



第1図 山王町遺跡出土大型植物化石 (スケールは1mm)



第2図 山王廻遺跡出土大型植物化石(スケールは1mm)

## 付章5 山王岡遺跡合せ口土器棺出土の人歯および人骨

鈴木 敏彦（東北大学歯学部口腔解剖学第一講座）・奈良 貴史（東北大学医学部解剖学第一講座）

### はじめに

1996年の山王岡遺跡発掘調査において、弥生時代前期後葉に属するK区第8号土器埋設土壤第1号土器中から、人骨および人歯の破片が発見された。著者の知る限り今まで報告されている東北地方での弥生時代人骨の発見例は極めて少なく〔1〕〔2〕、東北地方における弥生時代人の変遷を形質人類学的に解明していく上でも資料の増加が望まれている。

今回出土した資料はいずれも細片であり、必ずしも遺存状態は芳しいとはいえたかったが、所見が得られたものに関して概略を報告する。

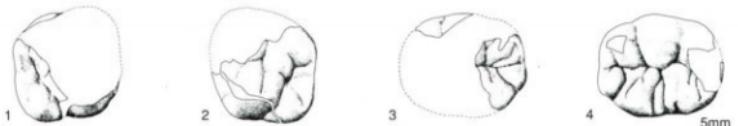
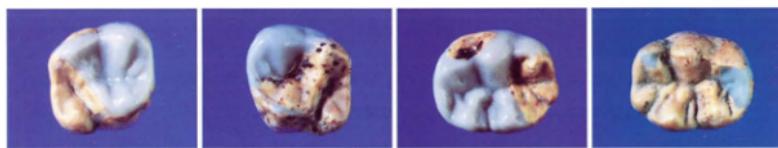
### 第1節 所 見

#### 1) 歯

採取された破片はいずれも茶褐色～黄褐色を示す。有機成分が比較的多い象牙質が失われ、無機成分に富むエナメル質のみが遺存したものと考えられる。破片は非常に脆弱化していたが、4本の歯を同定することができた（写真1～4、図1～4）。便宜上それぞれにNo.1～4までの番号を付して、以下に各々の所見を記載する。なお、この他に、部位の同定・接合が不可能であったおよそ2mm角以下の微小な破片が多数遺存していた。

##### a No.1

上顎右側第二乳臼歯である。斜走隆線の遠心半を含む遠心舌側咬頭の大部分、頬側面溝付近とその遠心側の頬側面の一部、および舌側面溝の近心側から近心隅角にかけての舌側面の一部が確認できたが、互いに接してはい



第1図 山王岡遺跡出土ヒト乳歯  
Human deciduous teeth from the Sanno-gakoi site

ない。

近心面は存在しないために近遠心径は得られない。また頬側面・舌側面に相当する遊離した破片の位置を推測によって復元したものであるから、頬舌径も得られない。

非計測的形質に関しては、Hypocone development[3] はgrade 4、Carabelli trait[3] はgrade 1である。Metaconule[4] はこれに相当する隆起が認められる。

**b No 2**

上顎左側第二乳臼歯である。近心頬側咬頭の全部とそれに続く近心面の頬側半および頬側面の大部分を欠いているが、他は確認できた。

近心面の最大豊隆部を欠き、頬側面も存在しないために計測値は得られない。

No.1 と同様にHypocone developmentはgrade 4、Carabelli traitはgrade 1である。Metaconuleはこれに相当する隆起が認められる。

**c No 3**

下顎右側第二乳臼歯である。遠心咬頭から遠心舌側咬頭にかけての歯冠遠心部分を含む破片と、頬側面溝周囲の一部を含む破片が確認できた。計測値を得ることはできない。

非計測的形質に関しては 6 th cusp[5] が認められ、発達度はSemiである。

**d No 4**

下顎左側第二乳臼歯である。近心頬側咬頭の近心半および近心辺縁隆線から近心面にかけての一部と、遠心舌側咬頭の咬頭頂を欠いているが、他は遺存している。

近遠心径は11.07mm、頬舌径は9.02mmである。

繩文人と弥生人の歯の大きさを比較したとき、下顎第二乳臼歯の近遠心径は繩文人の方が大きく、頬舌径は弥生人の方が大きいとされる[6]。この歯は、近遠心径は繩文人の平均値よりも0.2σ大きい一方で、頬舌径は弥生人の平均値よりも1.0σ小さい。

Protostyloid[3] は認められない。Deflecting wrinkle[7] が認められる。6 th cuspの発達度はSemi、7 th cusp[3] の発達度はgrade 1である。

**e 歯に関する共通所見**

どの歯も歯冠は完成しているが咬耗は全く認められず、いずれも2～3歳前後の幼児のものと推測される。

左右の上顎第二乳臼歯であるNo.1とNo.2は、遠心舌側咬頭の形態の対称的な類似性等から、同一個体のものである可能性が高い。いっぽう、左右の下顎第二乳臼歯であるNo.3とNo.4は、遠心咬頭付近の形態に類似する点も認められるものの若干の形態差があり、肉眼的観察からは同一個体であるとは断定できない。

また、仮にNo.1とNo.2、No.3とNo.4がそれぞれ同一個体のものであったとしても、No.1～4がすべて同一個体に属するかどうかは不明である。

なお、すべての歯について、性別は不明である。

## 2) 骨 片

骨片は、最大でも2cm大で、軽微に彎曲した、厚さ1.5～2.7mm程度の小破片が多数である。確認できる縫合部

は全く癒合が観察できない。これらの形態学的特徴からみて、いっしょに出土した3歳前後の幼児の歯と同年齢程度のヒトの頭蓋骨片と思われる。

## 第2節 ま と め

1996年山王西遺跡発掘調査において、弥生時代前期後葉に属する土器中から発見された人骨および人歯の破片を肉眼的に観察した結果、次の結論を得た。

1. 最低でも4本の乳歯歯冠が含まれることが確認された。復元できた歯では重複するものはないが、これらが同一個体に属するかどうかは不明である。
2. 1本の歯について計測値が得られ、報告がなされている数値と比較すると、どちらかといえば縄文人の値に近い数値を示した。
3. 頭蓋の一部と思われる扁平な骨片が確認された。推定年齢は歯とはほぼ同程度の3歳程度であるが、歯と同一個体に属するかどうかは不明である。

## 参考文献

- [1] 百々幸雄 (1983) 塩釜市浦戸寒風沢鳥籠の浜出土の一人骨 —— 故松本彦七郎博士発掘資料 —— . 人類学雑誌 91 : 481-487.
- [2] 加藤稔、石田肇 (1991) 山形県日向I洞窟出土の弥生時代女性頭蓋について. 人類学雑誌 99 : 149-154.
- [3] Hanihara, K. (1961) Criteria for classification of crown characters of the human deciduous dentition. J. Anthropol. Nippon 69 : 27-45.
- [4] 墓原和郎 (1956) 日本人及び日米混血兒乳歯の研究 N. 上顎乳臼歯について. 人類学雑誌 65 : 67-87.
- [5] Suzuki, M., Sakai, T. (1973) Occlusal surface pattern of the lower molars and the second deciduous molar among the living Polynesians. Am. J. Phys. Anthropol. 39 : 305-316.
- [6] Matsumura, H. (1991) Deciduous tooth size in the prehistoric Jomon and Yayoi peoples of Japan. Bull. Natn. Sci. Mus. Ser. D : 21-29.
- [7] Hanihara, K., Kuwashima, T., Sakao, N. (1964) The deflecting wrinkle on the lower molars in recent man. J. Anthropol. Nippon 72 : 1-8.

## Summary

Human Teeth and Bones from the Sanno-gakoi site, Miyagi Prefecture in 1996

SUZUKI Toshihiko (1) and NARA Takashi (2)

Fragments of human tooth crown and bone were found in Yayoi pottery at the Sanno-gakoi site, Miyagi Prefecture in 1996. Of these tooth crown fragments, four were identified to be different deciduous teeth (left and right upper second, and left and right lower second molars), and estimated to be those of two or three years old. The fragments of bone were considered a part of the cranium and almost the same age as the teeth. However, it has not been confirmed whether these teeth and bones belong to the same individual.

(1) Department of Oral Anatomy I, School of Dentistry, Tohoku University

(2) Department of Anatomy I, School of Medicine, Tohoku University

付表1 商于周造跡出土玉器觀察表(1)

### Attribute list of pottery the Sanno-gakoi site (1)

付表 1 山手遺跡出土土器觀察表 (2)  
Attribute list of pottery the Sanno-gakoi site (2)

付表1 山下岡遺跡出土土器観察表(3)  
Attribute list of pottery the Sanno-gakoi site (3)

付表1 山王岡遺跡出土土器統計表(4)  
Attribute list of pottery the Sanno-gakoi site (4)

付表1 山干廻遺跡出土土器觀察表(5)  
Attribute list of pottery the Sanno-gakoi site (5)

凡例：1. 「時期」の「久」は奈良時代を、「晚」は飛鳥時代後期を示す。  
2. 「主要文種の算出」の「久」は本堂堂の室持量の公分と被出しを示す。

付表2 山工围遗址出土玉器观察表

Attribute list of Haji ware from the Sanno-gakoi site									
器物名	直寸	横寸	深寸	型式	基種	西洋調査の参考	測量値(単記)	備考	国別(%)
288 E.	238	138	100	直筒	深鉢	所蔵: 工業省、経済企画省、文部省、農林省、小字(内)、中央	—	—	0.5% 0.0

付表3 山国遺跡出土石器調査表

Attribute list of stone implement from the Sanno-gakoi site

No.	器種	出土場所	種類	部位	石	材	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	測定	記載	写真No.	
1 石斧	K-AR-A61	ピット		刃上	Jal	29.0	12.0	4.65	0.76			7.1	245	
2 石斧	K-AR-A61	ピット		刃上	Jal	24.0	10.5	4.3	0.67			7.1	246	
3 石斧	K-AR-A61	ピット		刃上	Jal	26.0	8.65	4.3	0.74			7.3	247	
4 石斧	K-AR-A61	ピット		刃上	Jal	22.0	9.7	4.55	0.61	破壊		7.4	249	
5 石斧	K-AR-V56-37			刃上	Jal	26.1	11.05	4.25	0.86	破壊		7.5	251	
6 石斧	M	第6号竪穴住居跡	腹土1	刃上	Sg	41.8	18.25	5.0	2.82	破壊		7.6	242	
7 石斧	E	第6号竪穴住居跡	腹土1	刃上	Jal	30.05	8.25	3.45	0.43	破壊		7.7	247	
8 石斧	M	第6号竪穴住居跡	腹土1	刃上	Jal	30.1	11.8	7.14	1.96	破壊		7.8	248	
9 石斧	E	第6号竪穴住居跡	腹土1	刃上	Sg	26.15	11.25	6.1	1.22	破壊		7.9	249	
10 石斧	K-AR-A561-62	第7号竪穴住居跡	刃上1	刃上	Sg	27.7	10.7	4.65	1.22	破壊		7.10	245	
11 石斧	K-AR-A561-62	第7号竪穴住居跡	刃上1	刃上	Sg	29.0	10.6	4.65	0.99	成形		7.11	242	
12 石斧	K-AT61	ピット		刃上	Jal	21.7	11.95	3.8	0.91	破壊		7.12	247	
13 石斧	K-AR-61	ピット		刃上	Jal	18.4	13.05	4.2	0.87	破壊		7.13	2410	
14 石斧	K-AT61	ピット		刃上	Jal	17.85	11.5	4.9	0.74	破壊		7.14	2311	
15 石斧	K-AR-609	ピット		刃上	Sg-Tu	23.45	10.75	4.95	0.97	破壊		7.15	2420	
16 石斧	I	土		刃上	Jal	30.2	11.7	7.13	1.4	破壊		7.16	2426	
17 石斧	K-AR-A561-62	第7号竪穴住居跡	刃上2	刃上	Jal	18.05	10.75	5.65	0.85	成形		7.17	2425	
18 石斧	K-AR-A561-62	第7号竪穴住居跡	刃上2	刃上	Sg	22.05	11.55	4.65	0.87	成形・付属物有		7.18	2422	
19 石斧	K-AR-V56			刃上	Sg	20.0	10.9	4.89	0.99	成形・付属物有		7.19	2422	
20 石斧	K-AR-61	ピット		刃上	Jal	20.65	12.8	6.9	1.47	成形・付属物有		7.20	2430	
21 石斧	F	第3号竪穴住居跡	刃上1	刃上	Jal	22.7	11.45	4.25	0.83			7.21	2413	
22 石斧	I-BD48-49			刃上	Jal	22.55	11.1	5.45	1.02			7.22	2416	
23 石斧	I	第7号竪穴住居跡	刃上1	刃上	Jal	17.4	9.1	3.6	0.47	成形		7.23	2413	
24 石斧	M	第7号竪穴住居跡	刃上1	刃上	Jal	30.3	12.5	11.2	1.73			7.24	2444	
25 石斧	N	ピット342		刃上	Jal	26.85	9.5	5.75	1.35	破壊		7.25	2430	
26 石斧	N	ピット342		刃上	Jal	27.25	11.4	7.2	1.51	破壊		7.27	2421	
27 石斧	K-AR-V54	ピット307		刃上	Jal	30.08	14.7	5.9	1.11	破壊		7.28	2426	
28 石斧	E	ピット307		刃上	Jal	18.05	9.2	3.6	0.37			7.29	2412	
29 石斧	I	土		刃上	Jal	12.55	9.15	11.5	0.31			7.30	2411	
30 石斧	K-AR-A561-62	第7号竪穴住居跡	刃上2	刃上	Jal	17.25	10.35	6.1	0.44			7.31	2414	
31 石斧	K	ピット		刃上	Sg	17.75	13.65	5.3	0.87			7.32	2421	
32 石斧	M	第6号竪穴住居跡	刃上1	刃上	Jal	25.5	12.0	4.2	1.06			7.33	2434	
33 石斧	K-AR-V56	ピット		刃上	Sg	38.95	12.0	4.5	0.82			7.34	2435	
34 石斧	K-AR-V56	ピット		刃上	Sg	38.95	12.0	4.5	0.82			7.35	2421	
35 石斧	I	ピット		刃上	Sg	35.4	12.0	5.75	0.91	破壊		7.36	2428	
36 石斧	K-AR-V56	ピット		刃上	Sg	35.4	12.0	5.75	0.91	破壊		7.37	2445	
37 石斧	K-AR-V56	ピット		刃上	Sg	35.4	12.0	5.75	0.91	破壊		7.38	2441	
38 石斧	K-AR-A561-62	第7号竪穴住居跡	刃上2	刃上	Sg	36.2	12.5	9.8	4.66	破壊		7.39	2440	
39 石斧	E	ピット		刃上1	Jal	25.6	22.4	9.0	3.31	破壊		7.40	2437	
40 石斧	I	第7号竪穴住居跡	刃上2	刃上	Jal	34.05	23.2	10.85	7.36	破壊		7.41	2439	
41 石斧	K-AR-A561-62	第7号竪穴住居跡	刃上2	刃上	Jal	32.85	29.4	10.65	7.40	破壊		7.42	2438	
42 不規形石斧	M	第6号竪穴住居跡	刃上1	刃上	Jal	33.85	29.4	10.65	7.40	破壊		7.43	2422	
43 不規形石斧	K	ピット		刃上	Jal	33.25	29.6	2.55	2.15			7.44	2422	
44 黑石刀	N	長角形		刃上	Jal	19.45	14.34	3.65	3.65			7.45	2444	
45 ハイブリッド	N	ピット		刃上	Jal	6	14.05	10.0	5.45	4.94			7.46	2444
46 内側形石鋸	I-C断面・刃上	ピット		刃上	Jal	6.0	14.05	10.0	5.45	4.94		7.47	2444	
47 内側形石鋸	I-C断面・刃上	ピット		刃上	Jal	6.0	14.05	10.0	5.45	4.94		7.48	2444	
48 内側形石鋸	K-AR-A561-62	第7号竪穴住居跡	刃上2	刃上	Jal	7.68	7.3	27.65	254.13			7.49	256	
49 内側形石鋸	K-AR-A561-62	第7号竪穴住居跡	刃上2	刃上	Jal	6.16	6.95	20.2	13.50			7.50	263	
50 内側形石鋸	K-AR-A561-62	第7号竪穴住居跡	刃上2	刃上	Jal	6.08	6.95	24.8	13.16			7.51	263	
51 石斧	K-AU7			刃上	Sg	7.2	8.50	4.0	4.04			7.52	2447	
52 石斧	K	第7号竪穴住居跡	刃上1	刃上	Sg	6.0	11.05	4.0	5.05	4.94		7.53	2447	
53 渡辺化石鋸	I	ピット		刃上	Jal	107.3	37.95	1.55	138.63	破壊		7.53	2511	
54 貝形石鋸	K	ピット274		刃上	Jal	40.1	27.6	26.7	18.48	破壊		7.54	258	
55 鋸形石鋸	E	第2号竪穴住居跡	刃上1	刃上	Tu-Su	75.95	41.5	26.4	123.02	破壊		7.56	2549	
56 鋸形石鋸	E	第2号竪穴住居跡	刃上1	刃上	Tu-Su	69.45	32.0	33.7	255.14	破壊		7.57	2541	
57 渡辺化石鋸	K-AT50-AV57	ピット		刃上	Tu	43.55	32.75	26.6	55.96	破壊		7.58	2547	
58 石斧	K	第7号竪穴住居跡	刃上2	刃上	Tu-Su	145.4	95.1	30.4	462.4	破壊		7.59	2517	
59 陶器	E	ピット203		刃上	Tu	102.55	104.5	30.4	574.8	破壊		7.60	2517	
60 陶器	E	ピット274		刃上	Tu	83.95	62.4	41.8	265.8	破壊		7.61	2636	
61 陶器	E	第2号竪穴住居跡	刃上1	刃上	Tu	84.5	62.4	41.5	247.1	破壊		7.62	2611	
62 陶器	N	ピット		刃上	Tu	116.3	83.9	41.5	511.5	破壊		7.63	2677	
63 陶器	E	第2号竪穴住居跡	刃上1	刃上	Tu	90.55	77.85	41.6	484.9	破壊		7.64	2613	
64 陶器	E	ピット300		刃上1	Tu	74.15	66.85	37.1	222.94	破壊		7.65	2619	
65 陶器	I	第7号竪穴住居跡	刃上1	刃上	Tu	160.3	150.2	36.25	97.96			7.66	271	
66 陶器	M	第6号竪穴住居跡	刃上1	刃上	Tu	89.5	77.8	50.1	503.7			7.67	2447	
67 陶器	M	第7号竪穴住居跡	刃上1	刃上	Tu	95.95	78.2	62.25	546.1			7.68	2447	
68 陶器	E	第2号竪穴住居跡	刃上1	刃上	Tu	97.45	66.75	23.5	205.8			7.69	2612	
69 陶器	E	第2号竪穴住居跡	刃上1	刃上	Tu	98.4	75.5	41.6	388.7	破壊		7.70	2615	
70 陶器	K-AR-V56	ピット		刃上	Tu	121.2	94.5	62.95	1060.6			7.71	272	
71 陶器	K-AR-A561-62	第7号竪穴住居跡	刃上2	刃上	Tu	134.5	106.95	47.6	930.7	破壊		7.72	272	
72 陶器	M	第2号竪穴住居跡	刃上1	刃上	Tu	126.3	114.95	35.0	708.2	破壊		7.73	273	
73 陶器	E	第2号竪穴住居跡	刃上1	刃上	Tu	210.0	132.0	47.80	1792.0			7.74	2618	
74 陶器	K-AR-A561-62	第7号竪穴住居跡	刃上2	刃上	Tu	130.7	95.25	71.3	1881.1	破壊		7.74	268	
75 陶器	E	ピット		刃上	Tu	118.05	96.00	58.5	827.0			7.75	268	
76 陶器	E	ピット		刃上	Tu	130.85	92.5	42.5	99.7			7.76	268	
77 陶器	E	ピット217		刃上	Tu	92.75	52.75	56.98	569.8			7.77	2615	
78 陶器	K-AR-V56	地下構築	刃上1	刃上	Tu	144.3	96.25	42.13	619.4			7.78	262	
79 陶器	E	ピット306		刃上1	Tu-Du	207.0	205.3	75.05	6210.0			7.79	271	
80 陶器	E	ピット236		刃上1	Tu	133.7	134.5	64.4	842.8	破壊		7.80	275	

石財物の略号は次の通りである

Sa: 砂岩 Sa: 石英岩 Si: 磁鐵岩 Tu: 磷灰岩 Ch: 玉器 Jal: 玄武岩 Ser: 鐵鉄錫 Ols: 黃鐵礦 Tu: 黑雲母岩 Mm: 錫石 Tu-Su: 硫酸銅鉄錫 Su-Tu: 硫酸銅錫錫 Tu-Du: 石英安山岩 Tu-Su: 磷灰岩

付表4 山王洞遺跡出土木製品観察表

Attribute list of wooden manufacture from the Sanno-gakoi site

No.	出土地点	層位	時期	種別	計面積 (cm)	重量(g)	木取り	削 磨	備考	記号No.	等級No.
1	I区試掘 トレンチ	611	晚期V～VI期	製作	長さ 幅 (幅り部) (底き部)	28.8 (482) 3.8 5.4	丸木	クスキ	1/2か残存	244	PL-28-1
2	T区試掘 トレンチ	611	晚期V～VI期	加工材	長さ 幅 厚さ	30.9 (482) 30.2 3.6	板目		未成品	242	PL-28-2

付表5 山王洞遺跡出土ニホンジカ下顎骨属性表

Attribute list of *Cervus nippon* mandible from the Sanno-gakoi site

資料No.	発掘区	層位	性別	左 手 L.R	右 手 R.L	1 1 2 2 3 3 C C P2 3 4 M1 M1 2 3	m2 m3 m4	前出文献 記述文句	備考	
3	I区試掘 トレンチ	610層	哺乳類	ニホンジカ	脛骨	L 11 2	不明	(M1 M2) 不明	1.0mm以上 破壊のため 吸収判定	
4	I区試掘 トレンチ	610a層	哺乳類	ニホンジカ	上顎骨	L 1 1		M3 M2	研削エナメル 質部	
5	I区試掘 トレンチ	610a層	哺乳類	ニホンジカ	下顎骨	L 1 1		M3 M2	内削エナメル 質部	

部位名略称：I 切歯（大文字は永久歯、小文字は乳歯） C 大臼歯（大文字は永久歯、小文字は乳歯） P 小臼歯 M 大臼歯（大文字は永久歯、小文字は乳歯）

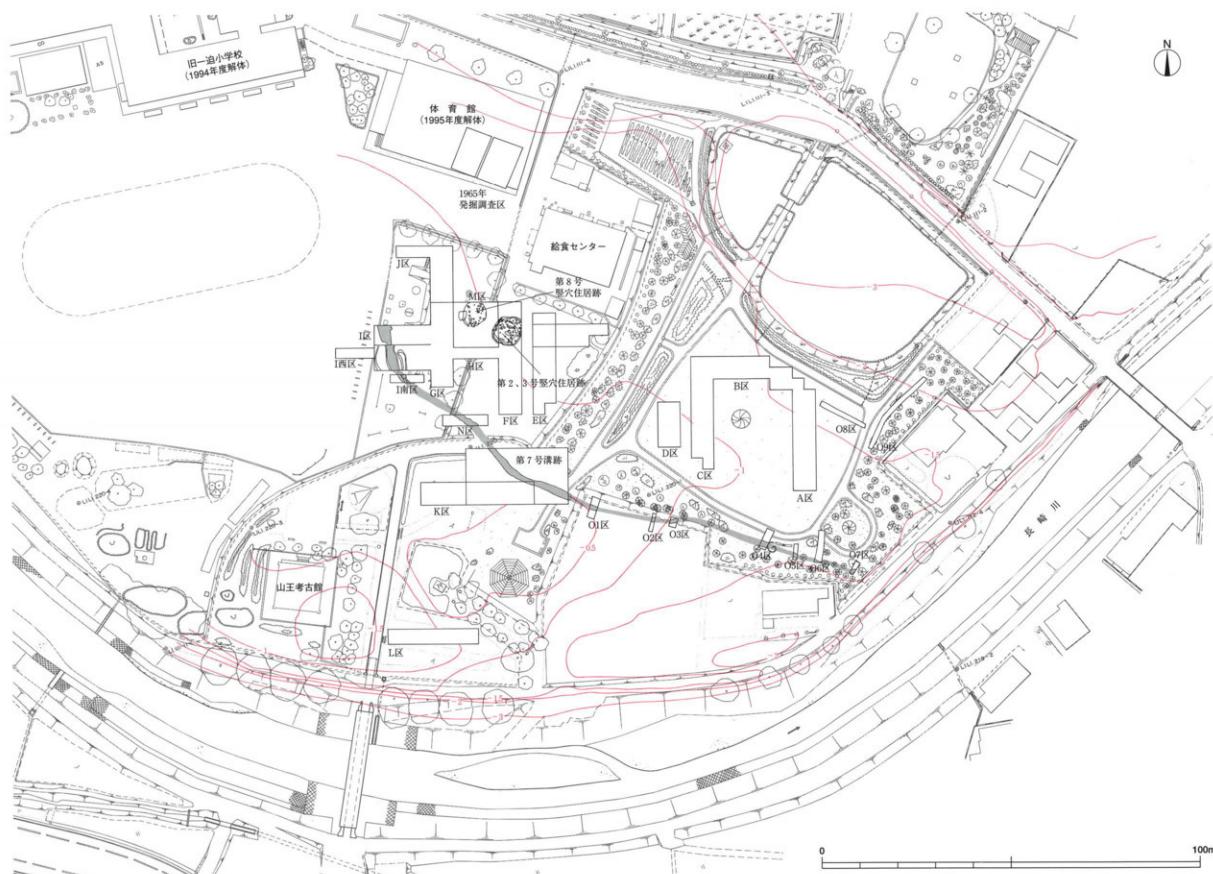
部位者属性略称：(L) 左 (R) 右 面式に ( ) がつくるもの 頭骨に伴うもの 面式に ( ) がつかないものの追加歯 × 歯が残っていないもの (a) 幼年歯 (b) エナメル質吸耗が開始 (c) 小臼歯が独立 (d) 小臼歯が連絡 (e) 全歯齶

付表6 山王洞遺跡出土動物遺存体形表

Attribute list of animal remains from the Sanno-gakoi site

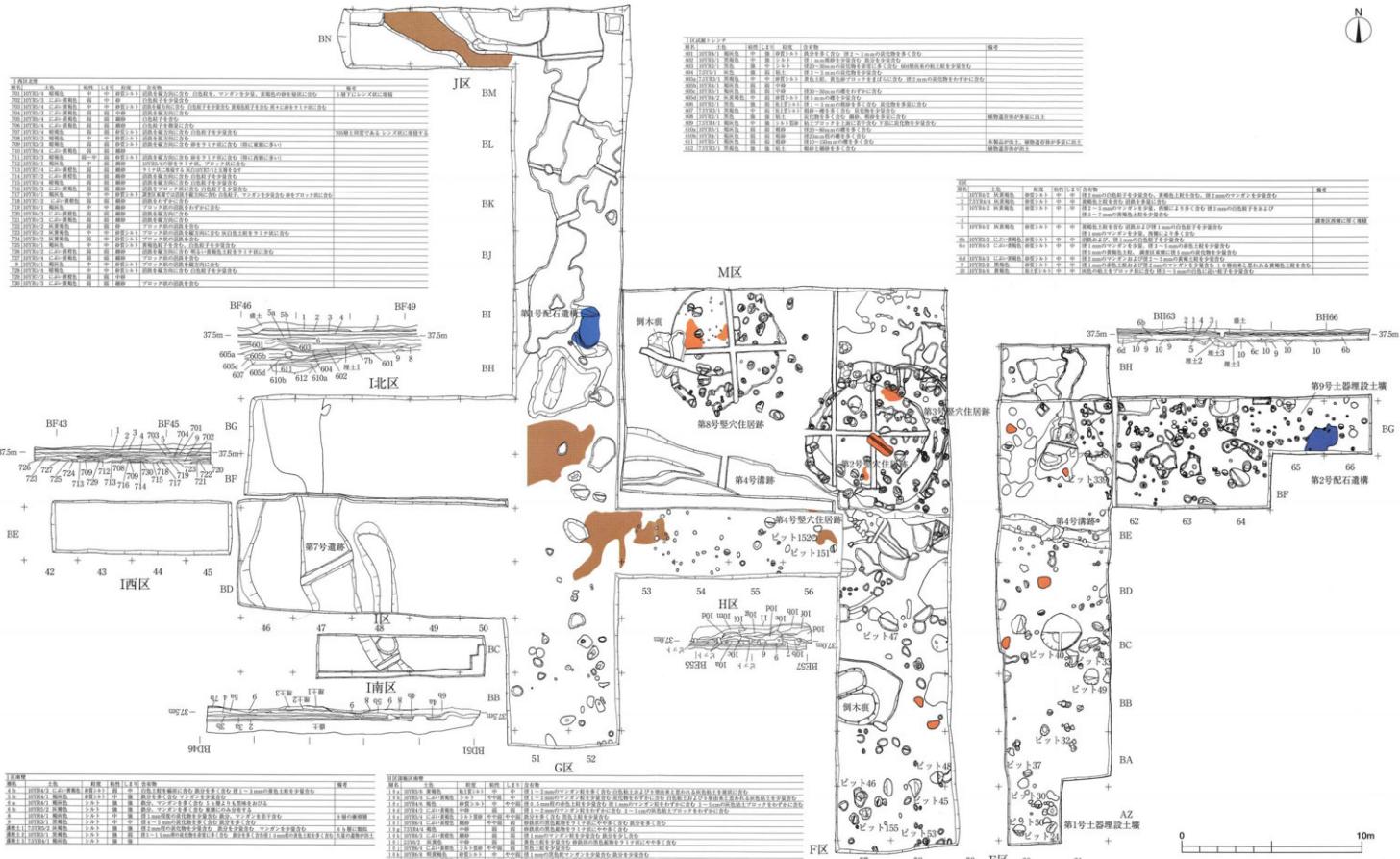
資料No.	発掘区	層位	種	部	位	L/R	部分	化骨化	加工	ビビタライ	色	溝	氣化	備考	写真箇所No.
1	T区試掘 トレンチ	610層	哺乳類	ニホンジカ	脛骨	L	骨幹部 骨端部	不明	なし	あり	淡黄		あり		PL-28-7
2	T区試掘 トレンチ	610a層	哺乳類	ニホンジカ	上顎骨	L	脣面部	不明	スパイラル 状の割れ?	あり	淡黄		あり		PL-28-6
3	T区試掘 トレンチ	610層	哺乳類	ニホンジカ	F顎骨	L	脣面部	不明	なし	あり	淡黄	なし	付表5参照		PL-28-5
4	T区試掘 トレンチ	610a層	哺乳類	ニホンジカ	F顎骨	L	脣面部 口開	破片	不明	なし	あり	変化なし	なし	付表5参照	PL-28-3
5	T区試掘 トレンチ	610a層	哺乳類	ニホンジカ	下顎骨	L	脣面部 口開	破片	不明	なし	なし	変化なし	なし	付表5参照	PL-28-4
6	T区試掘 トレンチ	610層	哺乳類	ニホンジカ	四肢骨	不明	骨幹部	不明	なし	あり	淡黄		あり		PL-28-5
7	T区試掘 トレンチ	610層	哺乳類	ニホンジカ	四肢骨	不明	骨幹部	不明	なし	あり	淡黄		あり		PL-28-12
8	T区試掘 トレンチ	610層	哺乳類	ニホンジカ	四肢骨	不明	骨幹部	不明	なし	あり	淡黄		あり		PL-28-9
9	T区試掘 トレンチ	610層	哺乳類	ニホンジカ	四肢骨	不明	骨幹部	不明	?	あり	淡黄		あり		PL-28-11
10	T区試掘 トレンチ	610層	哺乳類	ニホンジカ	四肢骨	不明	骨幹部	不明	なし	あり	淡黄		あり		PL-28-10
11	T区試掘 トレンチ	610層	哺乳類	ニホンジカ	四肢骨	不明	骨端部	不明	なし	あり	淡黄		あり		
12	1南区 第7 堆	610層	哺乳類	ニホンジカ	四肢骨	不明	骨端部	不明	なし	なし	白色	なし	なし	大顎骨頭	PL-28-8

# 図 版



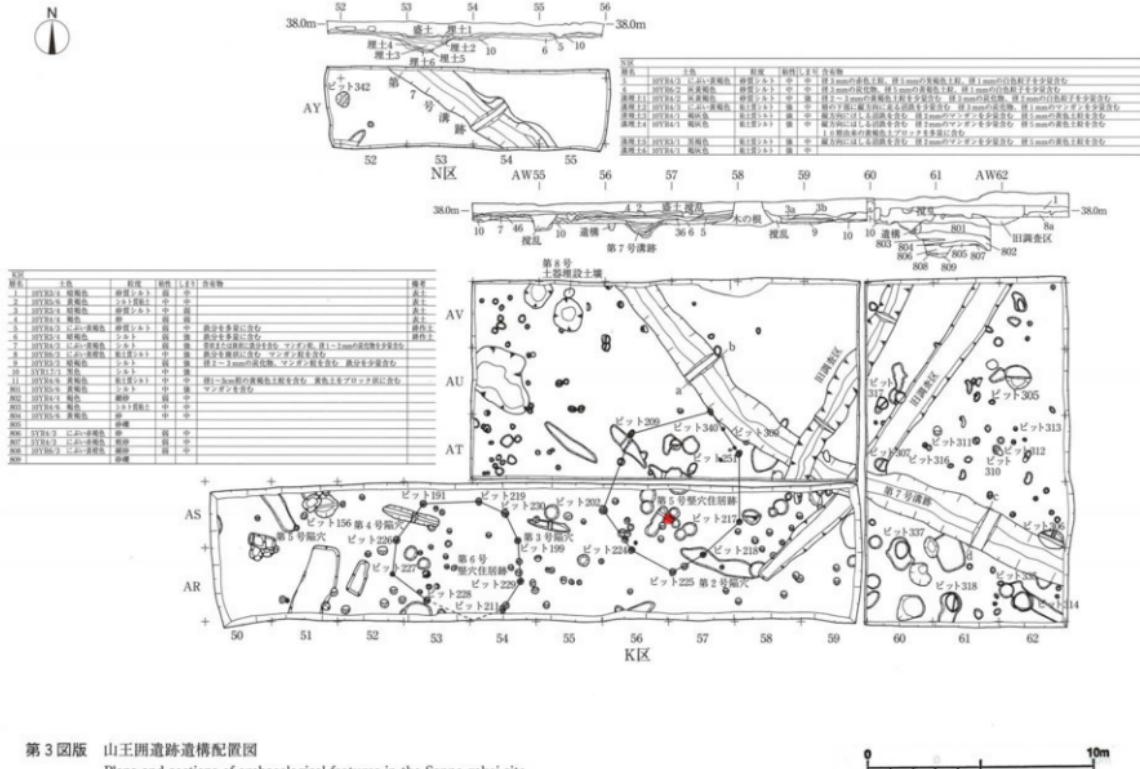
第1図版 山王廻遺跡発掘区配置図  
Excavated grid in the Sanno-gakoi site

等高線は1962年明治大学考古学研究室作成の測量図による



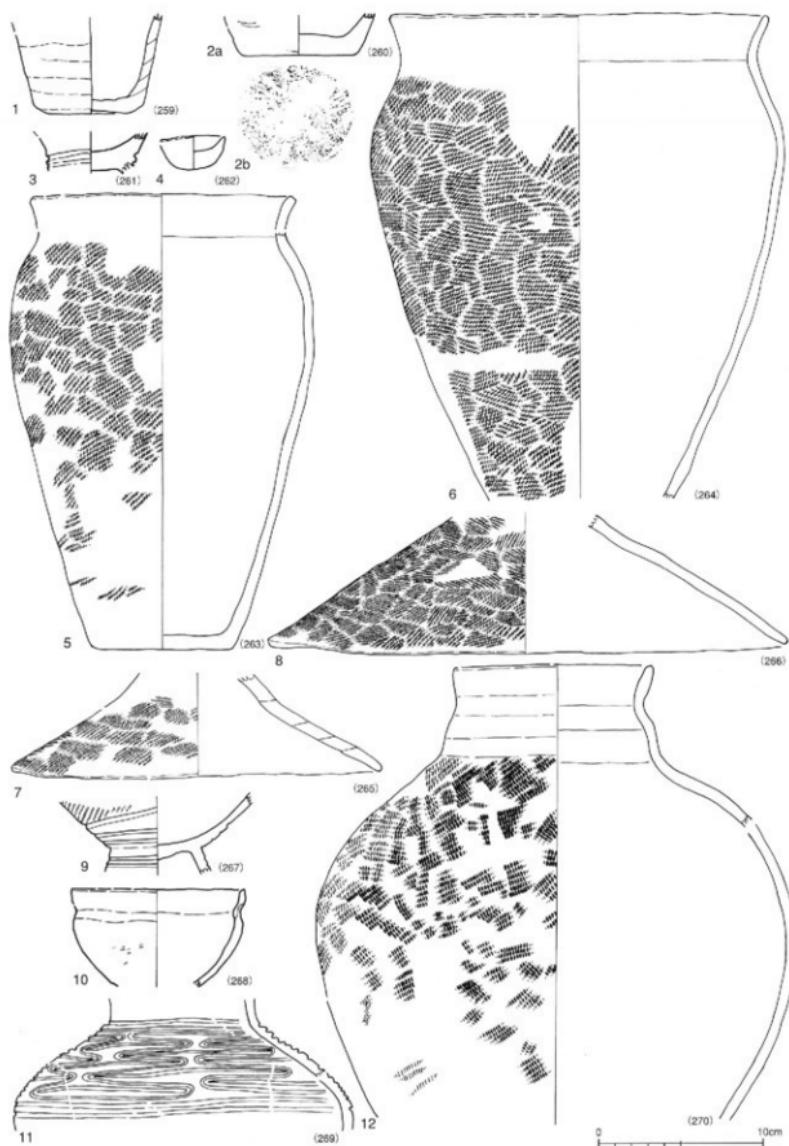
第2図版 山王園遺跡遺構配置図

## Plans and sections of archaeological features in the Sanno-gakoi site



### 第3図版 山王町遺跡遺構配置図

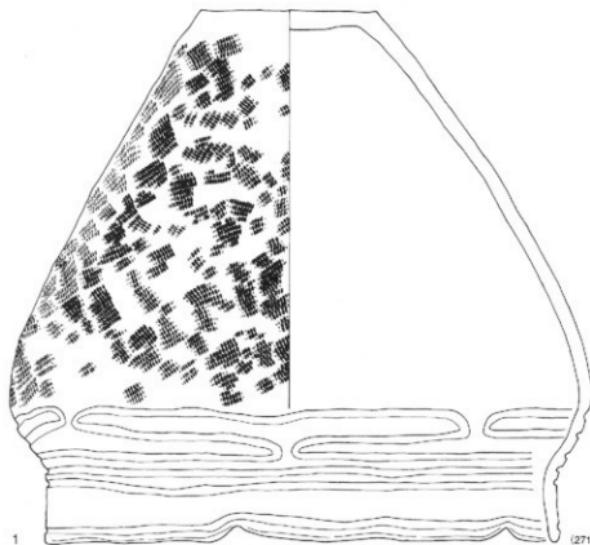
### Plans and sections of archaeological features in the Sanno-gakoi site



第4図版 山王開遺跡出土土器実測図

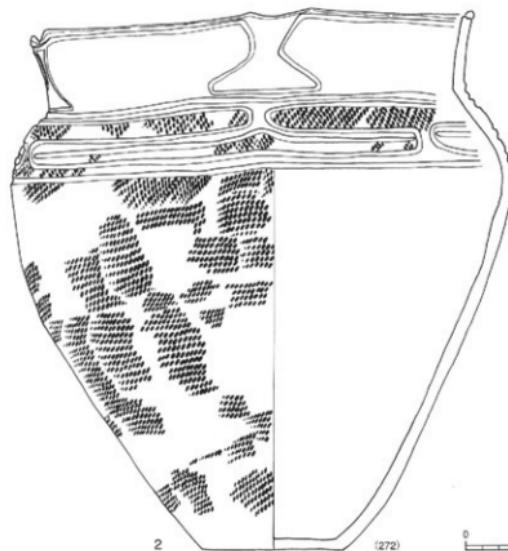
Jomon and Yayoi pottery from the Sanno-gakoi site

1～4 M区第8号堅穴住居跡  
5～9 I区第7号溝跡溝跡  
10 K区ビット309  
11 M区第6号上器組出土  
12 M区第6号上器組出土



1

(271)



2

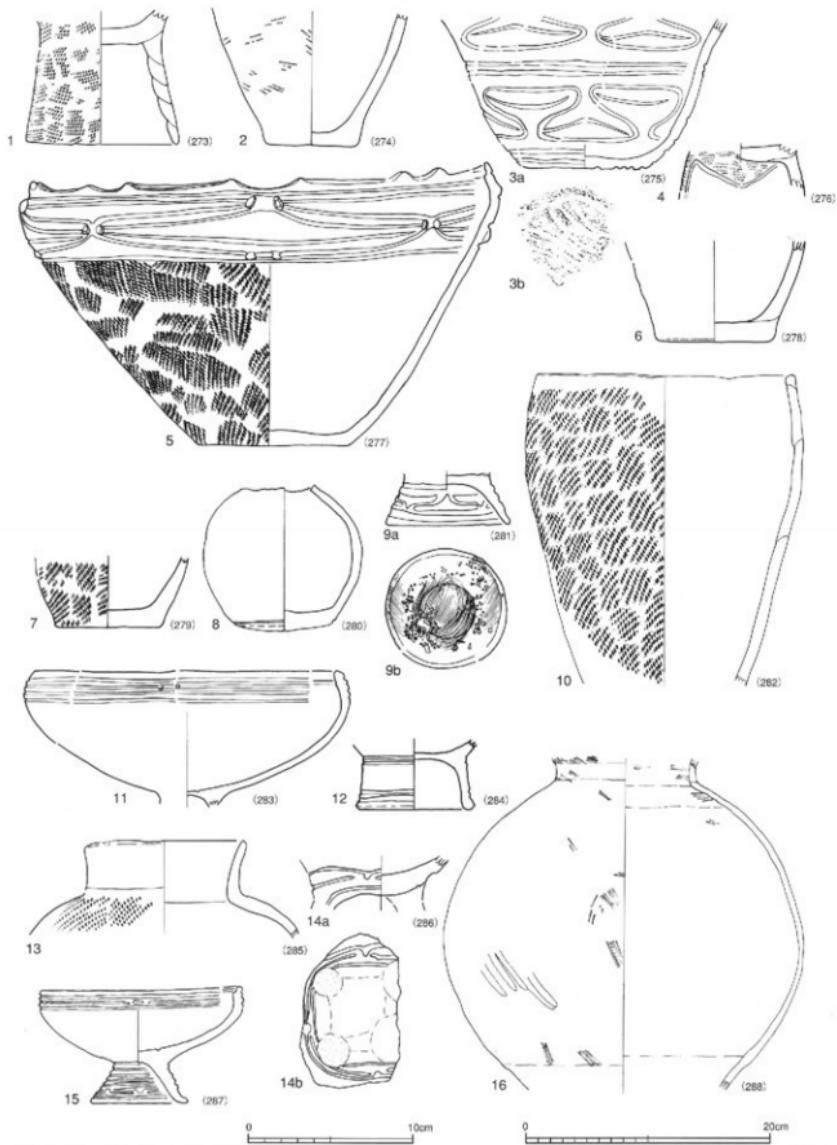
(272)

0 10cm

第5図版 山王園遺跡出土土器実測図

Yayoï pottery from the Sanno-gakoi site

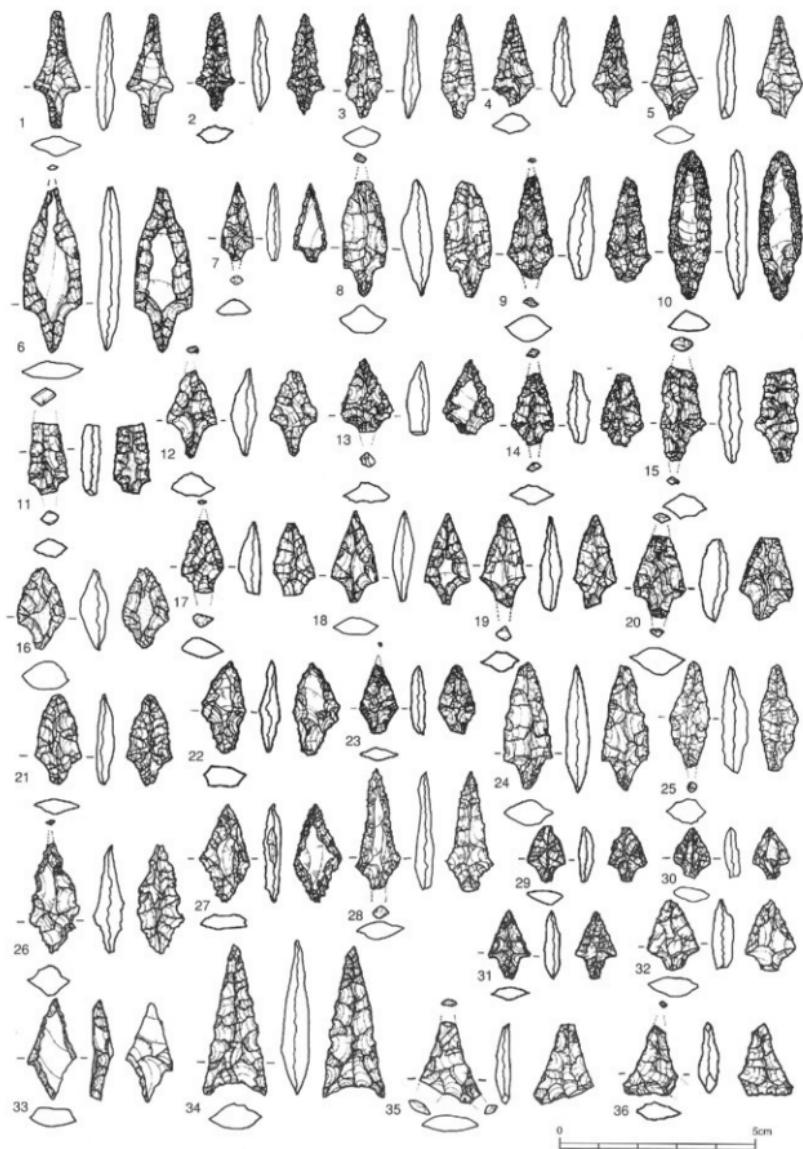
1 K区第8号土器埋設土塁 第2号土器  
2 K区第8号土器埋設土塁 第1号土器



第6図版 山王廻遺跡出土土器実測図

Jomon and Yayoi pottery and Haji Ware from the Sanno-gakoi site

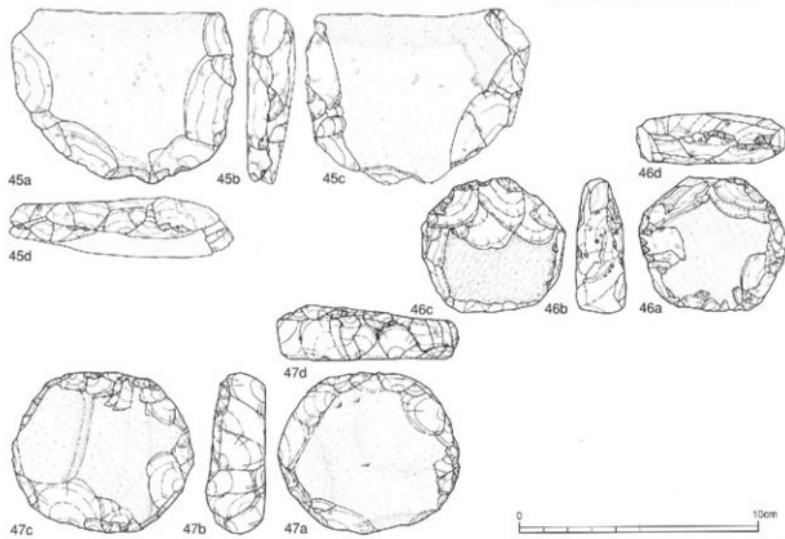
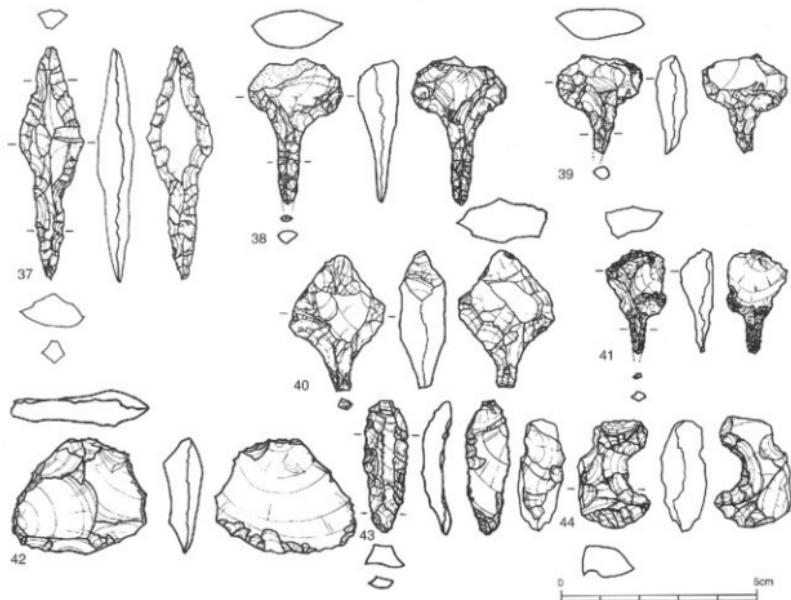
1 M区第7号土器測定土器 2 R区第5号土器測定土器 3 T区9号  
4 T区9号 5 T区試掘トレンチ 603号 6・19 605号 7 606号  
8 609号 9・14 600号 11・13 610号 15 611号



第7図版 山王團遺跡出土石器

Stone implement from the Sanno-gakoi site

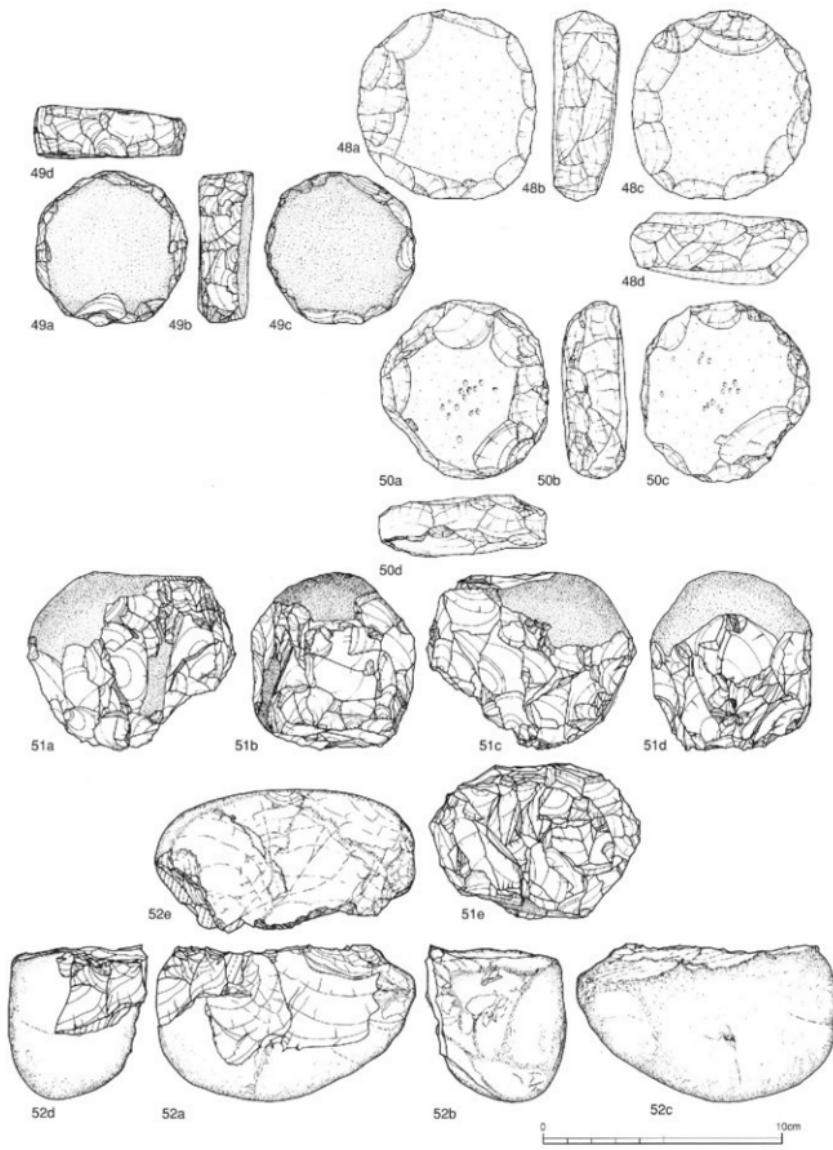
1~36 石器



第8図版 山王洞遺跡出土石器

Stone implement from the Sanno-gakoi site

37～41 石器 42・43 不定形石器 44 异形石器  
45 チョビングトゥール 46・47 円錐形石器



第9図版 山王圓遺跡出土石器

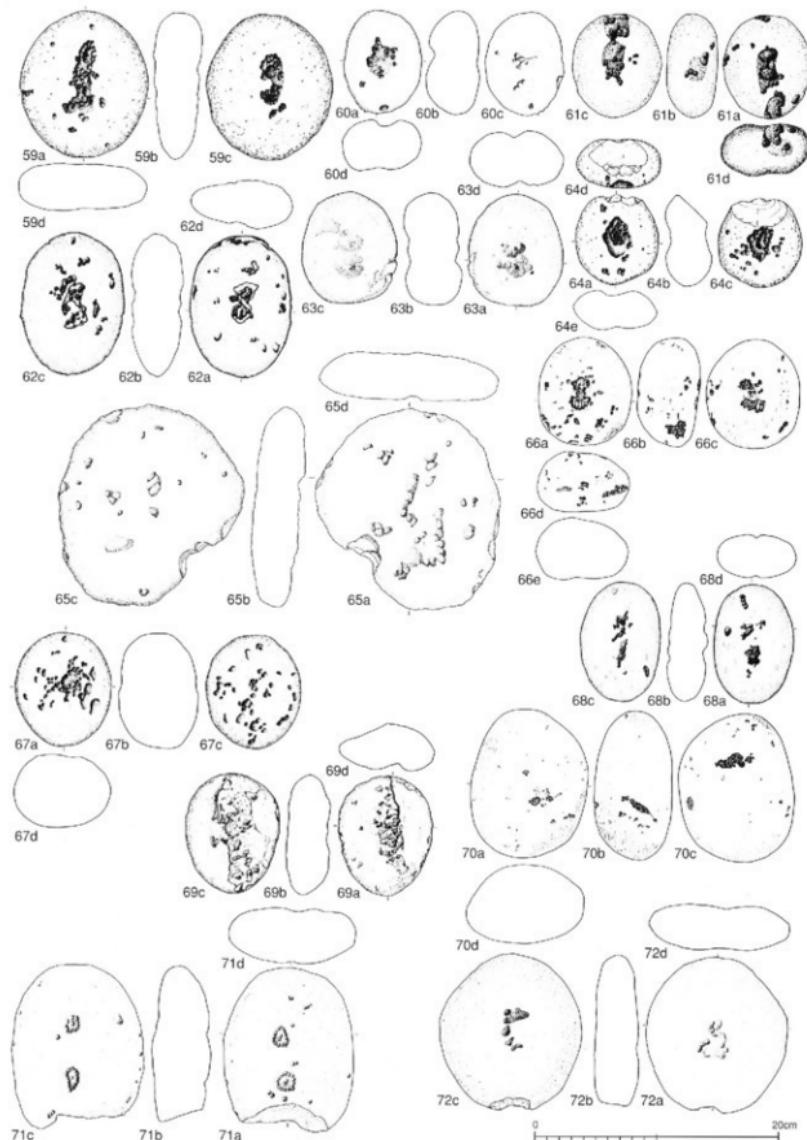
Stone implement from the Sanno-gakoi site

48~50 円錐形石器 51・52 石核



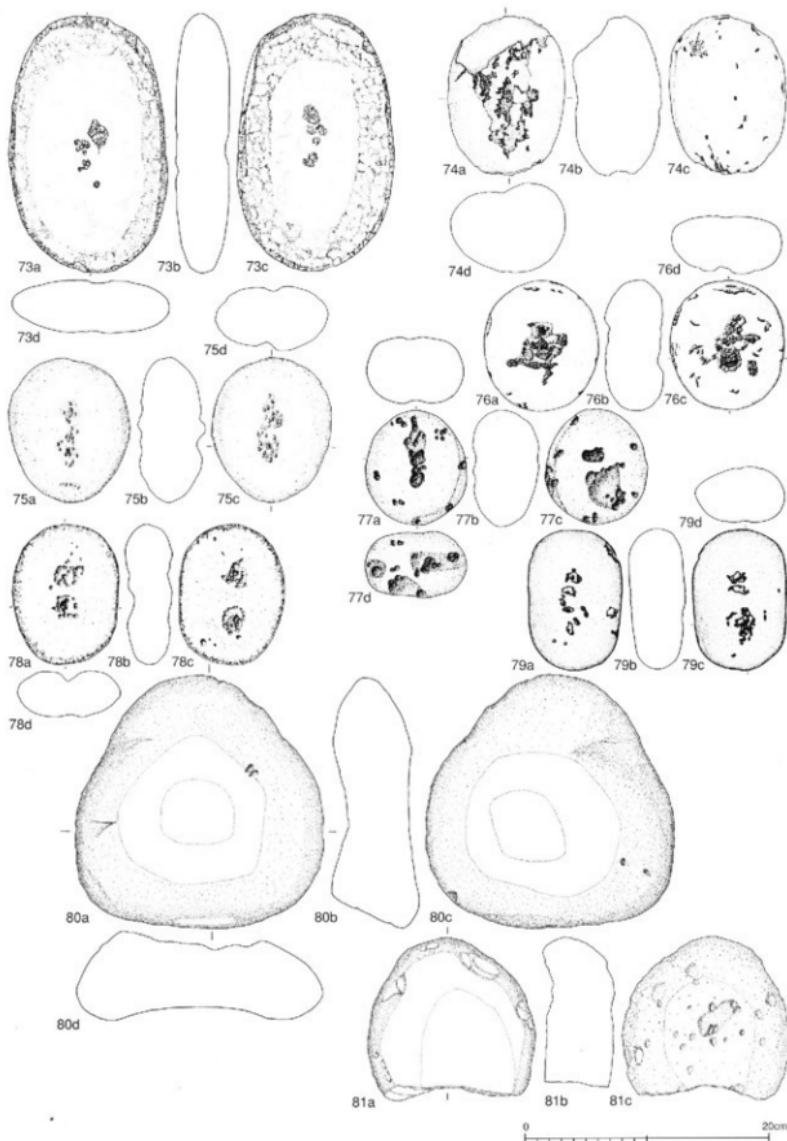
第10図版 山王園遺跡出土石器

Stone implement from the Sanno-gakoi site



第11図版 山王園遺跡出土石器  
Stone implement from the Sanno-gakoi site

59～72 円石



第12図版 山王園遺跡出土石器  
Stone implement from the Sanno-gakoi site

0 20cm

73~79 四石 80~81 石組

# 写 真 図 版



1 G、H、I、I北、I南、M区全景（南西から）



2 N区全景（東から）

P L. 1 G、H、I、I北、I南、M区全景およびN区全景  
View of excavated trench

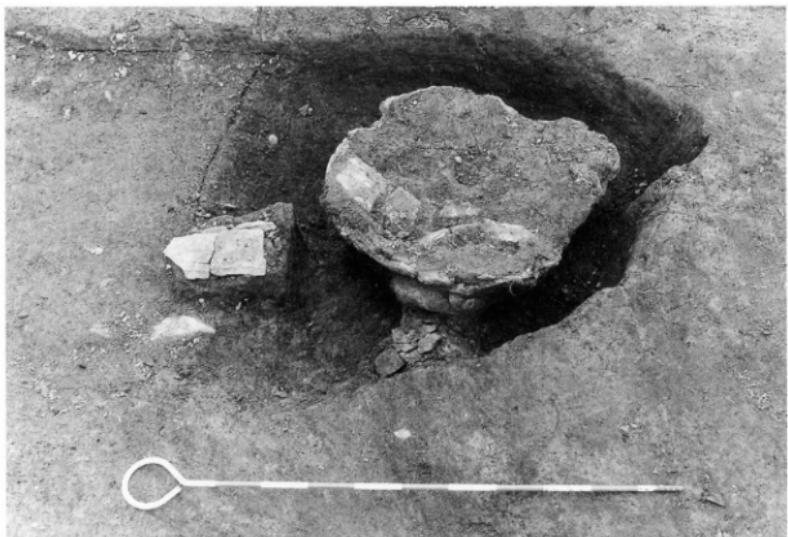


1 E区全景（西から）

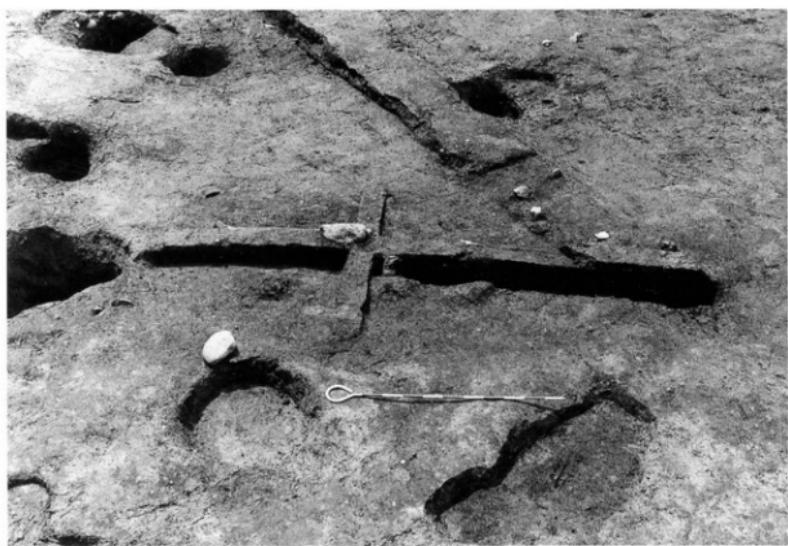


2 E区第2号配石造構（北から）

P.L. 2 E区全景および第2号配石造構  
View of excavated trench and stone arrangement 2



1 M区第6号土器埋設土壤



2 第3号竪穴住居跡

P L. 3 第6号土器埋設土壤および第3号竪穴住居跡炉跡  
Pit6 with buried pottery and fireplace in pit dwelling 3



1 K区ピット305



2 K区ピット337

P L . 4 ピット305およびピット337  
Pit305 and Pit337



P L. 5 山王關遺跡出土土器  
Yayoi pottery from the Sanno-gakoi site

1 ~ 3 I区第7号溝跡 4 K区第7号溝跡  
5 · 6 I区第7号溝跡



1

(271)



2

(272)

P L. 6 山王廻遺跡出土土器  
Yayoi pottery from the Sanno-gakoi site

1 K区第8号土器埋設土塗 第2号土器  
2 第8号土器埋設土塗 第1号土器



1

(270)



2

(273)



3

(274)



4

(261)



7a



5

(262)



6

(259)



7b

(260)

P L. 7 山王閣遺跡出土土器  
Yayoi pottery from the Sanno-gakoi site

1 M区第6号土器埋設土壙  
3 E区第9号土器埋設土壙

2 第7号土器埋設土壙  
4 ~ 7 M区第8号整穴住居跡



P L . 8 山王廻遺跡出土土器  
Jomon and Yayoi pottery from the Sanno-gakoi site

1 K区ピット340 2 I 南区包含層  
3 1区包含層 4・5 1区試掘トレンチ605層  
6 603層



1

(279)



2

(285)



3

(280)



4

(283)



5

(284)



6

(287)



7

(281)



8

(286)



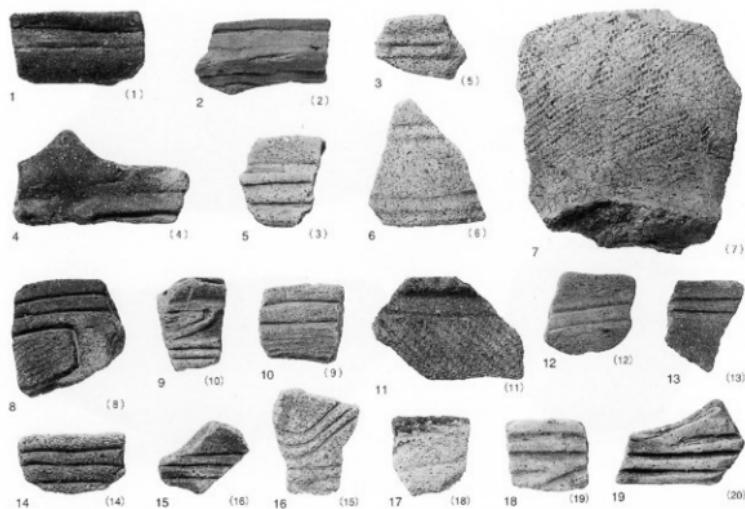
9

(288)

## P L. 9 山王岡遺跡出土土器

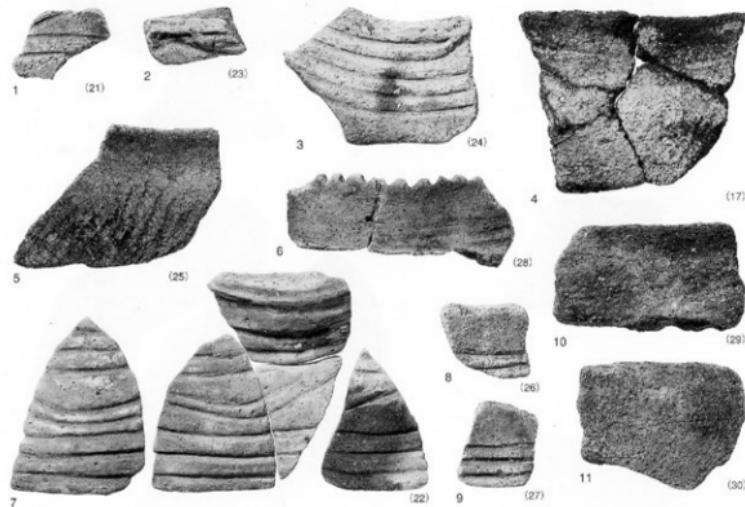
Jomon and Yayoi pottery and Haji Ware from the Sanno-gakoi site

1 I区試掘トレンチ606層 2 610層  
3 609層 4 610層 5・7・8 610a層  
6 611層 9 E区ピット338



1 F、M区出土土器

1~11 第3号墳穴住居跡 12~19 第8号墳穴住居跡

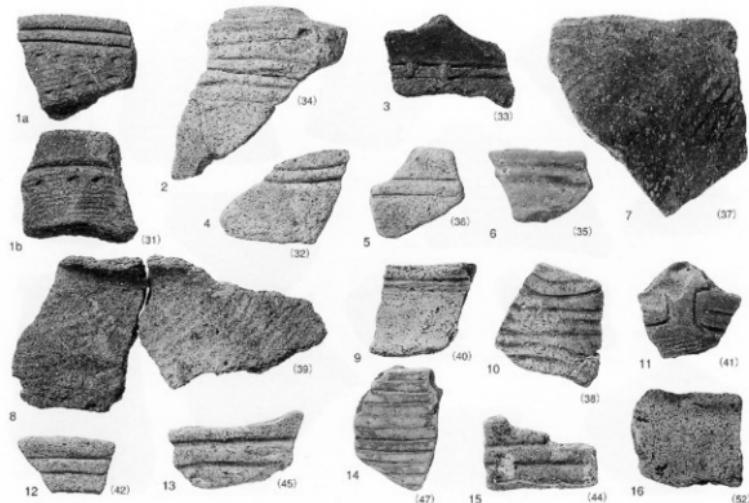


2 M区出土土器

1~11 第8号墳穴住居跡

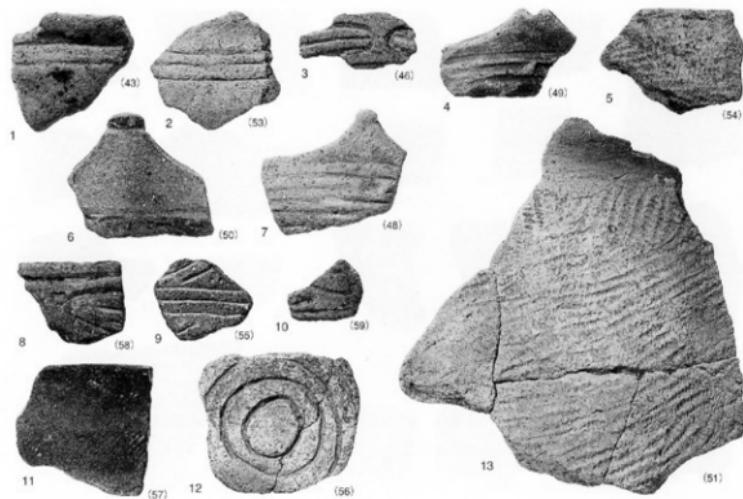
P L. 10 山王廻遺跡出土土器

Jomon and Yayoi pottery from the Sanno-gakoi site



1 M、K区出土土器

1~10 第8号壁穴住居跡 11~16 第7号溝跡

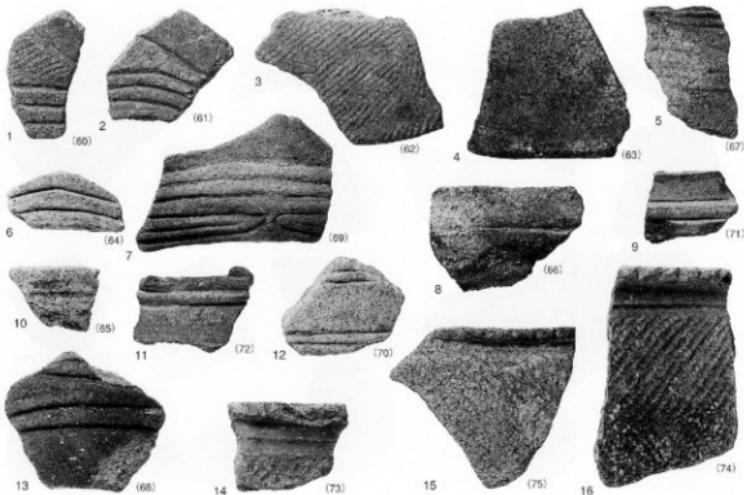


2 K区出土土器

1~13 第7号溝跡

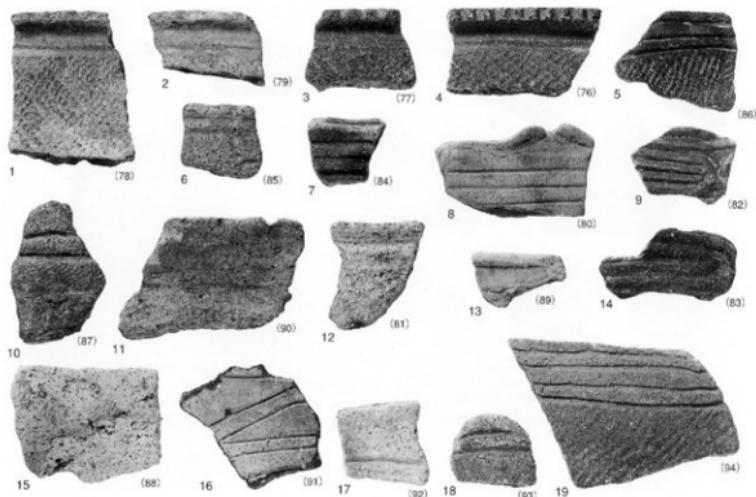
P L. 11 山王廻遺跡出土土器

Jomon and Yayoi pottery from the Sanno-gakoi site



1 K区出土土器

1~16 第7号講跡

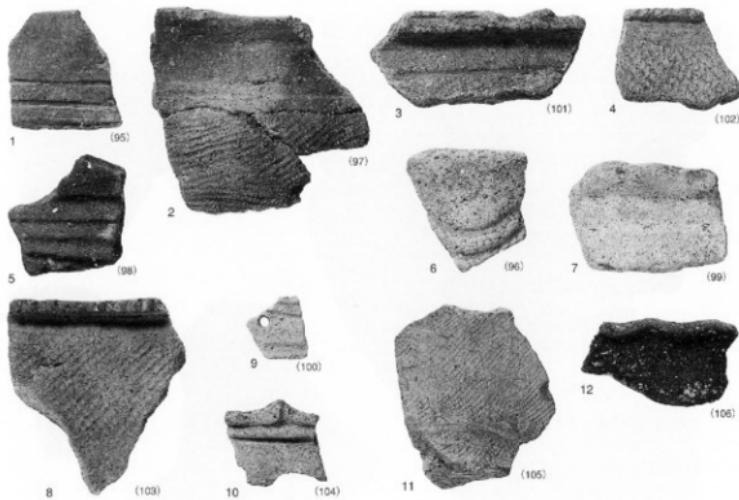


2 K区出土土器

1~19 第7号講跡

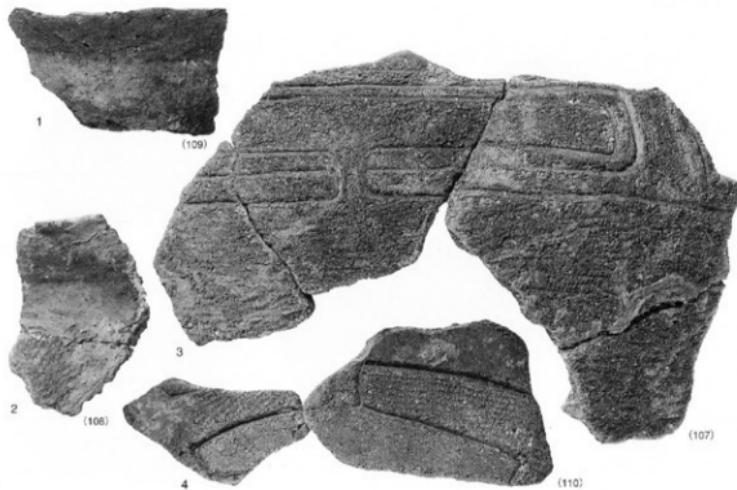
P L . 12 山王廻遺跡出土土器

Jomon and Yayoi pottery from the Sanno-gakoi site



1 K区出土土器

1 ~ 12 第7号溝跡

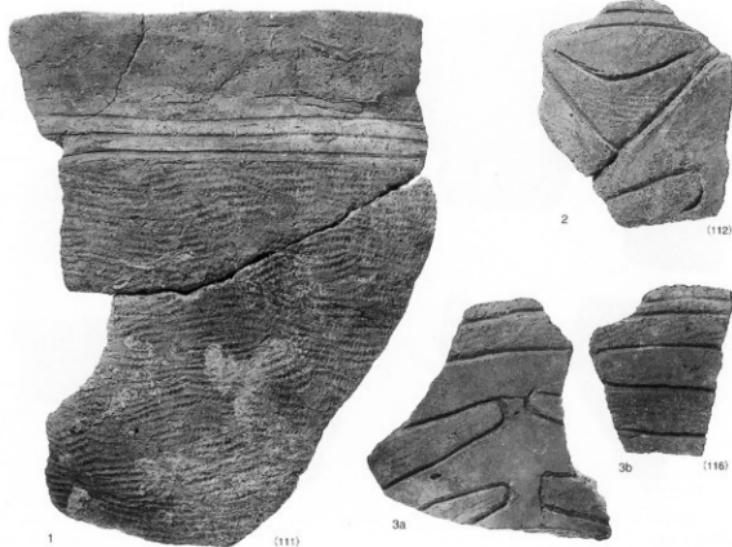


1 I区出土土器

1 ~ 4 第7号溝跡

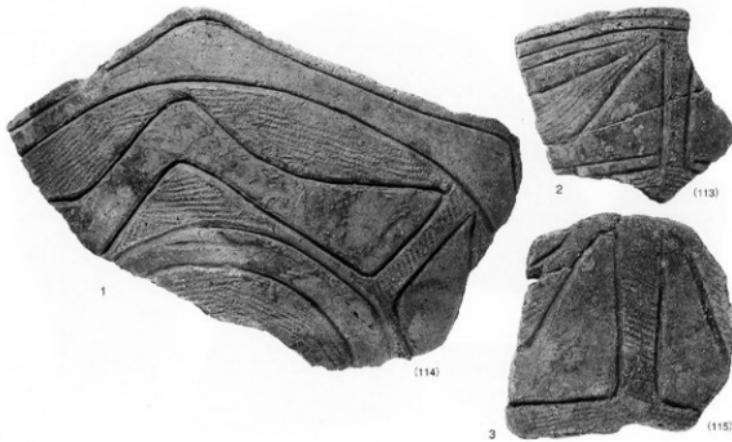
P.L. 13 山王廻遺跡出土土器

Jomon and Yayoi pottery from the Sanno-gakoi site



1 I区出土土器

1~3 第7号拂跡

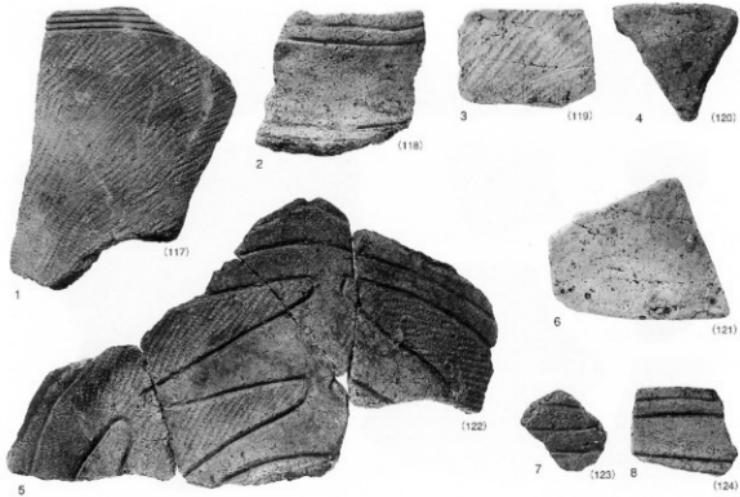


2 I区出土土器

1~3 第7号拂跡

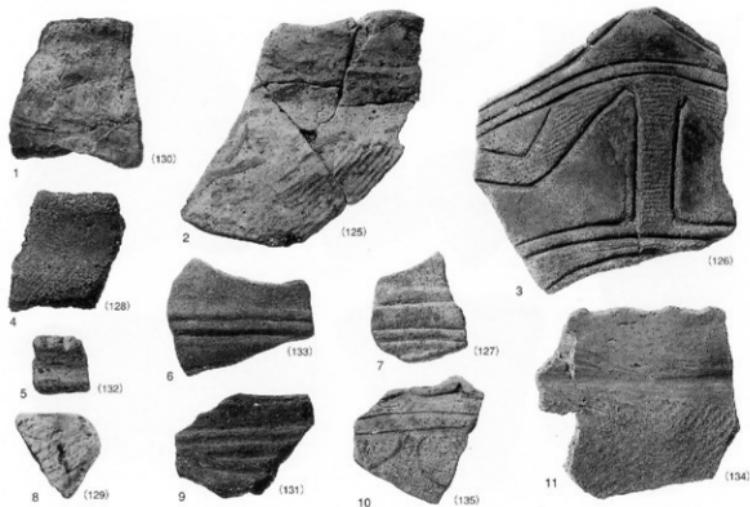
P L. 14 山王廻遺跡出土土器

Jomon and Yayoi pottery from the Sanno-gakoi site



1 I 区出土土器

1~8 第7号墓跡

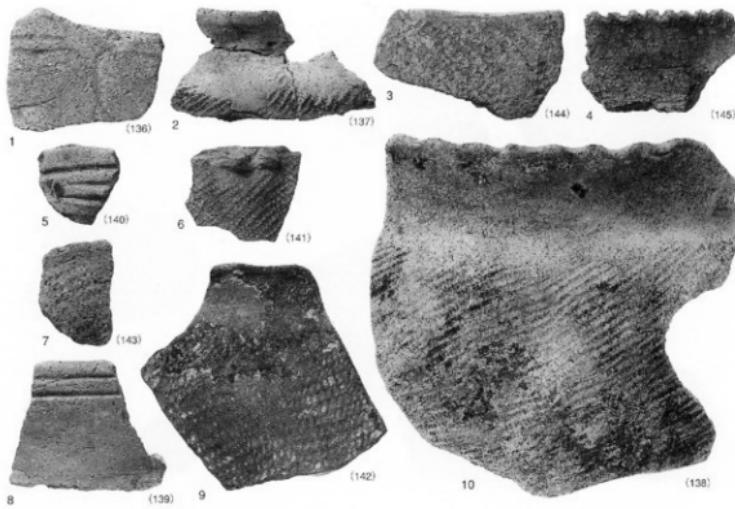


2 I、E区出土土器

1~4・7・8 第7号墓跡 6・11 ピット254  
5・9 第2号配石遺跡 10 ピット258

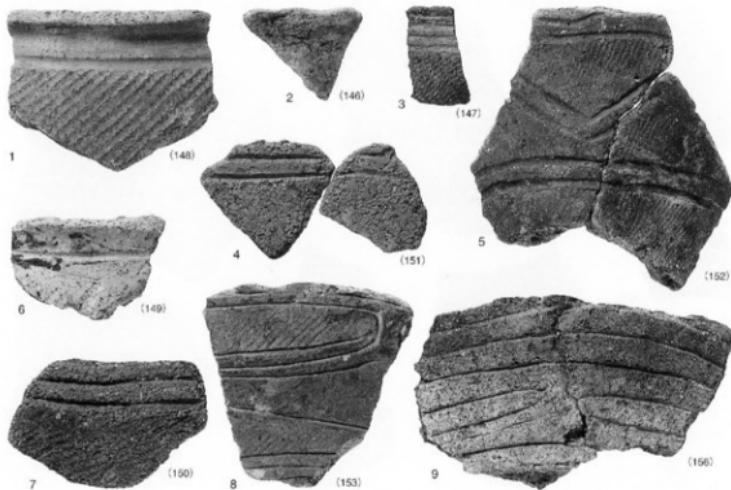
P L. 15 山王廻遺跡出土土器

Jomon and Yayoi pottery from the Sanno-gakoi site



1 E、K区出土土器

1 ピット292 2・3・5～10 ピット305 4 ピット306

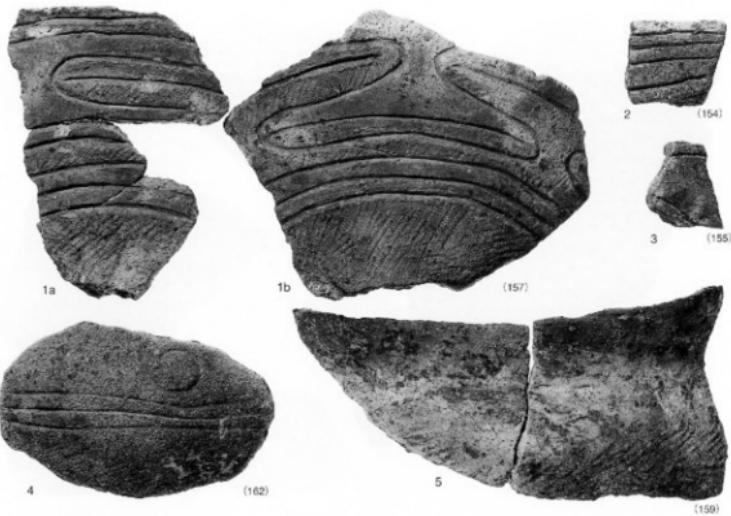


2 K、I南区出土土器

1～3 ピット306 4～9 I南区包含層

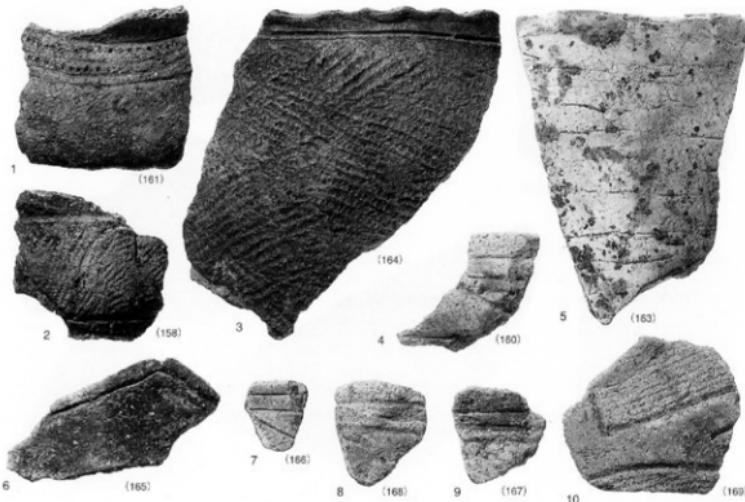
P L. 16 山王廻遺跡出土土器

Jomon and Yayoi pottery from the Sanno-gakoi site



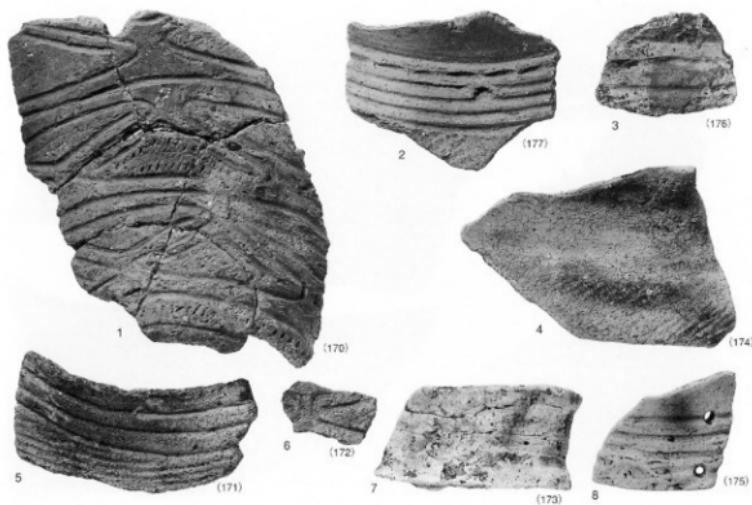
1 I 南区出土土器

1~5 I 南区包含层



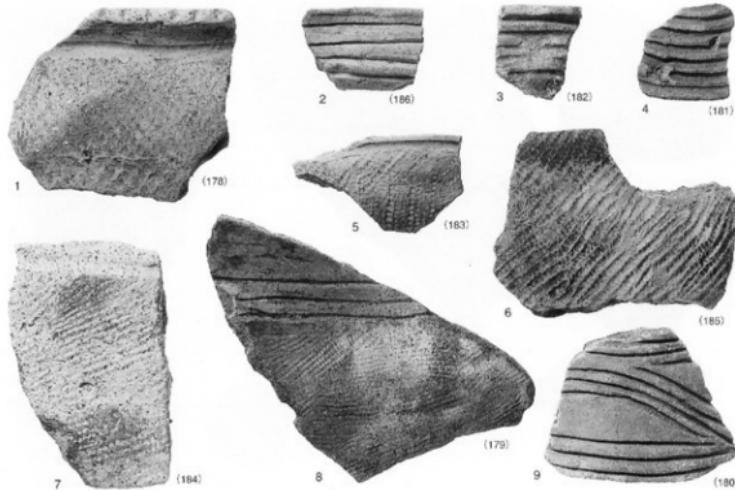
2 I 南区、I 区出土土器

1~5 I 南区包含层 6~10 I 区包含层



1 I区出土土器

1~8 I区包含層

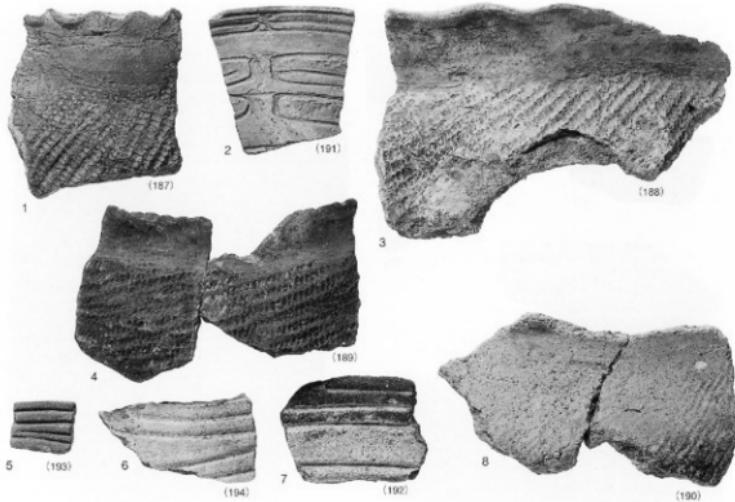


2 I区出土土器

1 I区包含層 2 I区試掘トレンチ603層  
3~7・9 602層 8 601層

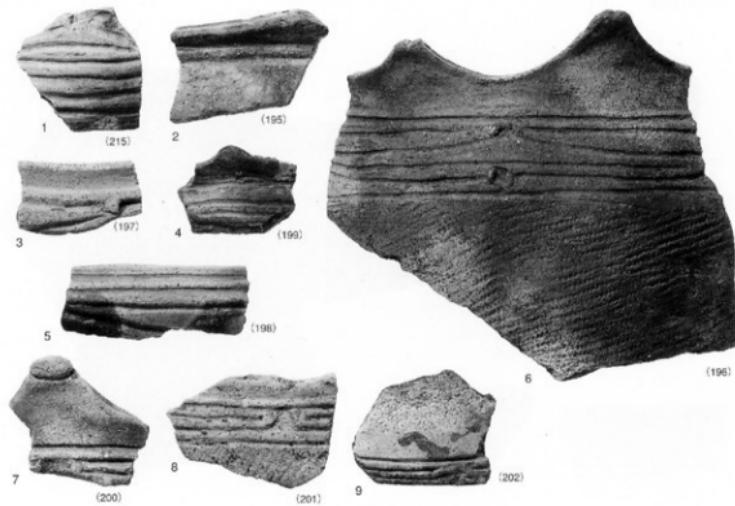
P.L. 18 山王廻遺跡出土土器

Jomon and Yayoi pottery from the Sanno-gakoi site



1 1区出土土器

1～8 603層

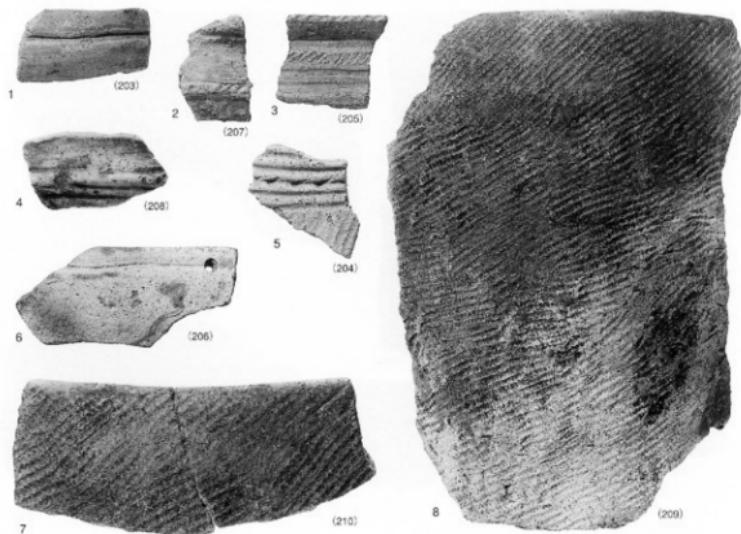


2 1区出土土器

1 604層 2～9 603層

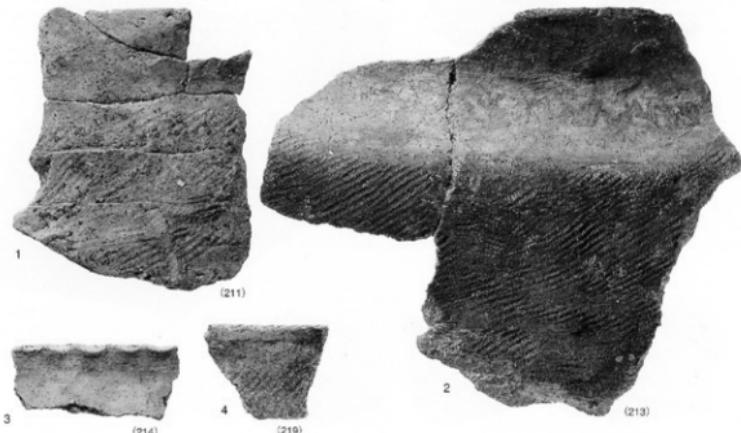
P L. 19 山王閣遺跡出土土器

Jomon and Yayoi pottery from the Sanno-gakoi site



1 I 区出土土器

1 ~ 8 603層

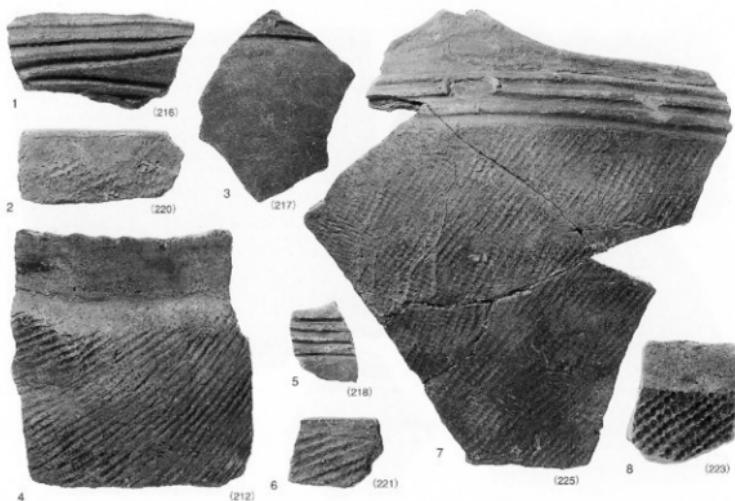


2 I 区出土土器

1 ~ 4 604層

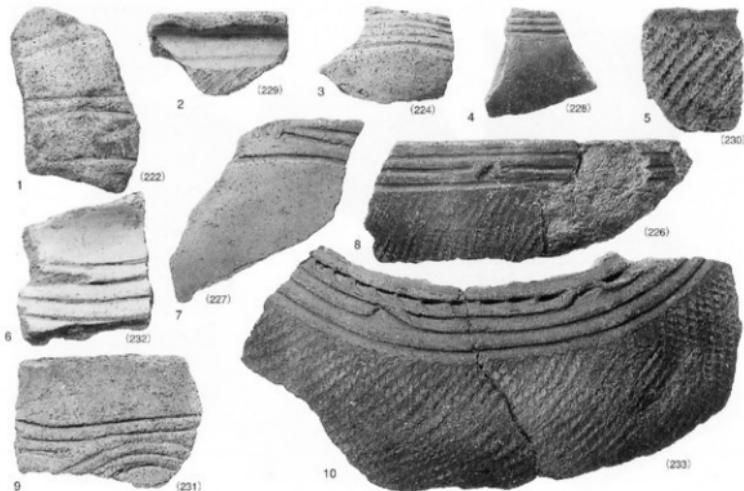
P L. 20 山王廻遺跡出土土器

Jomon and Yayoi pottery from the Sanno-gakoi site



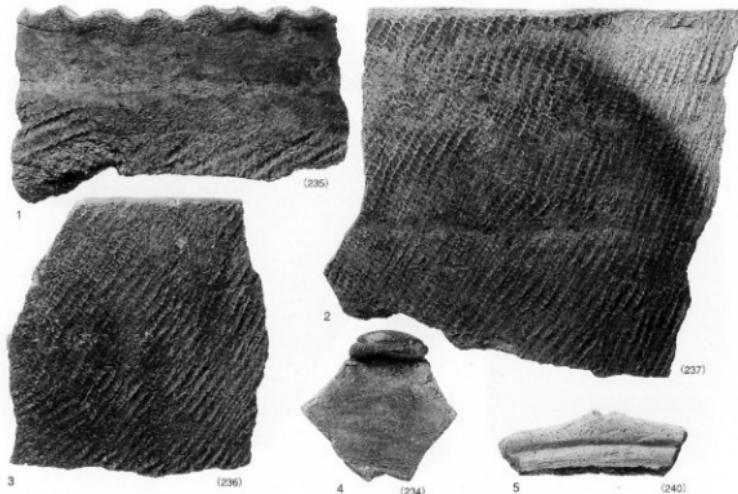
1 I区出土土器

1~6 601号 7·8 605a号



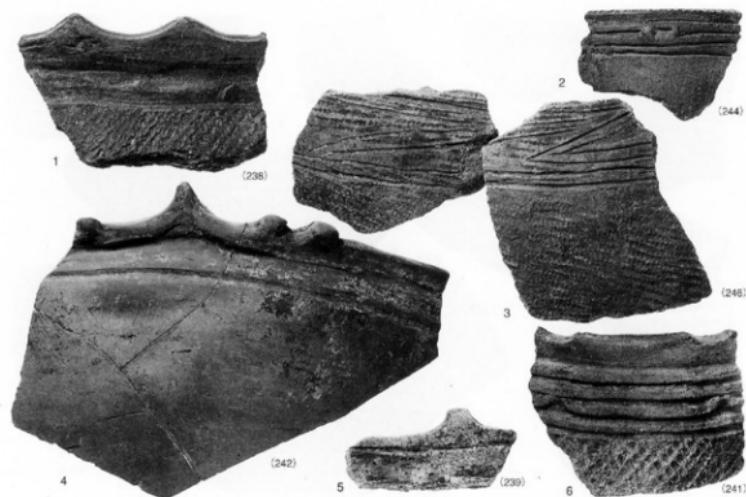
2 I区出土土器

1~5·7·8 605a号 6·9·10 605d号



1 I 区出土土器

1 ~ 3 ~ 4 606層 2 607層 4 606層 5 610層

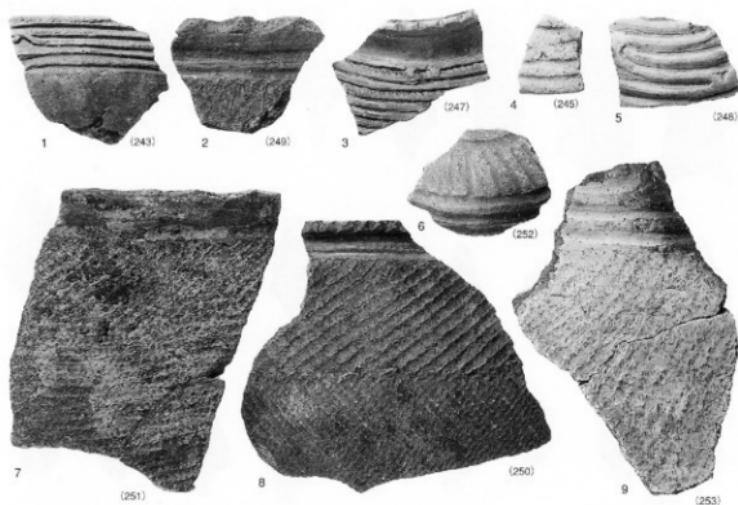


2 II 区出土土器

1 ~ 6 610層

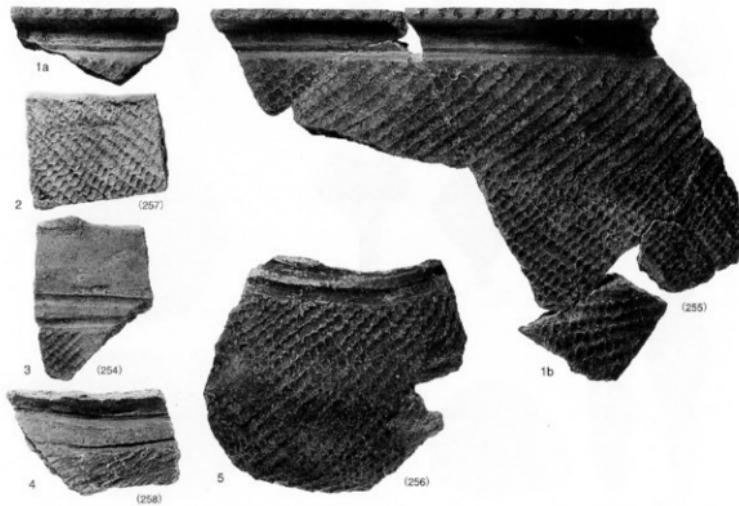
P L. 22 山王廻遺跡出土土器

Jomon and Yayoi pottery from the Sanno-gakoi site



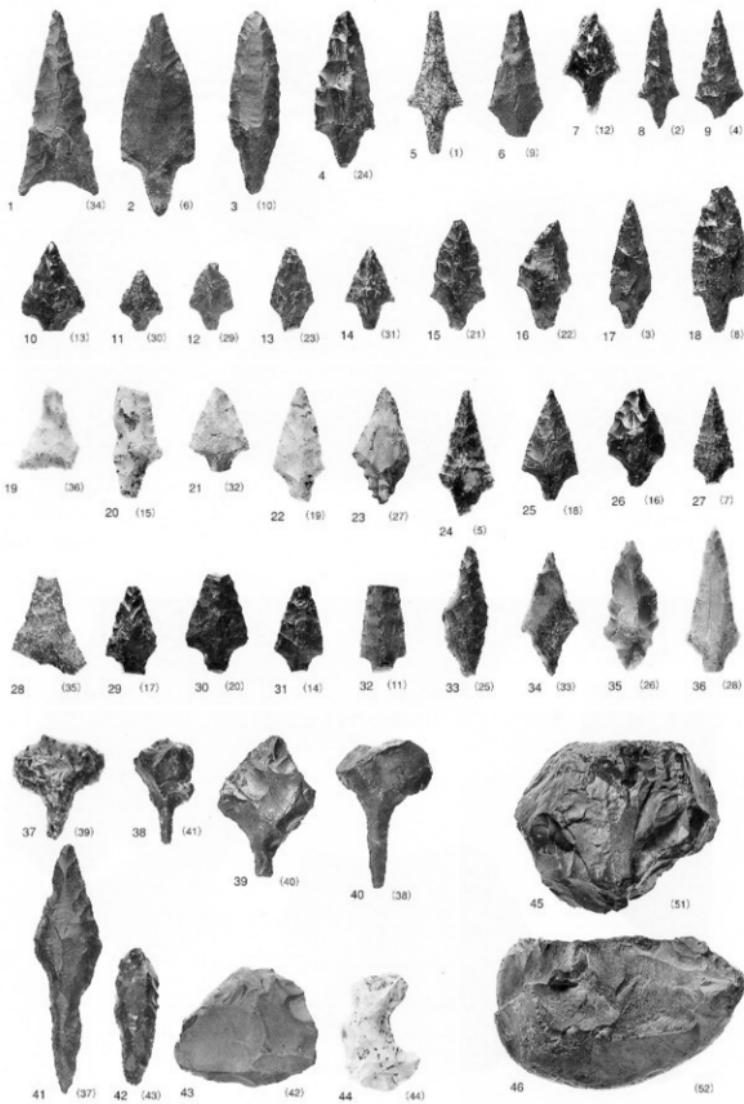
1 I区出土土器

1~8 610層 9 610a層



2 I区出土土器

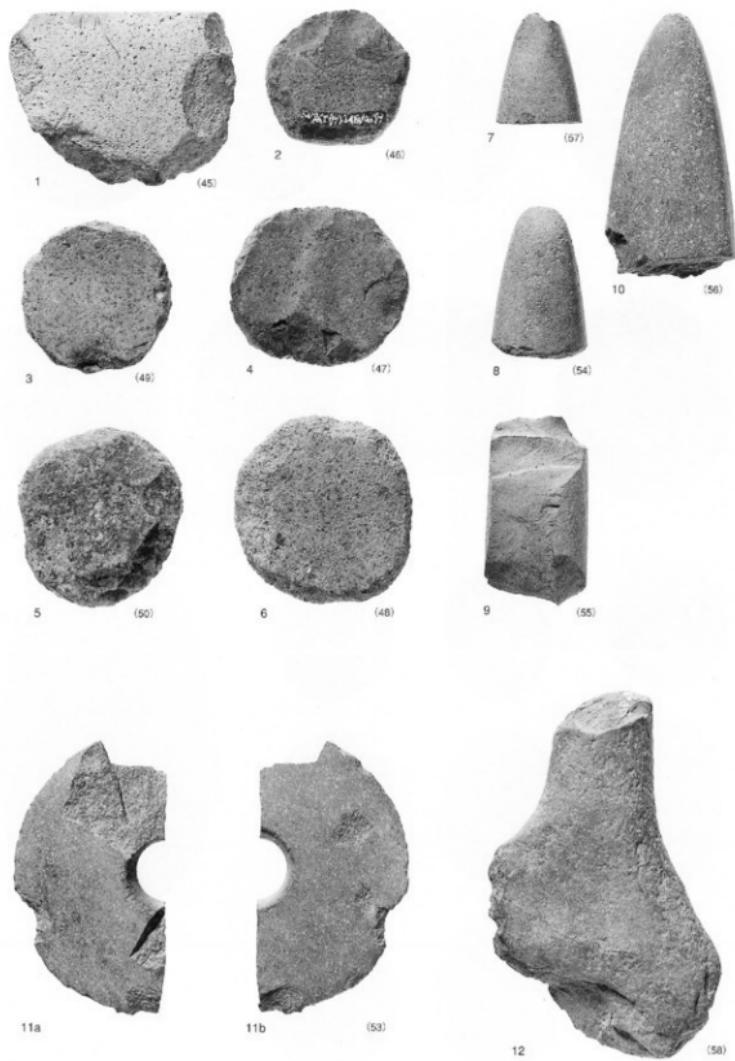
1~3・5 610a層 4 611層



P.L. 24 山ノ口遺跡出土石器

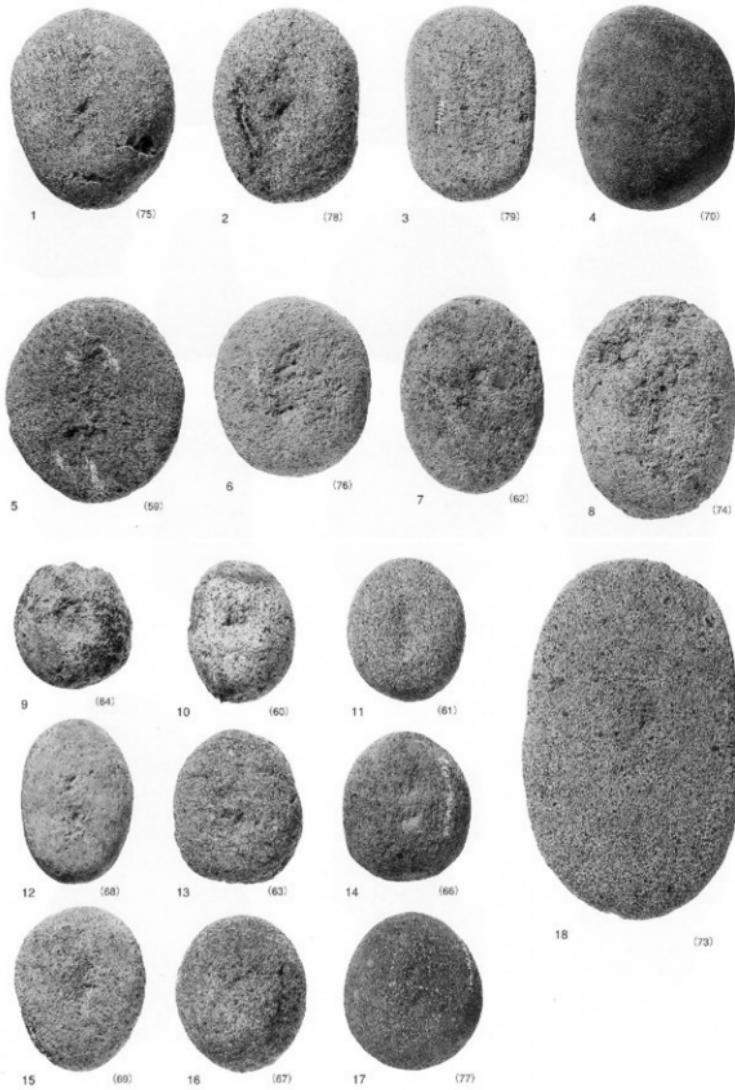
Stone implement from the Sanno-gakoi site

1~36 石頭  
37~41 石錐  
42~43 不定形石器  
44 黄形石器  
45~46 石板



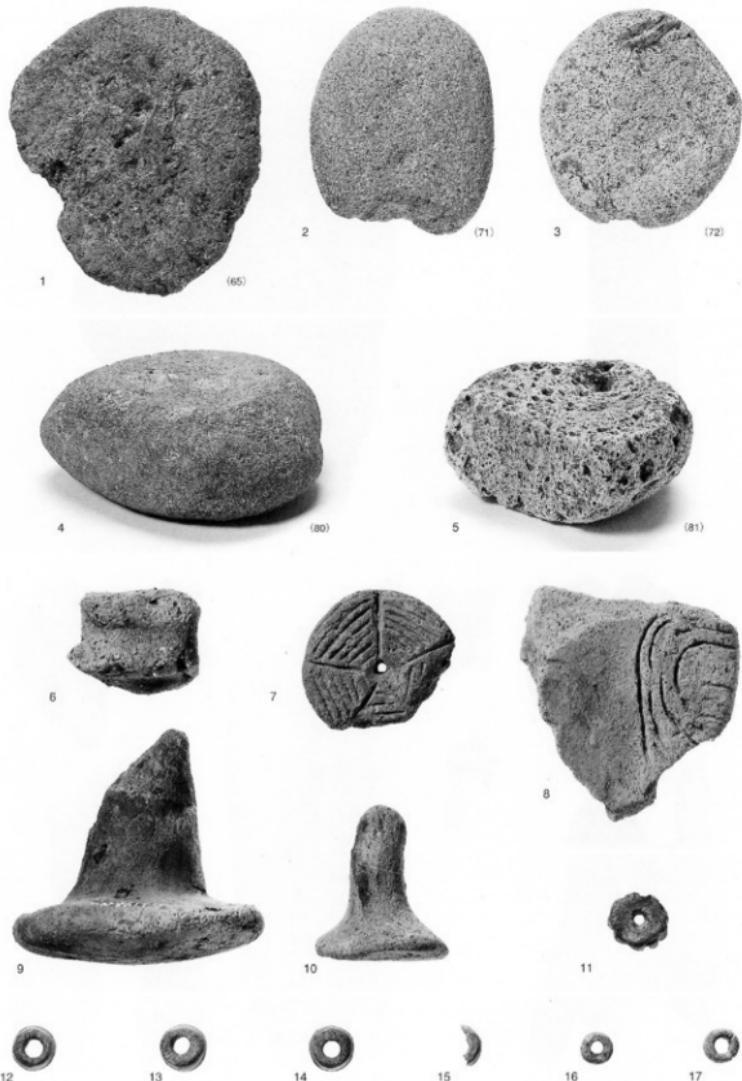
P L . 25 山王廻遺跡出土石器  
Stone implement from the Sanno-gakoi site

1 チョビングツール 2~6 円盤形石斧  
7~10 扇製作石斧 11 條状石斧 12 石錺



P L. 26 山王圓遺跡出土石器  
Stone implement from the Sanno-gakoi site

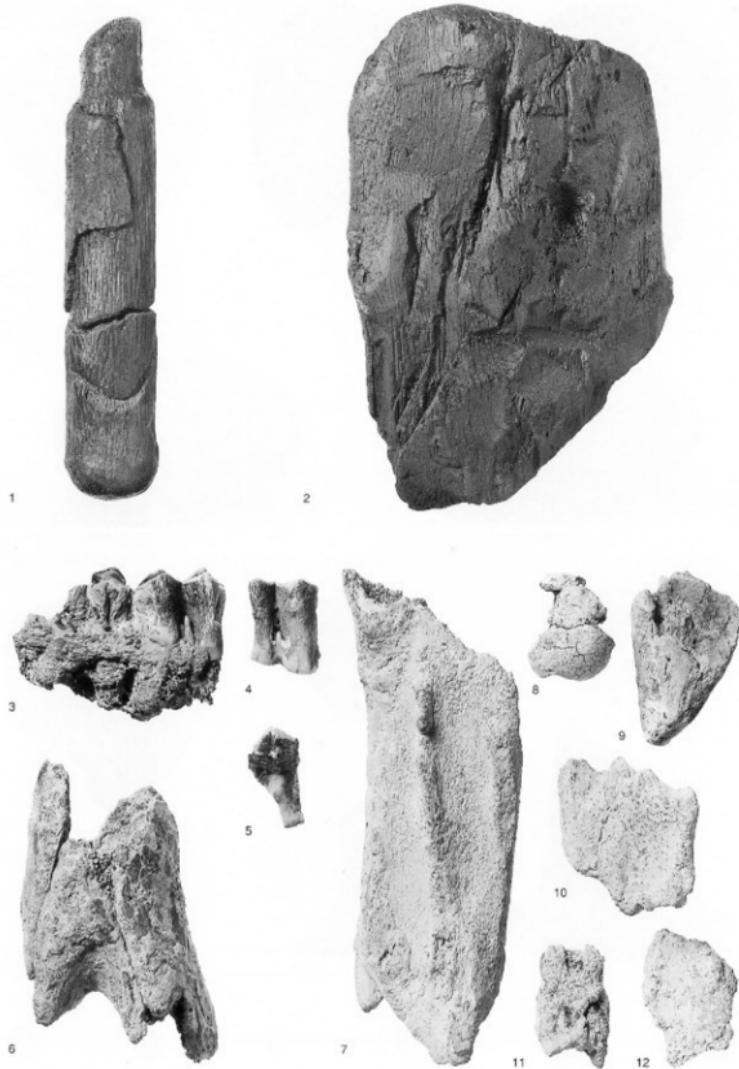
1~18 四石



P L. 27 山王園遺跡出土石器、土製品、石製品

Stone implement and Clay object from the Sanno-gakoi site

1 ~ 3 凹石 · 4 · 5 石皿 · 6 土器 · 7 荷鍾車  
8 土瓶 · 9 · 10 スタンプ状土製品  
11 土製小玉 · 12~17 石製小玉



P L. 28 山王廻遺跡出土木製品、動物遺存体  
Wooden manufacture and Mammal remains  
(*Cervus nippon*, *Sus scrofa*)

1 鋸件 2 加工材 3～7 ニホンジカ (3 下顎骨 (L))  
4・5 下顎骨部3大臼歯 (L) 6 下顎骨 (L) 7 頸骨 (L)  
8～12 ニホンジカあるいはイノシシ相当 (8 大胸骨 (L)  
不明) 9～12 四肢骨骨幹部破片

---

## 国史跡 山王団遺跡

### 発掘調査報告書Ⅱ

平成9年3月25日 印刷

平成9年3月31日 発行

発行 宮城県一迫町教育委員会  
栗原郡一迫町真坂字清水田河前5番地  
TEL 0228-52-2111

印刷 (株) 平電子印刷所  
福島県いわき市平北白土字西ノ内13  
TEL 0246-23-9051

---

